

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦畠遺跡

—市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は新潟県長岡市来迎寺字蒲畠889番地1ほかにおいて実施した浦畠遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は市道越路366号線道路改良事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認試掘調査に要した経費は文化財保護部局である越路町教育委員会（当時）が負担し、平成15年度同宝重要文化財等保存整備費補助金および平成15年度新潟県文化財保存事業補助金の交付を受けた。
また、本発掘調査に要した経費は原団体である長岡市が負担した。
4. 出土遺物には以下のとおり記載した。

(遺跡確認試掘調査)

調査地略号（UH）と調査年度（03）、遺跡確認試掘調査を示す略号（試）を組み合わせた「UH03試」に統いて、トレンチ番号と個別番号を付記した。

(本調査出土遺物)

遺跡略号（UH）と調査年度（07）とを組み合わせた「UH07」に統いて、

遺構覆土出土資料　　調査地点　－　遺構番号　－　個別番号

大グリット取り上げ　　調査地点　－　大グリット

個別取り上げ　　調査地点　－　個別番号（※全調査区通し番号）

5. 遺構番号は、調査地点、遺跡略号の後に、それぞれ別に通し番号を付した。
6. 遺構平面図は航空写真測量で作成し、一部、簡易遺り方実測でこれを補った。
7. 本書は本文と巻末図版（図版・写真図版）とで構成される。
8. 執筆分担は以下のとおりであり、最終的な編集は新田が行った。

第Ⅰ章・第Ⅲ章 新田康則（長岡市教育委員会）

第Ⅱ章1～4、5（2）（3）、6・第Ⅳ章・第Ⅴ章 石坂圭介（有限会社ベンタラボ）

第Ⅱ章5（1） 建部信也（有限会社ベンタラボ）

附編1 青木 豊（國學院大學文学部教授）

附編2 卜部厚志（新潟大学積雪地域災害研究センター准教授）

9. 本書の内容は先行する全ての報告・記載に優先し、本書の記述をもって正式な報告とする。
10. 調査の体制は以下のとおりである。

(平成15年度：遺跡確認試掘調査)

調査主体　越路町教育委員会　　教育長 丸山武士

調査担当　越路町教育委員会事務局　主事 新田康則

事務局　越路町教育委員会事務局（事務局長 田中正明）

調査補助員　荒川紀子・丸山京子

発掘作業員　金子正男・佐藤桂子・平沢新一・平沢タズ・目崎力一・横山勝次

整理作業員　丸山祐美子

(平成19年度：本発掘調査)

調査主体 長岡市教育委員会 教育長 加藤孝博
事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）
調査監督 長岡市教育委員会科学博物館主任 新田康則
調査担当 石坂圭介（有限会社ベンタラボ）
調査員 建部真也（有限会社ベンタラボ）
土木作業管理者 杉本和男（有限会社ベンタラボ）
調査補助員 青山朋子・茨木亞樹子・岡村圭子
発掘作業員 石黒リヨ・内山良子・大塚廣司・大塚マス・大塚道代・大塚みよ子・小川清一・
小野塚文雄・木根多美子・郷 功・小林重春・小林隆二・坂井英一・酒井ミヨ・
佐藤勇・佐藤伸夫・佐藤弘二・佐藤レツ・白井一二・白井清一・新保ナオミ・高橋 修・
高橋 一・田中啓司・田中 保・田中幸雄・田中康夫・富田政勝・永井重喜・
中沖直治・中静清志・中静英雄・中村明二・中村長五郎・西脇 清・長谷川 猛・
穂刈新一・星野信二・丸山チイ・丸山 昇・山田三夫・若林 実・鶴頭源三郎
整理作業員 茨木亞樹子・白井綾子

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

青木 豊・安藤正美・伊藤啓雄・内川隆志・卜部厚志・岡崎清子・岡崎国昭・大石圭介・春日真実・
金子拓男・倉石広太・小林達雄・小林 保・笹沢正史・佐藤雅一・品田高志・高橋 保・笹沢規朗・
滝沢 誠・田中洋史・辻本崇夫・利根与八郎・長澤展生・西田泰民・藤巻正信・松崎 相・前鳥 敏・
三ツ井朋子・山本哲也・渡邊裕之
國學院大學・株式会社信濃技術・永井工業株式会社・社団法人長岡シルバー人材センター越路支部・
新潟県教育庁文化行政課・新潟県立歴史博物館・新潟大学積雪地域灾害研究センター・
財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・パリノ サーヴェイ株式会社・株式会社みくに考古学研究所

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯·····	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境·····	2
1. 遺跡の位置と地理的環境·····	2
2. 遺跡周辺の歴史的環境と遺跡·····	2
第Ⅲ章 遺跡確認試掘調査·····	6
1. 調査の方法と経過·····	6
2. 調査の成果·····	6
第Ⅳ章 本発掘調査·····	14
1. 調査の方法·····	14
(1) 調査区とグリッドの設定·····	
(2) 遺物の取り上げと遺構の記録·····	
2. 調査の経過·····	14
3. 概要·····	16
4. 基本層序と各地区の堆積状況·····	16
5. 各地区の遺構·····	16
(1) A地区の遺構·····	
(2) B地区の遺構·····	
(3) C地区の遺構·····	
6. 各地区的出土遺物·····	30
(1) A地区的出土遺物·····	
(2) B地区的出土遺物·····	
(3) C地区的出土遺物·····	
第V章 まとめ·····	40
註・参考文献	
第VI章 附編·····	42
1. 浦畠遺跡出土の和鏡について	
2. 長岡市浦畠遺跡における火山灰分析	

挿図・表目次

第1図 試掘調査の範囲	1	第14図 C-S D 3出土縄 長さ-重量分布	25
第2図 道路の位置	3	第15図 C地区北側遺物分布図①	26
第3図 周辺の道路	5	第16図 C地区北側遺物分布図②	27
第4図 試掘調査トレンチ配置図	7	第17図 出土和銅実測図	42
第5図 時期ごとの分布	8		
第6図 試掘調査出土遺物	9		
第7図 23T 4全体図	10	第1表 本発掘調査工程表	15
第8図 23T 4遺物分布図①	11	第2表 道構観察表	34
第9図 23T 4遺物分布図②	12	第3表 出土土器観察表	38
第10図 23T 4遺物分布図③	13	第4表 出土石器類観察表	39
第11図 基本層序	17	第5表 出土金属製品観察表	39
第12図 A地区遺物分布図	19	第6表 新潟県と鏡出土一覧	43
第13図 B-S K 1出土縄 長さ-重量分布	23	第7表 基本土層③ T P 2北壁断面	50

図版目次

図版1 道構全体図	図版21 B地区側別道構図④	図版38 道路全景写真
図版2 A地区道構全体図	図版22 B地区植栽列全体図	図版39 道路完掘状況写真①
図版3 A地区道構平面図①	図版23 B地区側別道構図⑤	図版40 道路完掘状況写真②
図版4 A地区道構平面図②	図版24 C地区道構全体図	図版41 A地区調査写真①
図版5 A地区道構平面図③	図版25 C地区側別道構図①	図版42 A地区調査写真②
図版6 A地区道構平面図④	図版26 C地区道構平面図①	図版43 A地区調査写真③
図版7 A地区側別道構図①	図版27 C地区道構平面図②	図版44 B地区調査写真
図版8 A地区側別道構図②	図版28 C地区側別道構図②	図版45 C地区調査写真①
図版9 A地区側別道構図③	図版29 C地区側別道構図③	図版46 C地区調査写真②
図版10 A地区側別道構図④	図版30 C地区側別道構図④	図版47 出土遺物写真①
図版11 A地区側別道構図⑤	図版31 C地区側別道構図⑤	図版48 出土遺物写真②
図版12 A地区側別道構図⑥	図版32 C地区側別道構図⑥	図版49 出土遺物写真③
図版13 A地区側別道構図⑦	図版33 A地区出土遺物①	図版50 出土遺物写真④
図版14 A地区側別道構図⑧	図版34 A地区出土遺物②・B地区	図版51 試掘調査写真①
図版15 A地区側別道構図⑨	出土遺物①	図版52 試掘調査写真②
図版16 A地区側別道構図⑩	図版35 B地区出土遺物②・C地区	図版53 試掘調査出土遺物写真
図版17 B地区道構全体図	出土遺物①	
図版18 B地区側別道構図①	図版36 C地区出土遺物②	
図版19 B地区側別道構図②	図版37 C地区出土遺物③	
図版20 B地区側別道構図③		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成14年12月1日に越路町役場企画振興課から越路町教育委員会（当時、以下、町教委と略称）に、町内来迎寺浦畠地区における道路改良及び緑地整備に係る埋蔵文化財の取り扱いについての協議依頼があつた。開発計画区域は、①周辺に朝日遺跡や立矛遺跡などが分布する、②段丘崖に向背する緩斜面地である、などの点から遺跡包蔵地である可能性が高いと判断し、町教委は遺跡確認試掘調査（以下、試掘調査と略す）を実施して遺跡包蔵の有無を確認し、埋蔵文化財保護行政上の措置を講ずる必要がある旨を回答した。その結果、平成15年から2ヵ年度で試掘調査を実施する計画が立てられた。

町教委は、平成15年10月21日付け越教第475号で文化財保護法（以下、法と略す）第58条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し、10月27日から12月18日の期間で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、南北約240m・東西約130mに及ぶ新たな埋蔵文化財包蔵地を確認した。当該地の小字名から「浦畠遺跡」として、平成16年6月18日付け越教第313号により周知化の手続きをとった。そして、調査結果を協議資料として遺跡の取り扱い協議を進め、遺跡範囲における緑地整備については保護盛土層を設定するなどして遺跡の現状保存を図りつつ、一方の道路部分については可能な限り影響範囲を少なくする、という方針を確認した。

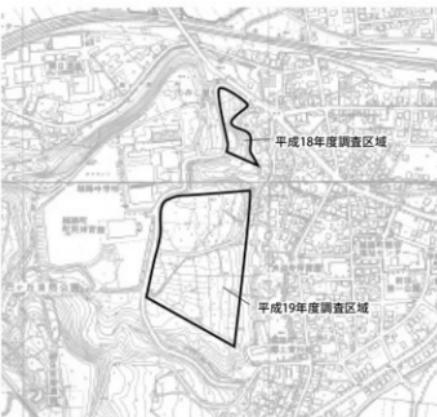
平成16年度、残り範囲に対する試掘調査を計画していたが、開発事業が遅延し、調査も延期となった。その後、平成16年10月に発生した新潟県中越地震や、平成17年1月の市町村合併に伴い、全体計画の見直しがかかられた。

その後、平成17年度末には事業の方向性が固まり、道路部分の事業が先行して実施されることとなった。事業担当である長岡市役所越路支所建設課との協議で、未調査の区域については平成18年秋に試掘調査を実施する方向で双方が準備を進めることを確認した。

平成18年9月5日付長越建第87号で本発掘調査の依頼があった。また、試掘調査を実施していない部分については10月に試掘調査を行なうこととなった。

長岡市教育委員会は平成18年10月2日付長教博第263号により県教委教育長に対し、法第99条第1項の規定による発掘調査の着手を報告し、10月4日に調査を実施した。この調査新たな遺跡が発見されなかつたことから（調査の概要については〔新田2007〕参照）、本発掘調査の対象区域を浦畠遺跡内に確定し、調査の準備に入った。

平成19年3月22日付長教博第465号で県教委教育長に対して法第99条第1項の規定による発掘調査着手を報告し、本発掘調査を開始した。



第1図 試掘調査の範囲 (S=1:1000)

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の位置と地理的環境（第2図）

浦畠遺跡が所在する長岡市米迎寺周辺は、新潟平野の南端に位置し、当地から見て南側には東頭城丘陵と魚沼丘陵を中心とする丘陵地帯が展がり、北側には信濃川の河口へと新潟平野が続いている。信濃川も丘陵地帯から平野部に流れ込んでいるが、この間信濃川に沿ってところどころに河岸段丘が発達している。当遺跡も信濃川左岸の河岸段丘（越路原Ⅲ面）上に形成されたものである。

米迎寺周辺の河岸段丘は、近年、高位から順に、越路原Ⅰ面、片貝面、越路原Ⅲ面、潮音寺面の4面に区分されている〔渡辺2007〕。これらについては、ローム層中の火山灰の対比から段丘の形成年代が推測されており、それによると、越路原Ⅰ面は13～15万年以前、片貝面が10万年前後、越路原Ⅲ面はおよそ55万年前頃、潮音寺面は3万年前、に形成されたものである。このうち越路原Ⅰ面と片貝面は南北に細長く分布する段丘であり、これに対し越路原Ⅲ面は越路原Ⅱ面の北東側の狭い範囲に分布している。当遺跡は越路原Ⅲ面に立地し、さらに越路原（越路原Ⅰ面～片貝面～越路原Ⅲ面の総称）の北東端に位置していることから、特に東側への眺望の良い立地にある。

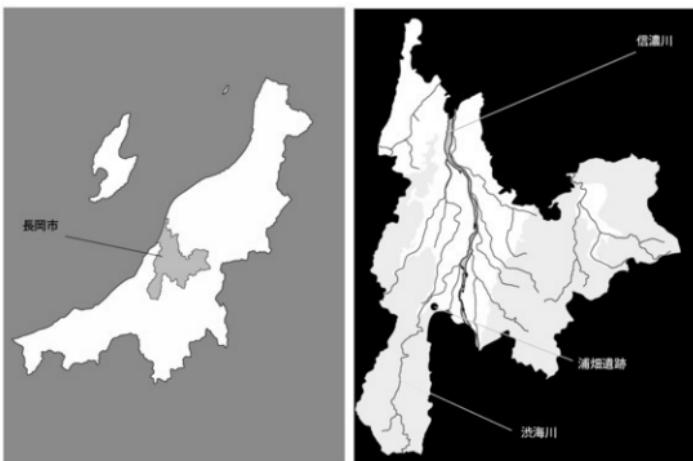
越路原には段丘高位から東西に向かって幾筋もの谷や沢が開削されている。西側へ下る沢には権ヶ沢があり、その周辺には上並松・中山・朝日原などの遺跡が集中する。また東側へは東沢があり、この周辺にも立矛・朝日遺跡という著名な遺跡が分布する。このことから縄文時代から弥生時代にかけての越路原の水利条件の良い地点が重要な集落地として繰り返し選地されていたことが分かる。今回の調査対象地についても、その北端及び南端がそれぞれ沢に臨んでいる。しかしながら、両沢ともこの地点（越路原Ⅲ段丘）では深く急な斜面を伴っている。そのため当地自体の水利条件は良くないと言えよう。

現在の米迎寺の元町集落は越路原の裾に沿って形成されている。この集落のあるレベルよりも一段上の片貝面・越路原Ⅲ面の縁辺には、現在、安浄寺や天満宮などの寺社や古い家系の墓所が点々と見られる。また当地の一部にも墓地があるが、これも段丘面の東側・段丘崖に近い区域にまとまる。ここは既に述べたように東方に開け、米迎寺や浦などの集落、信濃川、そして対岸の風景も見渡すことができる。その一方で、遺跡周辺（段丘面の山側）は、ほとんどが畑地であり、宅地化や開田もされずに残してきた。より高位の越路原Ⅰ面と片貝面の大半が昭和30年代に開田されたのとは対照的と言ってよく、これはやはり上述した水利条件の悪さと関係しているだろう。

2. 遺跡周辺の歴史的環境と遺跡（第3図）

浦畠遺跡は主に14～15世紀に営まれたものであるため、ここでは中世を中心に周辺地域の歴史的な環境について述べることとする。

中世の米迎寺周辺は、紙屋庄の一部であった。紙屋庄の莊城は、長岡市の深才地区から米迎寺地区そして小千谷市の片貝、高梨まで及んでいたといふ。以下『越路町史』〔越路町2003〕によれば、同庄は11世紀後半に摂閥家所領として成立し、鎌倉時代にかけて平等院の管理・運営費を提供した莊園であった。鎌倉時代には得宗家（北条氏）が紙屋庄の地頭職を持っていたといふ。代官が派遣され莊園を管理したことであろう。その後、南北朝期になると（建武三年）、平等院領から実相院領に代わったという記録があり（異説あり）、さらに永享三年には、陸奥国芦川の足利満直に与えられたという（異説あり）。地頭職の方は、南



第2図 遺跡の位置

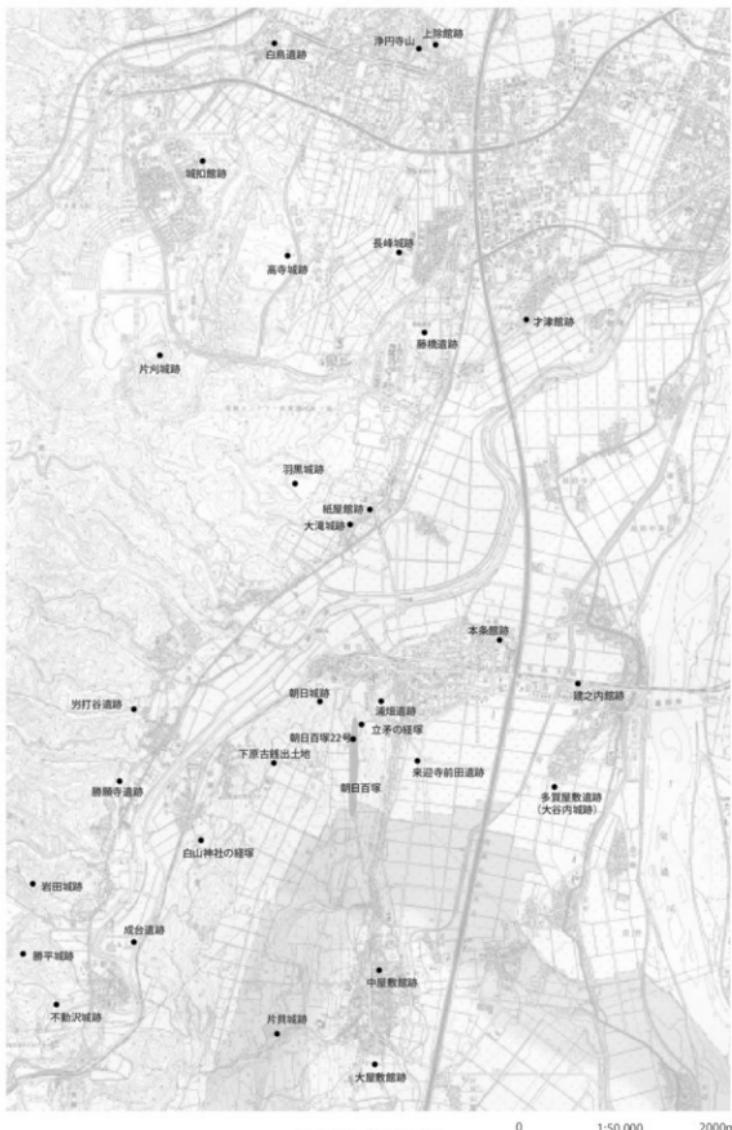
北朝初期に足利尊氏が大友氏泰に与えたが、動乱期には一時南朝方の風間氏の手に渡り、再び大友氏に渡ったという（異説あり）。この間の数々の異説（中央での異なる記録）が存在するのは、中央権力の莊園支配が形式的なものになったことも理由の一つと考えられるという。さらに、15世紀以降は、中央での記録そのものがなくなってしまう。この頃、越後守護として入府した上杉氏は、長尾氏と共に在地支配を強め、戦国大名として成長してゆく。しかしながら、その後も御館の乱、越後一揆など、戦国期から近世初期に至つてもなお、戦乱が繰り返され、次々に支配者が変わってゆく。

このように見えてくると、中世の越後、そして中越地域は、鎌倉時代には得宗家、南北朝時代には南朝方というように、戦乱の際の敗者側の勢力下にあったこと（従って戦乱後支配者が一気に交代する）、近世初期に至るまで政権が安定せず繰り返し支配者が変わったことが特徴として挙げられるであろう。

ここで、先に見た中央側の記録から在地の動向を想定すると、①11世紀後半に、深才-来迎寺-片貝・高梨地区で一定の開発が進み、集落や生産遺跡などが形成されていったであろうこと、②それが鎌倉時代、南北朝時代と継続していくこと、③そのうちに莊園領主の領有は形式的なものになってしまい、15世紀半ば以降は紙屋庄の領有を伝える資料はなくなってしまうこと、つまり、在地勢力による権利と支配がいよいよ強くなっていたことが伺える。

しかしながら、この文字資料に対応する遺跡が現在の長岡市-小千谷市域に通時に発見されているわけではない。特に、11世紀は長岡市域を見わたしても遺跡、土器資料ともほとんど発見されていない空白期になっている。①からすれば、紙屋庄城にも一定の生産力があったはずであるが、むしろ9世紀代の遺跡が多い傾向がある。12～13世紀になって、ようやく多賀屋敷遺跡から当該期の珠洲焼の出土例が知られる。当地は大谷内城跡とされているが、周辺の地形から鎌倉時代の居館跡と推測される。この他、才津館跡、藤橋遺跡、紙屋館跡、本条館跡、米迎寺前田遺跡、中屋敷館跡、大屋敷館跡などにおいて堀跡が復元され居館地跡と推定されている。当地付近では十樂寺白山神社の経塚が鎌倉時代の構築と推測される。14世紀の遺跡もあまり明確ではない。高寺城跡、岩田城跡は南北朝～室町時代の造営と考えられている。また、勝願寺遺跡からは14世紀の珠洲焼が出土しているが、遺跡の性格は明らかになっていない。15世紀以降になるとややはっきりした例が知られる。上除館跡は発掘調査によって15世紀前半から16世紀にかけての有力者の居館跡であることが判明している。成台遺跡も同様の時期の遺跡である。另内谷遺跡も漆塗りの小形銅製碗が出土しておりこの頃の宗教関連遺跡と推測されており、また、白鳥遺跡や当地に近い下原古銭出土地もこの頃に埋められた蓄蔵鉢と考えられている。戦国時代の山城では、片刈遺跡、勝平城跡、樹形城跡などが著名である。

さて、当遺跡付近に目を転ずると、上述した白山神社経塚の白磁四耳壺は宋の民窯で焼かれた舶来品であり、日本国内の例では最も古い資料である。このような資料の存在は、鎌倉時代の十樂寺付近に、これに見合う有力者もしくは寺院が存在していたことを示すものであろう。また、下原古銭出土地からは、珠洲焼の壺に納められた1311枚の渡来銭が発見された。多量の備蓄銭は寺院境内や交通の要衝から発見されることがあるから、この事例も当地の性格を暗示している可能性がある。また、越路原では朝日百塚が有名であり、昭和23年には、148基の塚が知られたという。朝日百塚は江戸時代には由来が分からなくなっていることからその築造開始年代は中世に遡りうるものであろう。塚群には直線的に並ぶ塚、これから外れる塚、経塚と伝えられる塚など、幾種類かの性格の違いが認められ、また築造年代も異なるのだろう。これは、当地が中世において長らく宗教的な性格を強く帯びた地域であったことを示しているのではないだろうか。



第3図 周辺の遺跡

0 1:50,000 2000m

第Ⅲ章 遺跡確認試掘調査

1. 調査の方法と経過

調査の方法 試掘調査はトレンチ法で行った。調査トレンチは合計39ヶ所、調査面積は約1230m²である。これは開発対象面積約48,000m²に対して約2.6%にあたる。

調査地は信濃川左岸の越路原Ⅲ面の東端段丘崖に向かう緩斜面地であるため、旧地形把握を射程に入れ場合、東西方向に調査トレンチを設定するのが望ましいものと判断された。調査実施時点では用地買収が完了していない状態であったため、調査中から調査後にかけて実施される土地境界の確認及び用地測量に備えて、地境が不明瞭にならないように調査を進める必要があった。しかし、土地利用（区画）が東西方向に細長い畠地が主であったため、それほど大きな制約を受けることなく調査トレンチを設定することができた。微地形把握を容易に行い、かつ小規模遺跡の発見率を高めるため、ロングトレンチを用いて調査を行うこととした。

調査はバックホウ0.15m級と人力掘削を併用して実施した。重機での掘削は表土層・盛土層を対象とし、それより下位の層はジョレンなどを用いた人力作業で面的に掘り下げた。遺物の出土情報及び遺構図は簡易やり方実測で記録し、用地測量用に設置された基準点を利用して座標値を与えた。記録写真の撮影には、キャノンEos-Kiss 5（レンズ28-90-300mm）とコニカ現場監督28（レンズ28mm）を併用し、35mmリバーサル・フィルムと35mmカラー・フィルムを使用して記録した。

調査の経過 10月27日に調査機材を搬入し、翌28日より掘削を開始した。11月13日、24T 4にて焼土を伴って土師器が集中的に出土した。この部分についてはトレンチを拡張し、12月1日から15日にかけて調査を行なった。6日以降は積雪など天候不順が続き、11日と15日しか調査日程をとることができなかつた。このため、トレンチを南側に再拡張する予定であったが断念した。17日に調査トレンチの埋め戻しを完了し、作業小屋や機材を撤収した。18日に重機を搬出して試掘調査を終了した。

2. 調査の成果（第4図～第10図）

試掘調査の結果、新たな埋蔵文化財包蔵地を確認した。「蒲烟遺跡」として周知化したのは、南北約240m×東西約130mの範囲であり、縄文時代晚期・古代・中世・3時期にわたる遺跡の複合である（第4図）。

調査区北西城（7T・8T・9T・10T・11T）と南東城（2T・1T・17T・15T・16T・29T・26T・23T 1・23T 2・5T・20T）については、耕作土層の下は地山層（黄褐色風化火山灰土層）であり、遺物は遺構覆土などからの出土である。もともと黒ボク土層の堆積が厚くではなく、長年にわたる畑作の影響で、自然堆積の黒ボク土層が消滅してしまったと判断するべきだろう。

一方、北東城（6T・9T・32T・33T）は緩い谷地形であり、黒ボク土層の堆積が良好であった。また、南西城（3T・4T・24T 2・25T・23T 3・23T 4）は地山層の傾斜よりも現況地表面の傾斜の方が緩やかである。つまり、西に行くほど堆積が良好になる傾向が強い。

縄文時代の遺物は5T・9T・11T・23T 2・23T 3・32Tから出土している。調査区域に点在するような出土状況で面的な広がりではなく、非常に客体的な在り方を示す（第5図上段）。西側に朝日遺跡（晚期中葉を主体とする集落跡）が近接し、集落外縁の単発的な活動痕跡であると推測される。出土遺物は小破片がほとんどだが、9Tの中央部から出土した壺形土器（第6図7）は完形に近い状態で單体出土している。



第4図 試掘調査トレーン配置図

S = 1:5000

この土器は胴部上半に文様帯をもち、磨消繩文技法が用いられる。文様帯の中に対向する三叉文を施し、それによって作出された空間に渦巻様の沈線文を描く。また、沈線などに赤彩痕が確認でき、少なくとも文様帯の中は朱彩されていたと推測される。器形と文様、胎土の状況から大洞C1式併行に位置づけることができる。ただし、文様は亀ヶ岡式の規格から外れており、在地の土器であろう。佐野式や御経塚式の影響を含め、今後の検討課題となる。

古代の遺物は18T・23T 1・23T 3・23T 4と5T・9T・17Tから出土している。調査区域南側に偏在する傾向が見られる（第5図中段）。また、前者は7世紀末～8世紀前半期、後者からはロクロ成形の土師器が出土している。

23T 4では多量の遺物が出土した（第7図～第10図）。遺物は約4×3mの範囲に集中して出土し、土師器片・刀子や縄が含まれているが、そのほとんどは土師器片である。また、焼土集積2基、土坑2基（1基はプランを確認）を伴っていた。焼土については現位置での焼成行為に伴うものではなく、二次堆積によって形成されたものである。

土師器には長甕・小甕などの器種が多く、内面黒色土器も含まれる（第6図11～22）。7世紀末～8世紀前半に帰属するものと推測され、旧越路町域において初見となる。

全体的に接合率は高くなかったが、出土状況から共時性の高い廃棄が看取できる。また、復元率の比較的多かった資料が示す出土状況は、個体ごとの分布のまとまりを示し、小廃棄が集積した状況が窺える（第9図・第10図）。

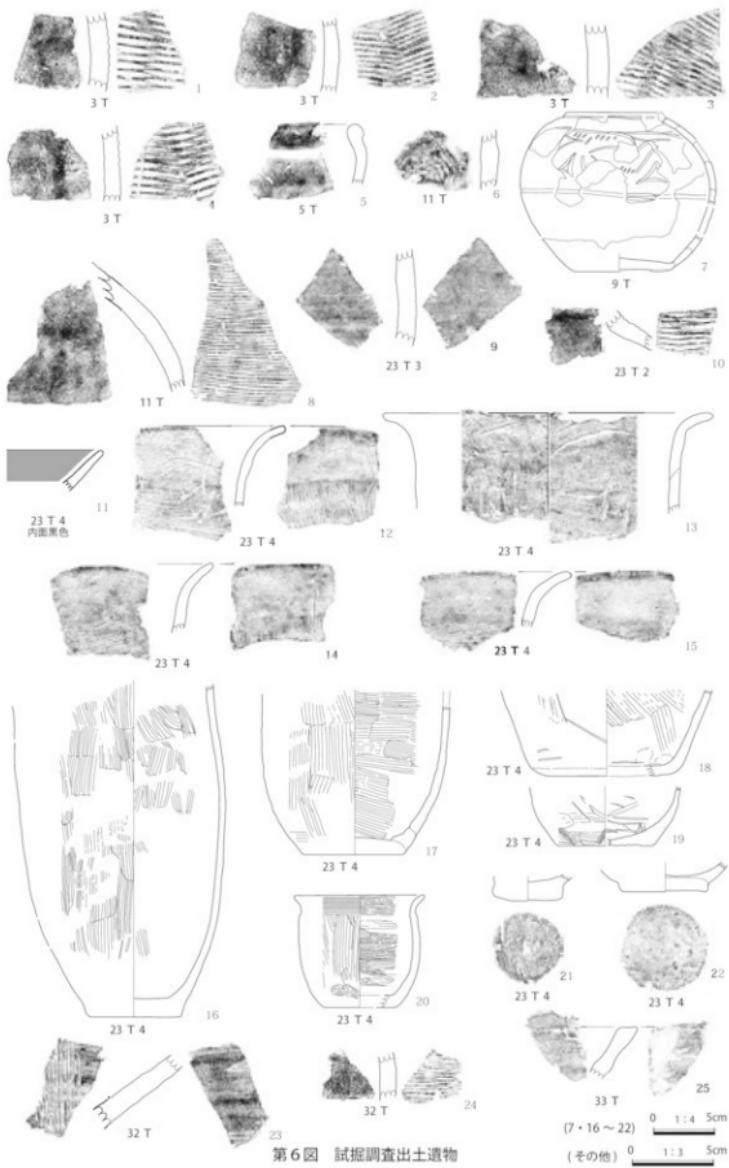
須恵器など他の遺物をほとんど含まず、土師器で組成されるという出土状況は特異である。遺物が落ち込み状の地形から住居跡への廃棄現象である可能性もあるが、その性格については次の調査機会に俟ちたい。

中世の遺物は3T・4T・11T・12T・23T-2・23T 3・32T・33Tから出土している（第5図下段）。調査対象区域の広範囲にわたってこの時期の遺物が出土した。調査において検出された溝や土坑などの分布は、この中世の遺物分布と重なりをみせており、これらの遺構も概ね同時期のものと推測される。

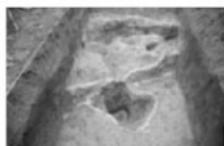
珠洲焼の甕（第6図1～6・8～10・23）や片口鉢（第6図24）の他に、越前陶器などが出土している。珠洲焼はおよそ吉岡編年IV期に含まれる資料であろう。



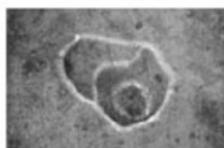
第5図 時期ごとの分布



第6図 試掘調査出土遺物



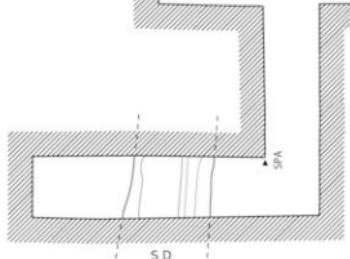
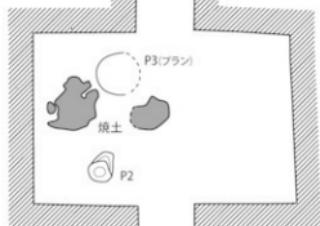
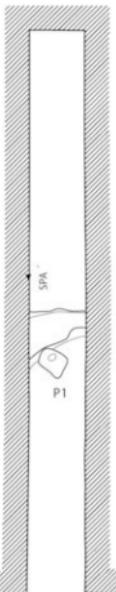
P 1 (西から)



P 2 (南から)



P 3 プラン (南から)



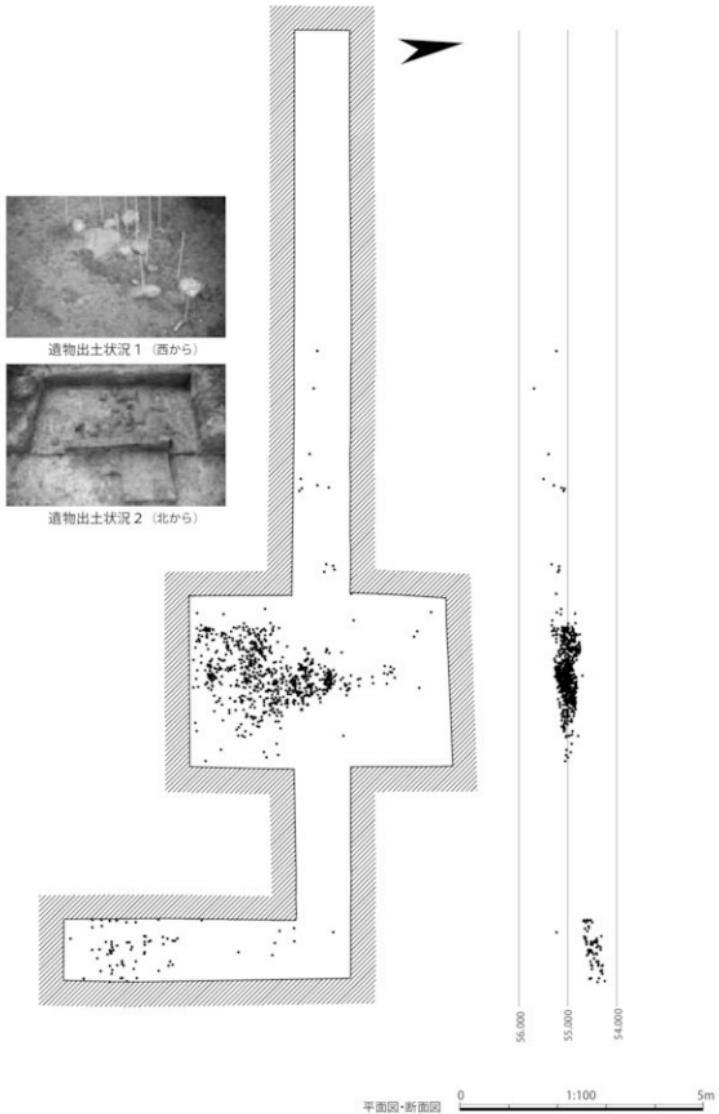
1:表土
2:黒褐色土層
3:移層
4:黄褐色風化火山灰土層

55.000 SPA

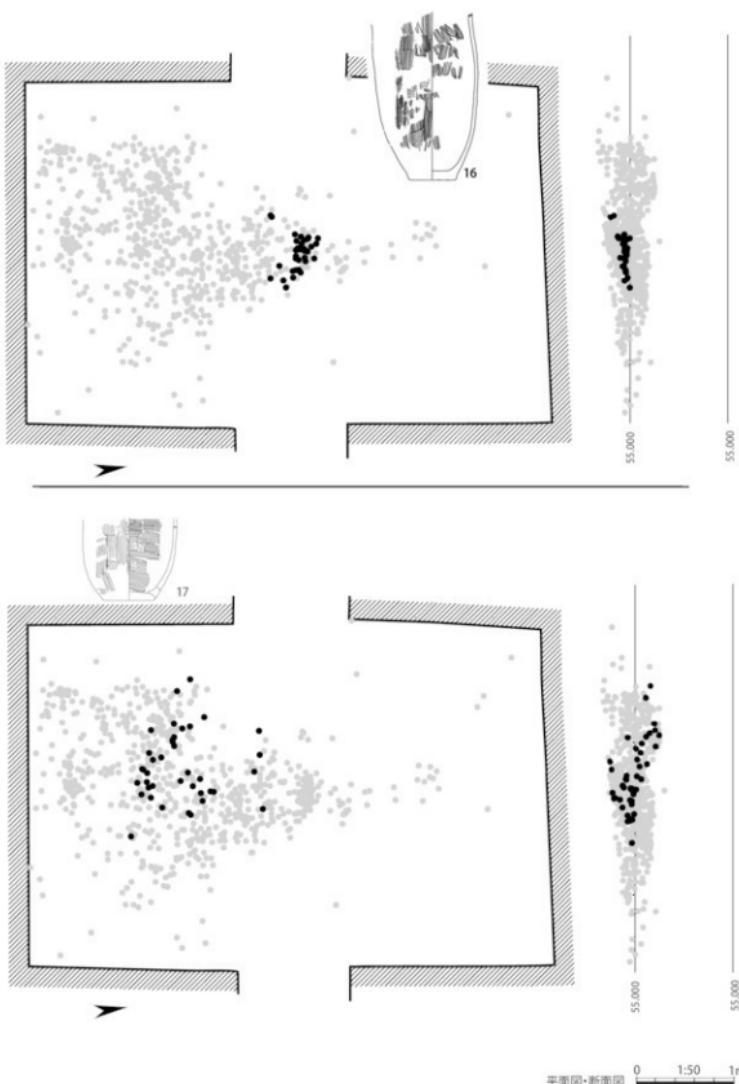


平面図・断面図 0 1:100 5m

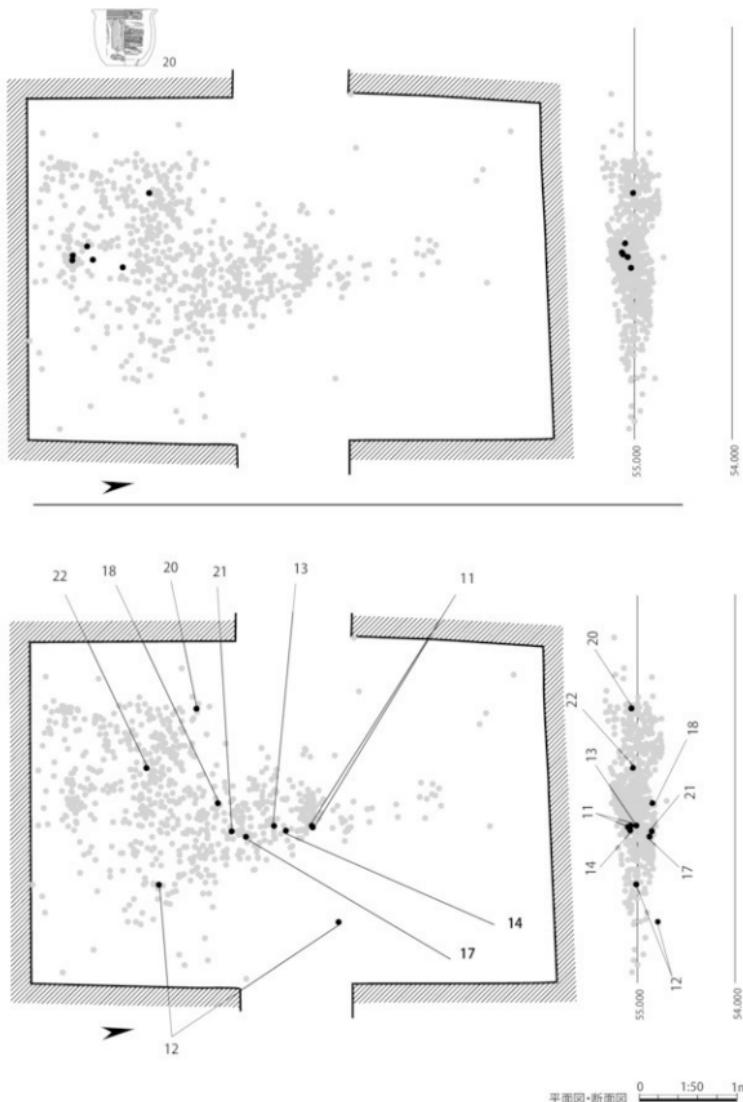
第7図 23T 4全体図



第8図 23T4 遺物分布図①



第9図 23T4遺物分布図②



第10図 23 T 4 遺物分布図③

第IV章 本発掘調査

1. 調査の方法

(1) 調査区とグリッドの設定 (図版1)

調査区は試掘調査によって遺物・遺構が発見されたトレンチの位置と、今回道路が敷設される範囲とを考慮して設定した。大きく3地区に分かれ、9T・12T・32T・33Tのある北側の範囲をA地区とし、1T・2T・15～17Tのある南側西部をB地区、3T・26T・5Tなどの位置する南側東部の範囲をC地区とした。なお、試掘調査で最も遺物が集中的に出土した23T-4周辺付近は調査対象外である。

測量用のグリッド杭は、主にB地区及びC地区に平行するよう任意で設定した10m方眼を大グリッドとした。各グリッドの名称は、西から東へアルファベット、北から南へアラビア数字を用いて示した。

(2) 遺物の取り上げと遺構の記録

遺物の取り上げに際しては、原則として測量会社の協力を得て光波測量を行い、ドット記録を取った。しかしながら、掘削の際に原位置が不正確になったもの等については、遺構ごともしくはグリッドごとに取り上げた。遺構平面図については主に航空写真測量によって作成した。ラジコンヘリを飛ばし、デジタルカメラで撮影した画像を三次元解析しCADによる図化を行った。この図はDWG形式、AI形式の2形式で保管している。これについても測量会社の協力を得た。この航空写真測量は調査の終盤に一回だけ実施する予定であったが、それ以前に失われてしまうものについては、簡易やり方実測によって記録した。例えば、B地区SK1の覆土中の縄の分布図、A地区的焼土遺構(SX1)などである。また、土層断面図は全て簡易やり方実測で記録した。この手取りの平面図・断面図の縮尺は1/10を原則としたが、1/20で記録したものもある。なお、A地区で発見された井戸状遺構については、深度が深く掘削による土砂崩落等の危険が予想されたので、土層断面図の記録を途中で切り上げ、航空写真測量実施後バックホーによって掘り方を壊しながら掘削し底面を検出するに留めた。

写真撮影には一眼レフカメラと一眼レフデジタルカメラを併用し、35mmリバーサル・フィルムとJPEG形式で記録した。また、上記した航空写真測量の際、同時に中型カメラ(カラーネガフィルム使用)による空中写真撮影も行った。

2. 調査の経過

3月26日から調査員1名、作業員3名、重機オペレーター1名で表土剥ぎを開始し、A、C、B地区的順序で作業を進めた。A地区北端では30cmほどで遺物包含層であるII層を確認できたが、南に進むにつれ搅乱が顕著になった。このため、バックホーによる掘削と人力による確認とを交互に行い、搅乱層の除去につとめた。C地区では、表土10cmから20cmほどでV層の遺構確認面に達し、遺物包含層が残存していないことが判明したので、V層直上(表土中)で掘削を止めた。B地区では若干の包含層が認められたため、これを残しながら表土を剥いた。表土剥ぎは4月10日まで実施した。

また、この間、4月3日から機材の搬入、プレハブの設置を行った。4月9日からは、調査員2名、作業員約30名体制で調査を開始した。調査員1名と作業員3名は引き続き残りの箇所の表土剥ぎを行い、他の調査員1名と作業員は人力による包含層の掘削と遺構検出作業を行った。これはB、C、Aの順序で行っ

た。4月12日からは作業員を大きく2つに分け、引き続きB・C地区の遺構検出作業を行う班と、A地区の包含層の掘削を行う班とに分けて調査を行った。A地区的層厚が厚く、土量が多いことが試掘調査によって判明していたので、こちらにはベルトコンベアを設置した。A地区については、この後、一部の作業員による包含層の掘削と遺構検出作業を5月25日まで行った。

4月16日からC地区の遺構調査を開始した。この段階で、歴史については近・現代のものであるとの判断から調査の対象から除外した。C地区北側では溝状遺構が5基ほど発見されたが、そのうちのSD3から和鏡が出土した(4月25日)。國學院大學の青木豈教授に電子メールで写真を送り、鎌倉時代の和鏡で間違いないとのご教示を頂いた。和鏡はSD3の覆土②層から出土し、この層には珠洲焼の片口鉢のほか多量の炭化物が伴った。B地区については5月9日から遺構調査を開始した。調査区中央で数多く発見されたピットについては、植栽痕である可能性が高いが、柱穴である可能性も考慮し、柱痕の検出を試みながら、一部では土層断面を記録して調査した。B-SK1の確認面からは羅や和釘が出土し土坑墓と予想されたが、人骨は発見できず、また、非常に浅い土坑であることが判明した。

A地区では4月26日から一部の作業員による遺構の掘削と調査を開始した。調査区を南北、東西に区画する溝状遺構が検出され(SD1~3、SD4)、その東側にピットがまとまって確認されるエリアと方形の土坑がまとめて確認されるエリアとがあることが分かった。これらの遺構から出土する遺物は少ないものの、SD2から珠洲焼の底部破片や楕円形鉄滓、P49から珠洲焼の壺、SK13からは錢貨が出土した。方形の土坑は墓坑の可能性が推測され、土壤を採取したが骨片は検出されなかった。他の遺物も出土していない。ピット群については、柱穴であると想定したが明確な建物跡の配列が認めにくく、やや特異な掘立柱建物跡3棟のみが復元された。

A地区に関しては、南北に伸びる溝と東西に伸びる溝とが合流するか否かを確認するため、小さな拡張区を設定し、新たに掘削と調査を行った(5月23日より)。これにより、SD3は北側へさらに伸びていること、SD4はその手前で途切れていることが判明した。また、C地区北端についても西側に拡張区を設定し、調査を行った。SD3が西側に伸びていることが確認されるとともに、和鏡が出土した同じ層から珠洲焼の壺・壺類の破片がまとめて出土した。

6月5日に近隣地区の住民を対象にした現地説明会を実施した。そして、6月13日に航空写真測量を実施した。その後、C地区北側では、未発見のピットがあることを予想し、追加調査を実施した。記録した遺構を破壊しながら、10cmほど重機で遺構確認面を下げ、新たにピットを確認した。これらを合わせて掘立柱建物跡の復元を試みたが、1棟のみの復元に留まった。A地区では、井戸状遺構を重機で掘削して底面の確認をしたほか、深堀地点(TP1~5)の土層断面の記録等の作業を行った。

6月20日に調査を終了し、同日機材の撤去、翌週6月25日にプレハブ及び重機の撤去を行った。

第1表 本発掘調査工程表

	平成18年度												平成19年度											
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	
事前 調査																								
準備																								
表土剥ぎ																								
包含層 挖削																								
遺構 調査																								
基礎 整理																								
遺物 固化																								
遺構 固化																								
原稿執筆																								
校 正																								

3. 概要 (図版1)

調査によって、溝状遺構26基・掘立柱建物跡4棟・土坑32基・井戸跡1基・ピット207基・焼土遺構2基が発見された。また、主にB地区からは、近代の植栽痕と思われるピット176基が発見された。遺物は、縄文土器17点、石器類9点（磁石を含む）、須恵器4点、土師器50点（ロクロ土師器を含む）、珠洲焼130点、磁器類115点（近現代のものも含む）、鏡1点、錢貨3点、和釘22点、刀子3点、その他金屬器99点（近現代のものも含む）、環類353点、その他（ガラス製品、骨、貝殻、炭化物など）33点であった。地区ごとの概要については後述する。

4. 基本層と各地区の堆積状況 (第11図・図版1)

ここでは、まず最も良好な堆積状況を示したA地区を中心に浦畠遺跡の堆積状況の説明をする（註1）。

今回の調査で、I層の現在の耕作土、II層からIV層までの黒ボク土、V層の漸移層、VI層以下のローム層を確認した。II層は黒褐色土層であり、粘性・締まりとも<3>で、ローム粒、細礫を微量<1>含んだ。遺物は含まない。III層は最も暗い黒色土層で、粘性・締まりとも<3>、ローム粒を少量<1>含んだ。遺物を少量含んだ。IV層は黒褐色土層。粘性・締まりともやや強く<4>、ローム粒を微量<1>含み、少量の遺物を包含した。V層は、黄褐色土層で、粘性があり<3>、よく締まった<4>。混入物は少なく、遺物は包含しない。また、V層の上面は遺構確認面である。

これらの黒ボク土II～IV層3枚が区分されたのはA地区的南側だけであり、A地区北側になると表土下の深い部分までが搅乱され、その下にⅤ層に類似したものが見られ、IV層に相当するものは確認できなかつた（図版11）。また、B地区北側ではII層を分離できず（図版22）、南側でも黒ボク土が確認されたが分離できなかつた（図版23）。C地区ではごく断片的に暗褐色系の土層が観察されたのみである。

VI層以下については、A地区的東側で深堀地点を設定し、調査を行った。

VI層とVII層は明黄褐色風化火山灰土層である。VI層は粘性やや強く<3>、締まりは強く<4>、白色砂粒を少量<1>含んだ。VII層は粘性やや弱く<2>、やや強く締まり<3>、やはり白色粒子を少量<2>含んだ。白色スコリアを視認した。VII層は黄褐色微砂粒混じりシルト層で、粘性<1>、締まり<3>、VII層は明黄褐色粘質シルト層で、粘性<2>、締まり<3>であった。このVII・IX層は周辺がしばしば水中にあつたことを示すだろう。X層は、明黄褐色風化火山灰土層である。粘性<3>、締まり<4>であった。XI層は、ぶい黄橙色微砂粒混じりシルト層。粘性<3>、締まり<4>である。XII層は、褐色粗砂混じり粘質土層。粘性<1>、締まり<2>。XIII層がぶい黄橙色粗砂混じり粘質土層。粘性<4>、締まり<3>。XIV層が粗砂層。粘性<1>、締まり<3>であった。XIV層からX層は河底の状態から次第に離水していった過程を示すものだろう。

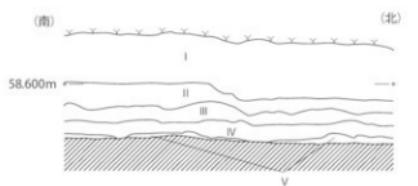
なお、VI層からXIV層にかけて層厚5cmごとの土壤を採取し、火山灰分析を行った（附編2参照）。ここでその成果概要を紹介すれば、VII層の試料6中より大山倉吉テフラ（DKP）が検出された。AT降灰層序はVI層より上位にあることが予想され、削平されてしまった可能性があるという。試料を採取した地点は、表土直下がVI層であったことから充分に考えられることである。

5. 各地区的遺構

(1) A地区的遺構 (図版2～16)

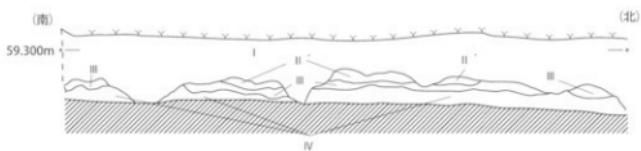
A地区は、南北に伸びるSD1～3と東西に伸びるSD6によって大きく区画される。これらは概ね同

基本層序① A地区A9グリッド



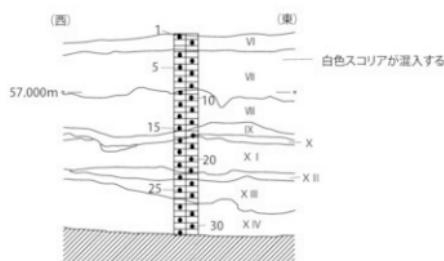
I : 現表土 II : 黒褐色土 III 黒色土 IV 黑褐色土 V : 橙色土(漸移層)

基本層序② A地区南端



I : 現表土 II : 灰褐色土 III 黒色土 IV 黑褐色土 V : 橙色土(漸移層)

基本層序③ A地区TP2北壁



X:風化火山灰土 XI:微砂粒混じりシルト XII:粗砂混じり粘質土

XIII・XIV:粗砂

断面図 0 1:40 0.8m

第11図 基本層序

時代（14世紀～15世紀）に存在したものと思われ、組み合うことによって「L」字状をなし、内部と外部を区切っている。内部側から掘立柱建物跡を構成するピット群や、平面形態方形を呈する土坑などがまとまって発見された。外部側には、その他の土坑、井戸跡などが確認されている。溝状遺構10基、掘立柱建物跡3棟、土坑12基、井戸跡1基、焼土遺構1基、ピット57基が発見された。以下主要なものを報告する。

a. 溝状遺構

S D 1 A地区の南側（大グリッドB 9・10）で発見された、南北方向に伸びる溝状遺構である。長さ約18m、幅約0.70m、確認面からの深さは0.23mであった。なお、本遺構の北端部は、S D 2の南端部と約180cmの距離を持って対向している。また、遺構南側はA11グリッドに入った付近で途切れている。なお、本遺構からは楕円鉄滓が出土した。楕円鉄滓が出土したのは、本遺跡ではS D 1だけである。遺構の長軸方位は、およそS D 2・3と一致する（N-10°-E）。

S D 2 A地区南半（A・B 6～9）で発見された、南北に伸びる溝状遺構である。北側は調査区外へ続いているものの、拡張区では発見することができなかった。調査区内で確認された長さは約30m、幅の平均は0.76m、確認面からの深さは0.29mであった。A・B 8グリッドの範囲に、このS D 2に沿って、もう1本の溝状遺構が発見された。こちらの溝はS D 2よりも浅く、S D 2に切られている（図版8）。S D 2は、この古い溝状遺構を再構築したものと考えられる。また、S D 2の南端はS D 1の北端と対向しているが、この端部のみや広く掘られ、そこから6点の礫が出土した。礫はいずれも遺構覆土上半から出土し、うち2点は熱被痕が顕著に認められた。本遺構からは、珠洲焼の壺底部（図版33-2）と土器小破片（時期不明）が出土した。また、包含層出土扱いしたが、出土位置を見ると（第12図）、図版34の16の壺口縁、18の兜脛部破片、21、24の片口鉢もS D 2の覆土中からのものであった可能性が高い。

S D 3 A地区南半（A・B 5～7）で発見された、南北に伸びる溝状遺構である。S D 2の途中からそれに沿うように伸びている。しかし、南端ではS D 2と70cmの距離を保っていたものの、北へ進みA 6付近ではこれと接するようになる。拡張区では、S D 2と合流したものと推測される。拡張区も含めた長さは約32m、幅の平均0.93m、深さは0.16mであった。出土遺物はない。

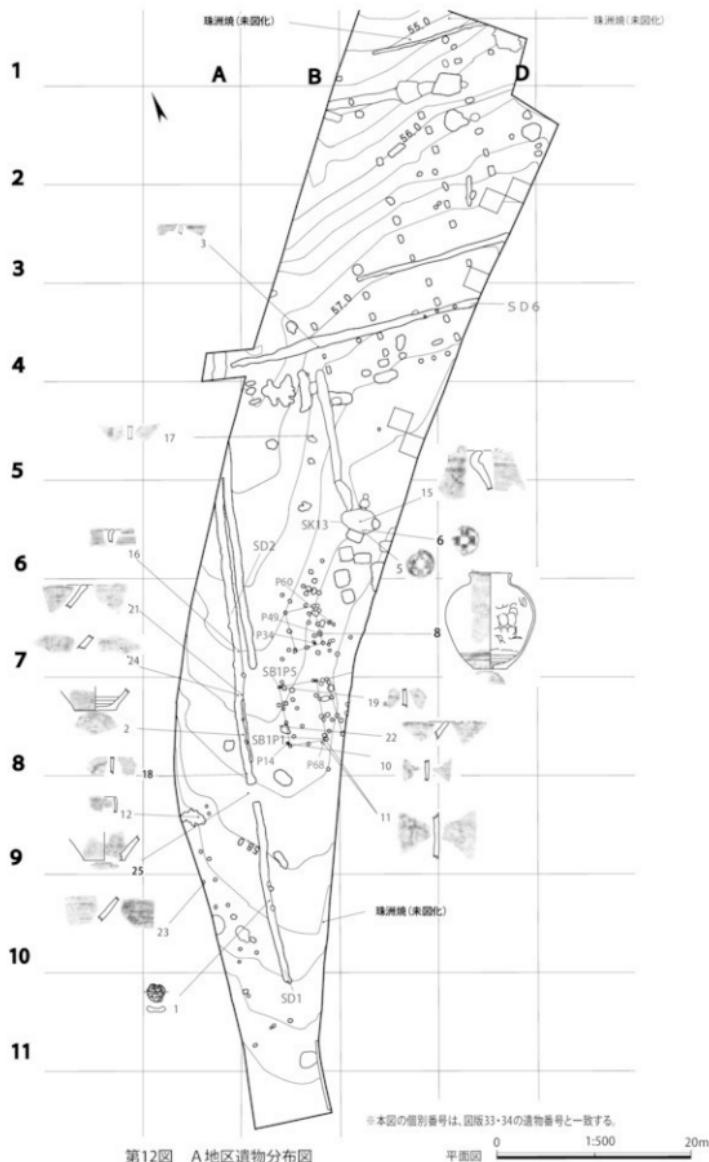
S D 5 A地区中央付近（B・C 4～6）で発見された、南北に伸びる溝状遺構である。南端は攪乱で不明になっており、北側はS D 6の手前2mのところで途切れている。S D 1～3とは平行で、12mほど東に位置する。長さ約11m、幅の平均は0.96m、深さは0.17mを測った。出土遺物はない。

S D 6 A地区中央付近（A～D 4）で発見された、東西方向に伸びる溝状遺構である。東西方向の溝状遺構としては、最も南側に位置する。長さは約26mであり、東側は調査区外へ延びている。西側はS D 3の約50cm手前で途切れる。幅の平均は0.73m、深さは0.22mであった。長軸方位は、N-84°-Eで、S D 1～3と概ね直交する。本遺構からは珠洲焼の壺の口縁部小破片が出土している（図版33-3）。

S D 7 A地区北半（C D 3）で発見された東西方向に伸びる溝状遺構である。長さ約16m、幅0.50m、深さ0.23mである。出土遺物はない。

S D 8 A地区北側（B～D 1～2）で発見された東西方向に伸びる溝状遺構である。長さ約11m、幅1m、深さ0.23cmを計る。西側は調査区外へ延び、東側は攪乱に犯されているものの、D 1グリッドで途切れている。出土遺物はない。

S D 9 A地区北側（C～D 1）で発見された東西方向に伸びる溝状遺構である。長さ11m、幅0.33m、深さ0.17mである。幅、深さとも規模が小さく、発見された位置においてもS D 7との近似性が指摘される。



第12図 A地区遺物分布図

出土遺物はない。

このうち S D 2・S D 6 から僅かではあるが珠洲焼が出土しており、概ね15世紀のものと考えられる。S D 2 に対向したり長軸方向を同じくする S D 1・S D 3 もおおよそこの時期に相当するものと考えられる。S D 7~9 のうち、特に 7 と 9 は、現在の地境とも近く、近・現代のものである可能性が高い。

b. 挖立建物跡

S B 1 A 地区 B 8 グリッドで復元された掘立柱建物跡である。東西方向 1 間 (3.78m)、南北方向 3 間 (長軸6.12m) と建物跡としては異例な配列をなし、柱間寸法も東西3.78m、南北2.04mと格差がある。しかし、これらのピット自体の形状から柱穴である可能性が高いこと、それらの柱穴が長方形に並ぶことから、このような変則的な建物跡を復元した。

調査では、S B 1 P 1・P 8 の間、P 4 と P 5 の間の中央に付近にピットを探したが、発見できなかった。なお、主軸の方位は N-10°-E で、S D 1 と一致し、S D 2・3 とも近い値を示す。S B 1 P 1~P 8 から出土した遺物はないが、包含層出土扱いしたものの中にピット付近から出土した珠洲焼の壺壺類の胴部破片がある(第12図)。特に図版33-11は P 1 覆土中からの、同19は P 5 からの出土である可能性が高い。このような状況証拠から本遺構は中世に構築されたものであることは間違いないだろう。

S B 2 B 8 グリッドで復元された。S B 1 の東側に同じような間隔でピットが並ぶため、S B 2 とした。東側は調査区外になるため、南北方向の5.7mの間に 4 本ピットの列を確認したのみである。S B 2 P 4 からは東へ2.6m以上隣接するピットが発見しておらず、これらが掘立柱建物であるとしたら、S B 1 と同様 1 間 × 3 間の建物と推測する。主軸方位は S B 1 よりやや西に傾いている (N-8°-E)。なお、これらのピットからは遺物は出土していない。

S B 3 S B 1・2 よりもやや北側の B 7 グリッドで発見された 1 間 × 2 間の掘立柱建物跡である。S B 1・2 よりも更に小規模で、長軸(南北)約 4 m、短軸(東西)約 2.9m である。柱間寸法も南北約 2 m、東西約 3 m と、S B 1 ほどではないが、やはり格差が大きい。しかしこれらについても、S B 1 同様、S B 3 P 1~P 6 が形よく長方形に並ぶため、建物跡として復元した。主軸の方位は N-7°-E と S B 2 よりも更に西に傾くが、概ね S D 1~3 の溝状遺構とも一致している。S B 1 P 1~P 6 からの出土遺物はないが、周辺の P 49 から珠洲焼の壺(図版33-8)がまとまって出土しているほか、P 34(同9)や P 60(同10)からも珠洲焼が出土している。周囲のピットも復元できなかった建物跡の柱穴の一部と考えられ、この場所に何處か掘立柱建物跡が立て直されたものと推測している。P 49 の壺は14世紀のものと推定され、従って、この S B 3 も14~15世紀のものと推測する。

c. 土坑

S K 2 当初土坑と認定したが、最終的には井戸状遺構であると判断した。A 10 グリッドから発見され、半分は調査区外にある。平面形態は円形を呈するものと推定され、径は1.98mを測った。航空写真測量後、バックホーで掘削し底面を確認した。その結果、確認面からの深さは5.50mであった。覆土中から遺物を発見することはできなかった。下位層では粗砂が覆土として確認されているが、これらは今回の調査では他の地点、遺構では見られない土層であった。なお、最底面の土壌は黒褐色の粘質土であった。

S K 4 A 9 グリッドで発見された。倒木痕であるため個別図の掲載は省略した。ただし、本遺構覆土からは縄文時代晩期の土器破片が出土している。また、図版33-12もドットの位置から S K 4 からの出

土と推測される。

S K 6 C 7 グリッドから発見された。平面形態は方形を呈し、正方形に近いがやや南北に長く、長軸1.36m、短軸1.26m。断面形態逆台形の土坑である。底面はほぼ水平で平坦である。確認面から底面までの深さは0.36mであった。出土遺物はない。

S K 7 S K 6 のやや北、C 6・7 グリッドから発見された。形態も S K 6 とよく似ており、平面形態は南北にやや長い方形を呈し、断面形態は逆台形である。サイズは S K 6 よりも若干大きく、長軸1.74m、短軸1.60mである。底面はほぼ水平かつ平坦であり、確認面からの深さは0.32mであった。残念ながら出土遺物はない。

S K 8 S K 6・7 の東寄り、C 6・7 グリッドで発見された。一部は調査区外になる。平面形態は南北にはっきり長い長方形で、長軸2.88m、短軸の調査区内部分は1.62mを測った。断面形態は逆台形、底面はほぼ水平で平坦であった。確認面からの深さは0.44m。出土遺物はない。長軸方位はN-14°-Eで、これは S K 6・7 などと近似するほか、S D 1・2・3・5、S B 1とも比較的近いと言えるだろう。

S K 9 S K 8 の北西で発見された土坑である (C 6 グリッド)。平面形態は長軸1.76m、短軸1.04mの長方形で、東西に長軸をもつ。断面形態は深さ0.66mの箱形を呈する。底面の縁辺が幅0.16m、深さ0.05m程度くぼむ傾向が見られた。出土遺物はない。

S K 10 S K 9 の西側に一部を接して発見された (S K 9 に切られる)。平面形態は長軸1.46m、短軸1.44mであり、ほぼ正方形を呈する。断面形態は深さ0.33mのやや不整な箱形を呈する。底面は水平、平坦であるがややたわむ。この長軸方位もN-14°-Eで、S K 6～8 とほぼ一致する。出土遺物はない。

S K 11 S K 9 の東、S K 8 の北で発見された (C 6 グリッド)。S K 9 と同じように、平面形態は東西に長い長方形を呈する (調査区内的長軸1.06m、短軸1.12m)。確認面からの深さは浅い (深さ0.17m)。底面は若干の凹凸が見られる。

S K 13 C 6 グリッドから発見された。平面形態卵形の非常に浅い土坑である (深さ0.17m)。周囲を他の造構で切られているが、長軸3.80m、短軸2.52mを推計した。C 6・7 付近で発見された土坑としては、形状・サイズ・長軸方位とも異例である。本造構からは、3点の銭貨 (国版33-5～7) が出土したほか、ドット記録の位置から珠洲焼窯の口縁部～胴部にかけての破片 (国版33-15) も、この造構覆土からの出土と考えられる。

S K 16 S K 6～S K 13とはやや離れた、C 4 グリッドで発見された。平面形態は長梢円形で長軸2.44m、短軸1.36mである。断面形態は皿形を呈し、確認面からの深さ0.20mと浅い。長軸方位は、N-85°-Eで、S D 6 とほぼ一致する。出土遺物はない。

S K 17 S K 16 のやや北側、C 4 グリッドで発見された。平面形態は不整な梢円形、断面形態も不整である。長軸は1.64m、短軸は0.92m、確認面からの深さは0.36cmであった。出土遺物はない。

d. ピット

A地区の中央、B・C 7・8 グリッドにまとまって発見された。ほとんどは柱穴だったと思われる。ただし、配列が認められたのは既に見たように S B 1～S B 3 のピットのみであった。残りのものは、調査区外のものと配列したり、必要なピットを何らかの事情で発見できなかつたため、配列を復元できなかつたものと考えられる。各ピットの法量等については観察表に譲ることとする。

(2) B地区の遺構 (図版17～23)

B地区は、調査区の南と北とに、東西に伸びる溝状遺構SD1とSD2a・SD2bがあり、これによって区切られている。しかし、SD1が古代に遡りうるのと比べ、SD2a・SD2bは近代以降のものと考えられる。これは、土地の傾斜に沿って掘られた溝と考えられ、時代を超えて長軸方向が一致したのであろう。この2本の溝の間に、数多くの植栽痕、畝状溝が発見されている。今回は植栽痕については調査対象とし、掘削を行った。また、この2本の溝の外側には、南側に墓と推測されるSK1が、北側にはSD3～5、SK3などが確認された。以上、B地区からは、溝状遺構5基、土坑3基、ピット36基、植栽痕176基が発見された。以下主要なものを報告する。

a. 溝状遺構

SD1 B地区南側、BC19・20グリッドで発見された。東西に伸びる溝状遺構で、調査区内で発見された部分の長さは10.40m、幅の平均は0.60m、確認面からの深さは0.18mであった。長軸の方位はN-81°-Wである。底面に若干の凹凸はあるが概ね水平かつ平坦で、断面形態逆台形を呈した。本遺構からは須恵器の壺の胴部破片が2点出土している(図版33-26・27)。このほかにも土器器の小破片1点が出土したが、ドット記録を取る以前に不注意から紛失してしまった。その他の遺物が出土していないことから、本遺構は概ね9世紀後半のものと考えられる。

SD2a・2b B地区北側、BC15グリッドで発見された。両者は調査区中心軸付近で対向しており、東側へ伸びるものとSD2a、西側へ伸びるものと同2bと呼称した。調査区内で確認された長さは、2aが5.44m、2bが6.48mであった。幅の平均は2aが0.30m、2bが0.29m、確認面からの深さは2aが0.14m、2bが0.09mであった。主軸はN-86°-Wで一致する。これらから、両者の共通性が高いことが窺える。出土遺物はない。

SD3 B地区北側、B14グリッドから発見された、東西に伸びる溝状遺構である。調査区内で発見された長さは約6m、幅の平均は0.60m、確認面からの深さは0.25mであった。出土遺物はない。

SD4 SD3の北側で発見された東西に伸びる溝状遺構である。ゆるくS字状にくねる平面形態を呈する。調査区内で確認された長さは約13m、幅の平均は0.96m、確認面からの深さは、0.36mであった。SD5と合流しているが、その合流地点が小ピットで壊されていて、切りあい関係を確認することはできなかった。繩文土器片が3点、土器器破片が2点出土しているが、いずれも小破片であるため図化を省略した。本遺構の帰属時期は不明である。

SD5 SD4の北側で発見された東西に伸びる溝状遺構であり、調査区中心軸付近でSD4と合流するようである。調査区内で確認された長さは約7.6m、幅は0.34m、深さは0.56m。出土遺物はない。

b. 土坑

SK1 B地区的南側C20グリッドで発見された土坑である。平面形態はやや不整形な長方形で、長軸は2.60m、短軸は1.08mであった。確認面から底面までの深さは浅く、0.27m。底面はやや凹凸が認められ、中央にやや深い部分があった。底面からは約40°度で立ち上がる。

本遺構の覆土上半からは礫が多量に発見され、遺構の範囲内に集中が見られた。礫の分布には偏在性が認められ、特に南側に集中しており、西縁辺で目立って少ないのに比べ東縁では多く、北側でも縁辺部にやまとまりが認められた。このように東西、南北の両方の軸で対称性が崩れており、構築時の状態が維

持されていたとは考えにくい。また、この土坑は表土直下で礫が確認されており、そのことからもこの土坑の上半が耕作などの影響を蒙った可能性を窺わせる。確認した礫は72点。礫のサイズは3.7 ~ 31.2cm、重量は16.5 ~ 12200 gとバラつきが大きい（第13図）が、平均では20.2cm、3915.9 gと相当に大きい。比較的扁平なものが多いが、厚いものも含まれる。大半のものには被熱による赤化が認められず、覆土中にも炭化物が多量に混入するということはなかった。

この土坑からは、和釘がやまとまって出土している。これらは、北縁辺で最も多く、その他西側半分、そして南縁辺部でもやまとまりを見せる。和釘の多くは部材が付着したまま遺存しているが、錆の影響のためか赤色化しているものの、炭化しているものは見られない。

これらの和釘とそれに付着した部材の残存から、土坑内には木棺状のものが置かれたと考えられる。また、礫と部材、炭化物の分布状況からも周辺で著しい燃焼行為があつたと考えられない。以上のことから、この土坑は、ある種の石組と木棺が設置された墓坑と推定される。

既に触れたように、本土坑の深度は浅いところでは12cmに満たなかった。この深さでは、木棺の埋設是不可能であるから、本来はマウンド状のものがこの土坑の上部にあり、それが耕作などで削平されたものと推測したい。礫分布の偏在性もこのことの証左であろう。

近接地の土層断面（図版23）からは、顕著な不整合面を確認することはできなかった。これは周辺で大規模な土地の改変（盛土、削平）がなかったことを示しており、調査時の聞き込み調査の結果とも一致する。しかしながら、人力による部分的な削平はあったものと考える。この土坑中からの遺物としては、礫、和釘以外に、18世紀の肥前系の磁器の小破片と、縄文時代中期末葉の沖ノ原式の小破片（図版34-28）とが出土した。これが墓の構築時に混入したものか、後後に混入したものは不明である。

S K 2 S K 1 の南西側で発見された。平面、断面とも不整な形態をしており、倒木痕であろう。

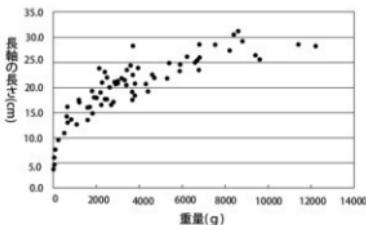
S K 3 B地区北側で発見された。東西方向に長い土坑である。平面形態は略楕円形、断面形態は逆台形を呈する。底面は水平で平坦に整えられている。長軸3.50m、短軸1.21m、確認面からの深さは0.28mであった。覆土上面から縄文時代の土器底部片が出土している。底部のみのため帰属時期は不明。図化を省略した。本土坑の帰属時期も不明である。

c. ピット

B地区のピットは、全て S D 2 a・S D 2 a よりも北側で発見されている。いずれも小形で不整形のものが多く、性格、帰属時期とも不明である。

d. 植栽痕列（図版24）

B地区中央部の幅広い範囲に植栽痕の列が発見された。当初はこれらが柱穴であり、建物跡や建物跡の重複の状況を考えたが、次に述べる幾つかの点から植栽痕列が並んだものであると解した。①柱穴として



第13図 B - SK 1 出土礫 長さー重量分布

は穴のサイズが中途半端である、②半裁した土層断面に柱痕が見られない、③南北方向には並ぶが東西方向には配列が認められない、④畝状溝と平行に並び一部はこれを切る、⑤穴の大きさや形、並び方などで幾つかのエリアに別れるが（E 1～E 4）、この区分が現在の土地の区画と比較的一致する、などである。このうち①～③は、これらの植栽痕群が、柱穴とそれが配列した遺構ではないことの証拠であるし、④～⑤は、これらが近・現代の畠地と深い関係にあることの証拠であろう。以下、エリアごとの傾向を述べる。

E 1は最も南側のエリアで、南北の長さ約15mを計る。ここに認められるピットの多くは平面形態が方形で、底面まで深いものが多い（0.30～0.40m）。主要なピット列は7列が数えられる。ピットとピットの間隔、列と列の間隔ともに短く、多くのピットが密集している。この密な分布の中にも、南北方向にはピットが整然と並び、東西方向には配列を見出せないという傾向が見出せる。ピット列の方位はおよそN-10°-Eである。

E 2はE 1の北側に続くエリアで南北約8.4mである。このエリアのピットはE 1のものとは違い、平面形態略円形で底面までごく浅いものが多い（およそ0.15m）。ピットの並ぶ方位はE 1よりもやや西に傾き（N-8°-E）、エリアを越えて連続して配列するものは認められない。このエリアには概ね5列のピット列が認められる。E 1に比べピット列間の間隔が広く、この間に畝状溝が平行する（畝状溝の図化は省略）。

E 3はE 2の北側に続くエリアで、南北の長さ7.8mを計る。E 2から引き続き略円形の平面形態のものが多いが、深さはさらに浅い傾向にある（およそ0.12m）。ピット間、ピット列間の間隔が広く、ピット列間には畝状溝が平行して並ぶものがある。ピット列は5列認められる。ピット列の方位が僅かながら更に西に傾く（N-7°-E）。E 2から連続するピット列は認められないが、1列のピット列には2基のピットがE 2へ連続するようなものがある。

エリア4は、E 3の北側に続くエリアで最も北側に位置する。最後のピットはSD 2 a・SD 2 bに切れられ、これでピット列が途絶える。この間の南北の長さは、8.4mである。ピットの平面形態、深さともE 3と大きな違いがない。このエリアでピット列が3列と少くなり、その間を1条から3条の畝状溝が平行に並んでいる。これらの3列はいずれもE 3から連続的に並んでいる。ピット列の方位もE 3と一致する（N-7°-E）。このエリアはE 3との共通性が高く、両者を貫通する畝状溝も6条認められた。

以上のようにエリアごとにピットの形状・並び方等が変わることから、これらが畠地に植えられた作物の跡であることは間違いない。しかし、植栽植物種は不明である。聞き込みの結果、戦時中の当地では桑の栽培が盛んであったというが、桑をこのような痕跡が残るよう掘り起こすことはなかったという。

なお、植栽痕からも須恵器片、土師器片、磁器片、釘片などが出土した。このうち、E 1-P63から出土した須恵器片1点のみを図示し（図版35-35）、他はいずれも小破片であったので省略した。

（3）C地区の遺構（図版24～32）

C地区のほぼ中央にはSD 1が東西に伸びている。これは試掘調査の際に東は23Tから西は15Tまで確認されたものである。本来B地区でこの溝状遺構が再確認されるはずだったのだが、確認できていない。またC地区の北側には蛇行するような平面形態を持つ溝状遺構と、略方形の土坑、そして柱穴と思われるピットが集中して発見されている。また、遺物の出土もこの北側範囲に集中しており、この範囲が中世遺跡の中心部に近いことを窺わせる。以上、C地区からは、溝状遺構11基、掘立柱建物跡1棟、土坑17基、焼土遺構1基、ピット114基が確認された。

a. 溝状造構

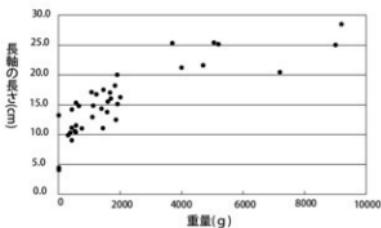
S D 1 C地区中央F・G17グリッドで発見された東西に伸びる溝状造構である。2本の溝が平行して伸びており、北側のものをS D 1 a、南側のものをS D 1 bと呼称した。調査区内で確認された長さは約12m、幅の平均は1 aが0.66m、1 bが0.68m、深さは1 aが0.18m、1 bが0.21cmであった。これらの長軸方位はN-76°-Wである。両者は、西側では一定の間隔(30cm強)を持っているが、調査区東側端部ではお互いに接するようになり、覆土も共通する。従ってこの付近で合流するものと考えられる。両者からの出土遺物はない。

また、北側のS D 1 aは、隣接するP 4 bと地下でトンネル状に連結する(図版25)。P 4 bは平面形態略菱形で、断面箱形を呈し、そこから一段上がって連結溝となり、その一部がトンネル状部分となる。連結溝は長さ約1.2m、幅約0.33m、トンネル状の部分は、長さ約0.7m、高さ0.14m～0.20mであった。連結溝は、P 4 bで深く、S D 1 a側では浅い。

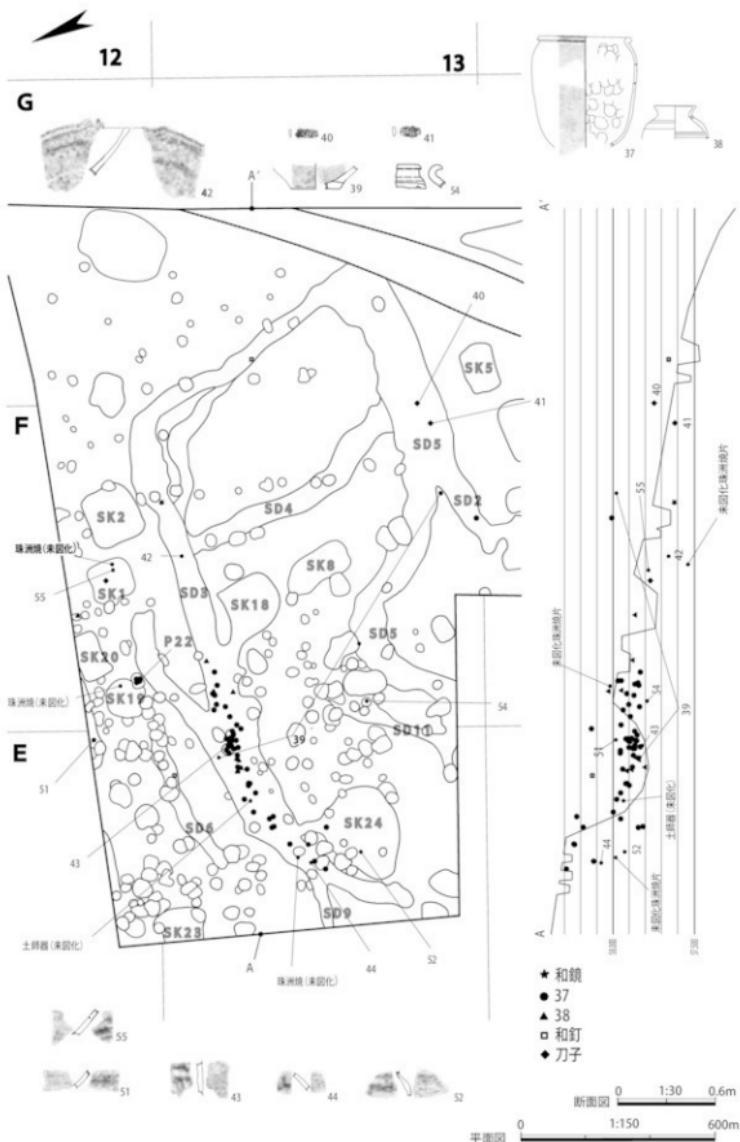
S D 2 C地区北側、F13グリッドに位置する。S D 5から分岐する短い溝状造構をS D 2と称した。西端を不整形の小ピット群に切られている。S D 5との切りあいは不明である。

S D 3 C地区北側E～F12・13グリッドで発見された溝状造構である。この造構は、現在の道路からほぼ北に向かって伸び、F12に入った付近ではほぼ直角に方向を代えて西に伸び、E13グリッド中で南側に弯曲している。全体の平面形態は「はこがまえ(匁)」状である。断面形態は楕円形の部分とV字形の部分がある。この造構はS D 12を切るほか、S D 4、S D 7なども切る。S D 5との切りあいは不明である。また、SK18、SK24とは覆土で明瞭な違いを観察しなかった。造構覆土は大きく3層からなり、上位から順に①層は灰黄褐色土、②層は黒褐色土、③層は黄橙色土である。この②層は、多量の炭化物が混入し、分布する範囲が限られる。ほぼそれと重なる範囲から和鏡(図版36-45)や珠洲焼(図版35-36)が出土した(第15図)。遺物の垂直分布は、若干高い位置から出土しているものもあるが、57.80m～58.00mの間に集中している。以上のように、出土層位の所見と垂直分布のあり方から、S D 3から出土した遺物の一括性の高さが指摘できる。また、平面分布は、和釦を除くと、和鏡が最も東に位置し、和鏡から2m弱西から図版36-42の片口鉢が出土し、さらにこれから3mほど西の地点から甕壺類の破片がまとめて出土している。このうち図版35-37の甕は、S D 3からだけでなく、S D 2、SK24、P22などから出土している。さらに、このS D 3からは、甕もやまとまって出土した。出土総数は37点で、長さの平均は16.1cm(最大は28.5cm)、重さの平均は2166.2g(最大は9205g)であった(第14図)。この甕に被熱による赤化やススの付着するものが目立ち、その分布範囲が炭化物、

遺物の分布範囲と大きさには一致したので、目視による被熱の度合いごとの分布図を作成した(第16図)。これによると、甕は、和鏡出土位置付近とその東側に集中し、先の珠洲焼の甕が出土した範囲にも点々と分布している。また、被熱度の高い甕が集中するのは、和鏡の東側と、S D 9と分岐する付近である。図版36-42の片口鉢は器面に細かい剥落や炭化物の付着が観察でき、やはり強い被熱を窺わせる。これらのことから、



第14図 C-S D 3出土甕 長さ-重量分布



第15図 C地区北側遺物分布図①



第16図 C地区北側遺物分布図②

S D 3 ②層の埋没過程において周辺で大きな燃焼作用があったことが推測される。

S D 4 F 13グリッドで発見された南北に伸びる溝状遺構である。S D 3とS D 5に切られ、この間の長さは7.4mである。幅は0.70m、深さは0.18mであった。S B 1 P 4との切り合い関係は不明であるが、S D 4の底面掘削後によくこのピットのプランが確認できた点から、S D 4の方が新しい可能性がある。出土遺物はなかった。

S D 5 F 13グリッドで発見された溝状遺構である。S D 3と同じように、G 13グリッドの現道の基盤跡から確認され、西方向に「S」字状に蛇行しながら伸びている。調査区内で確認された長さは、約15.8m、幅の平均は約1.1m、深さは0.30cmを計った。土層堆積状況からS D 4を切る。S D 2・S D 3との切り合いは不明である。ただし、S D 3 ②層のような炭化物を顕著に含む層が発見されていないので、多少の先後関係があるだろう。遺物はS D 2との境付近から珠洲焼片口鉢底部（図版35-39）が出土し、これはS D 3出土の破片と接合した。また、刀子が2点出土している。

S D 6 E～F 12・13グリッドから発見された溝状遺構である。S D 3の北側でこれに平行するよう伸びている。しかし全体の長さは短く（約4.9m）、幅も狭く（0.4m）、深さも浅い（0.09m）。他の多くのピットに切られる。出土遺物はない。

S D 7 E～F 12・13グリッドで発見された溝状遺構である。「く」の字に曲がりながらS D 3と合流するが、土層断面からS D 3に切られる。確認された長さは約4.5m、幅の平均は約0.6m、深さは0.15mであった。出土遺物はない。

S D 9 E 13グリッドで発見された溝状遺構である。土層断面の観察からS D 3の覆土と当遺構の覆土は分離できなかった。従って同時期のものと考えられる。

S D 11 E・F 13グリッドで発見された溝状遺構である。S D 5の西側に一部に平行するように見られたが、形状、幅、深さなど、溝としてはやや安定性を欠く。周囲は遺構の集中地点であり、平面形の確認が困難であったことも理由であろう。

b. 挖立柱建物跡

S B 1 ほぼF 13グリッドで復元された挖立柱建物跡である。A地区のS B 1と同様、東西1間（3.38m）、南北3間（5.04m）という異例な配列を持つ。柱間寸法も東西3.38m、南北平均1.40mと大きな格差がある。主軸方向は、N-19°-Wであり、周囲に近い数値を示すものが見当たらない。また、S B 1 P 1の検出状況から、S D 3よりも古いものと考えられる。出土遺物はない。

c. 土坑

S K 1 F 12グリッドで発見された土坑である。後世のピットに壊されている部分もあるが、平面形態は概ね方形で、断面形態は箱形を呈したものと推定される。長軸1.40m、短軸1.38mで、確認面からの深さは0.35mであった。長軸の方位はほぼ北を向く（N-2°-E）。出土遺物は、刀子（図版36-46）、珠洲焼片口鉢端部（未図化）のほか、珠洲焼片口鉢の破片（図版36-55）が出土した。片口鉢の破片はP 22出土の破片と接合している。このP 22には覆土中に炭化物が多量に混入していたが、本土坑の覆土には炭化物が含まれていない（①層中には、1～10mm大の炭化物粒が<2>混入した）。

S K 2 S K 1の東隣、F 12グリッドで発見された。平面形態が方形を呈し、断面形態は箱形を呈する。長軸は1.84m、短軸1.64m、確認面からの深さは0.52mであった。サイズはS K 1よりも一回り大きいが、

両者は平面・断面形態が似ている。長軸方位はN-89.5°-Wであり、これはSK1と約90°異なるが、両造構がほぼ正方形を呈することを考慮すると、同じ方位のものと解される。出土遺物はない。

SK4 F14グリッドで発見された。平面が略長方形、断面は箱形を呈する土坑である。長軸は1.96m、短軸1.20m、深さは0.40m。長軸方位はN-84°-Wで、SK2に比較的近い。出土遺物はない。

SK5 SK4の北側で発見された土坑である。平面形態は長方形を呈し、断面形態は略箱形を呈したと思われる。長軸は1.54m、短軸は1.04m、確認面からの深さは0.19mであった。形態とサイズからはSK4と小さくしたもの捉えられよう。長軸方位もN-81°-WとSK4とほぼ一致する。出土遺物はない。

SK6 C地区中央のSD1近くで発見された(図版25)。当初はやや大形の土坑と認定したが、掘削した結果ピットのまとなりであることが判明した。それらをSK6A～Cと呼称した。詳細は省略する。

SK8 F13グリッドで発見された土坑である。平面形態は不整な方形を呈し、断面形態は逆台形である。長軸の長さは2.20m、短軸は1.04m、深さは0.23cmを測った。長軸方位はN-8°-Wである。

SK9 C地区中央のG18グリッドで確認された。当初は長楕円形の土坑として確認したが、掘削の結果、掘り込みの浅い円形土坑であることが分かった。詳細は図版、観察表に譲る。出土遺物はない。

SK10 C地区南側のG21グリッドで発見された長楕円形の土坑である。当初はSK11同様、陥穴状造構の可能性を考慮したが、掘削した結果ごく浅い、性格不明の土坑であることが判明した。底面には段を持ち、東側に深い部分がある。詳細は図版、観察表を参照していただきたい。出土遺物はない。

SK11 C地区南側のG21グリッドで発見された長楕円形の土坑である。SK10と同じく、最も深いところで確認面から0.21mであり、ごく浅い土坑である。性格は不明。詳細は図版、観察表を参照していただきたい。出土遺物はない。

SK18 C地区北側、SK8の北側で発見された(F13グリッド)。西側が溝状となり、これがSD3と連結している。それ以外の平面形態は菱形を呈し、断面形態は概ね逆台形を呈する。長軸の長さ1.24m、短軸は1.20m、深さは0.48mであった。覆土は概ね灰黄褐色を呈し、これはSD3の①層と類似する。両者の切り合を観察した土層断面においても、両者の違いを明確にすることはできなかった。従って、SD3と比較的近接した時期に埋没を完了させた可能性がある。ただ、SD3の②層に相当する層はSK18には見られなかった。出土遺物はない。

SK19 F12グリッドで発見された土坑である。平面形態は不整円形を呈し、断面形態は箱型を呈する。長軸は1.24m、短軸は1.20mである。深さは0.48m。周辺に円形の土坑が少ないことからやや特異な土坑である。しかし、覆土中から珠洲焼の壺もしくは壺の胴部破片(未国化)が出土している。本土坑覆土は灰黄褐色土と褐灰色土との互層からなるが、遺物は①層の下部から出土した。この層にはやや多く炭化物が含まれた。また、本土坑はP22に切られる。P22は、セクション図を作成した部分では明瞭ではないが、炭化物をやや多く混入する層が見られ、ここから図版35-37で示した珠洲焼の壺の破片の一部が出土した。

SK20 F12グリッドで発見された土坑である。平面形態は長方形、断面形態は逆台形を呈する。長軸の長さは1.46m、短軸は0.96m、深さは0.23mであった。出土遺物はない。

SK24 SD3の西側に隣接したE13グリッドで発見された。北側の一部がSD3と浅い溝で連結する。これ以外の平面形態は卵形で、断面形態は逆台形である。規模は長軸が2.96m、短軸が2.30m、深さが0.49cmと周辺の土坑の中では最も大きい。このSK24の浅い部分、連絡溝、そして周辺におけるSD3の覆土については、現地で明瞭な違いを区分できず、ほぼ同一のものと判断した。ただし、SK18と同じく、SD3②層に相当する土層(炭化物が多量に混入する層)がSK24でも確認されていない。出土遺物は、底

面近くの⑤層中から図版36-52が出土し、さらに連結溝に近い①層中から図版35-37の壺の破片が出土した。

d. 焼土遺構

S X 1 F13グリッドで発見された焼土遺構である。不整形な形に焼土、炭化物が分布した。半裁して確認すると下から複数のビットが現れた。焼土の分布との関係は判然としなかったが、ビットが埋没した後に燃焼作用があったものと推測する。

e. ビット

ここでは、C地区で発見されたビットにおける総体的な傾向を概観する。

P1とP2はC地区中央から南側においてほぼ単独で発見されたビットで、その形状などから植栽痕ではないかと考えられる。なお、P1からは縄文土器が出土している。

それ以外のビットはC地区北側で発見され、溝状遺構や土坑など他の遺構が集中している区域からまとまって検出された。調査区の他の区域から同じようにビットが検出されていない点を考慮すると、大きくはそれらの遺構と同じ時代の痕跡と考えられよう。実際、これらのビットの中には、P22のようにSD3から出土した壺と接合する破片を出土したビットや、P26のように壺の口縁部を出土するものがあり、他の遺構との同時期性を窺わせるビットもある。またその一部は、SB1のような掘立柱建物の柱穴であったと思われる。実際P30のように柱痕が残されたものも存在する。しかしながら現地での検討や整理作業段階においても、SB1以外の掘立柱建物を復元することができなかった。その原因として、①調査区が限られていて配列が見出しえなかつた、②ビットにも多少時間幅があり、建物跡の復元を困難にした、③ビットの性格にも柱穴以外に複数のものがありノイズを与えていた、などが考えられよう。

6. 各地区の出土遺物

(1) A地区の出土遺物(図版33・34、図版47・48)

A地区からは、縄文土器6点、土師器11点、珠洲焼49点、陶磁器類51点、銭貨3点、和釘1点、その他、金属器10点、疋134点、その他2点が出土した。この中で珠洲焼は主に、SD1～3とSD6とで区画された内側から出土している。

a. 縄文時代の遺物

平成15年の試掘調査で、A地区の北側に相当する地点から縄文時代晩期の完形土器が出土しており、特にこの付近で当該時期の遺構、遺物が発見されることが期待されたが、これに反して縄文土器の出土量は僅少で、かつ、A地区の中でも南側からの出土に限られた。

3は口縁部端部付近の小破片である。この口縁端部には山形の小突起があり、この両脇の口唇部に沈線が施されている。口縁直下から水平に3条の平行沈線が連続して引かれている。小破片のため明確でないが胎土や焼成からやはり縄文時代晩期のものと考えられる。この土器と程近い地点から14が出土している。同じ例木痕にからむ土器であろう。これも口縁部破片で、口縁直下から3条の沈線文が引かれ、その下に縦に連続する「ハ」の字文が描かれる。器面が荒れているため鮮明でないが「ハ」の字文の間には縦位の沈線も見られる。13も内済気味の口縁部小破片で、口唇部に1条、口縁直下に水平に2条の沈線文が引か

れている。その下にはやや弧状をなし何らかのモチーフを描いているようである。これも縄文時代晩期に帰属するものと考えられる。

b. 中世の遺物

A地区からは珠洲焼の壺の出土がやや目立った。2は底部破片で外面の一部に打圧痕が見られる。胎土等から吉岡編年のV期であろうか(註2)。3はやはり壺の口縁端部である。口縁端部が肥厚せずやや反する。帰属時期は不明である。8は壺の半完形品である。小さい底部から胴部へ丸く膨らみ肩部に最大径を持ち、すばんだ頭部からほぼ直立する口縁部を持つ。底部には顕著なロクロ成形痕が残り、胴部の外面には幅広く深い打圧痕が、内面にはやや不鮮明な押圧痕が見られる。IV期に相当するものであろう。9・10なども小破片ながら湾曲の具合から壺の可能性が高い。16も壺の口縁部破片であろう。垂直に立ち上がり端部を丸く肥厚させている。やはりIV期に属するものであろう。17～20は小破片のため壺か壺か判別できない。19は打圧痕が非常に浅く、胎土も粗雑であることからV期のものである可能性がある。また20に関しては、打圧痕が密で胎土も良好であることなどからIV期のものであろうか。

明確に壺に分類されるものとしては、11、15が出土した。11はIV期であろうか。15は口縁部形態などからV期に下る可能性が高いだろう。

片口鉢の破片もやまとまって出土した(21～25)。21は胎土が疎悪であり、V期に下るものと思われる。22は口縁部形態からするとIV期に相当しよう。23・24もIV期に帰属する可能性が高い。25の底部破片はやはり胎土が疎悪であり、V期以降の所産と考えられる。

c. 出土遺物による遺構の年代

上記したもののうち、2、16、18、24が、SD2から出土している。このうち時期が鑑別できたものは、2の壺底部がV期、24の片口鉢がIV期、というものである。これからすればSD2は15世紀に埋没したものと推測される。また掘立柱建物跡の柱穴と思われるピット(SB1P1、SB1P5、P49、P68)から出土する珠洲焼もIV期～V期のものがあり、掘立柱建物跡の構築時期にも時期幅が考えられる。

5～7はSK14から出土した銭貨である。5、6は著しく腐食が進んでいる。5は元符通宝、6は開元通宝、7は寛永通宝である。SK14からは15の壺の破片(V期)も出土しているが、この土坑の埋没年代は7の寛永通宝を基準にせざるを得ないだろう。

(2) B地区の出土遺物(図版34・35、図版48)

B地区からは縄文土器8点、石器類2点、須恵器3点、土師器10点、珠洲焼2点、陶磁器類28点、和釘18点、その他金属器2点、鏃93点、その他12点が出土した。調査区南側のSD1から須恵器が、同じく南側のSK1から和釘18点、鏃72点が出土した。その他の遺物に関しては、植栽痕からの須恵器をはじめとして、プライマリーなものではないと考えられる。

a. 縄文時代の遺物

B地区からも若干の縄文土器が出土した。それらのうち図化した2点について説明する。28は縄文時代中期末の沖ノ原式と思われる。口縁部に水平に巡る加飾隆帯を巡らし、この隆帯の直下に何らかのモチーフを細い沈線で描いている。36は包含層中から出土した。磨耗が著しい。縄文もしくは撲糸文のような痕

跡が観察されるが判然としない。しかし、胎土等から中期の所産と推測される。

b. 古代の遺物

B地区 S D 1 からは須恵器が出土している。26・27とも壺の胴部破片で、かなり厚手である。26は外面に平行タタキ、内面に平行のタタキ→同心円タタキが見られる。また、外面には自然釉がかかる。27は叩打痕が非常に浅く、外面には格子目タタキ、内面には同心円タタキが見られる。植栽痕からも少数ながら遺物が出土したが、ほとんどが近代の磁器類であった。ここでは1点のみ図化した。35は、やはり須恵器の壺の胴部破片である。外面には平行タタキ、内面には同心円タタキがなされている。これら須恵器については出土量が少なく小破片であるため正確な帰属時期は不明であるが、およそ9世紀後半のものであろうか。

c. 近世の遺物

S K 1 からは18点の和釘が出土した。このうち釘等の形状が比較的明瞭なもの6点を図化した。29は和釘先端部に小さな部材が付着したもの。釘部分の断面は一辺6mm弱である。30は和釘中程から先端部に近い部分である。上部に僅かであるが部材が残存している。釘部分の断面は一辺6.5~7mmである。31は和釘頭部付近の資料である。頭部は直角に曲がっている。この頭部には水平に部材が付着し、中程の部分には垂直に部材が残る。銷の付着が著しく釘断面の計測ができない。32は最も長く残存している資料で、頭部から先端部近い部分までが残る。頭部は直角に曲がっており、頭部直下から中程にかけてずっと部材が残存しているが、薄い部材が正面側と裏面側とに2枚残っている。銷のため和釘断面の計測はできない。33は頭部から中程にかけての資料である。頭部には多量の銷が付着している。部材の残存状況は31と同様であり、正面、裏面両側に見られる。和釘断面は一辺4.2mmである。34は中程から先端部付近の資料である。正面から見て左側にやや大きな部材が付着している。断面は一辺5.2mmである。

d. 出土遺物による遺構の年代

S D 1 は現場で土師器の破片も出土していたことから、ほぼ古代の遺構と考えてまちがいない。S K 1 に関しては、覆土中に肥前系の磁器の破片が含まれることから18世紀以降の構築と捉えた。植栽痕は近・現代のものと推測している。その他のものについては、帰属時期を明確にすることはできなかった。

(3) C地区の出土遺物（図版35~37、図版48~50）

C地区からは、縄文土器3点、石器7点、須恵器1点、土師器29点、珠洲焼79点、陶磁器類36点、鏡1点、和釘3点、刀子3点、その他金属器87点、礪126点、その他19点が出土した。これらの多くはC地区北側の遺構が集中している区域から出土している。その他に、その他金属器、陶磁器類の数字には、SK14などの現代のゴミ穴から出土したものが含まれている。

a. 縄文時代の遺物

53は植栽痕と思われるP 1 から出土した縄文土器である。L R 縄文が施される。胎土・焼成などから中期の土器であろうか。50はバステル形石製品である。SK15（現代の搅乱）から出土した。石器周縁部正面（註3）にやや明瞭な縦の稜線が認められるほかは、非常に細かい線条痕が観察される。線条痕は縦方向よ

りも斜め方向が多い。上端部には大きな加工面が見られる。これは他の細かい加工面を切っており新しいものである。この加工面には、若干のくぼみや細かい斜位方向の線状痕が見られる。下端部にも細かい加工面が数多く認められる。64は安山岩製の打製石斧である。C地区中央付近で単独で出土した。正面裏面ともに自然面を残し、基部は折損している。65は安山岩製の砥石である。断面四角形を呈し、その4面とも研磨されている。顯著な線条痕には斜位のものが多い。C地区北側拡張区から出土している。

b. 中世の遺物

C地区北側では珠洲焼がやまとまって出土した。

A地区同様壺の個体数は少ない傾向にある。37はSD3等から出土した長胴壺の半完形品である。胴部の打圧痕の幅は広く深い。口縁部形態からV期のものであろう。なお、本資料には「大」の刻印が認められた。43も壺の胴部破片であろう。IV期であろうか。また51も壺の口縁部破片資料であるがその形態から、IV期よりも遡る可能性が高い。

やはりA地区同様珠洲焼の壺がやや多く出土している。38はロクロ成形の壺で、IV2期に属する。44は頭部付近の破片で打圧痕が非常に緻密である。IV期以前に遡る可能性が高い。52もロクロ成形の壺で胴部に波状文を描く。これはIV期であろうか。58も壺の底部資料である。59も壺の小破片と考えられる。

同様に珠洲焼の片口鉢も出土している。39は、SD2とSD3から出土したものが接合した資料で、底部付近の資料である。胎土からV期のものであろう。42は、和鏡の出土位置の近くから出土した資料である。全体が浅黄橙色を帯びており通常の珠洲焼の焼成状況とは異なる。器面に小さい剥落痕が幾つも見られ破断面に炭化物が付着していることから、削れた後にも熱を受けたものと考えられる。IV期に属するであろう。51と60はV期に、61はIV期に属するものと思われる。なお、55は瓦質の片口鉢である。

47～49はロクロ成形の土師器である。47と49は無台坏、48の器種は不明である。なお、これらが出土したSK14は現代のゴミ穴であり、その覆土に混入したである。

45は和鏡である。これについての記述は、VI章附編1に譲ることとする。

40、41、46は刀子である。40には若干金属部分が露出している部分がある。刃の部分であろうか。41は鍔の付着が著しく表面にはほとんど金属部分が露出していないが、X線撮影の結果、刃口付近の破片であることが判明した（図版49-40・41）。また、46も同様に目釘穴付近の破片であることがX線撮影の結果判明している（図版49-46）。

c. 時期不明の遺物

62は五角形の薄い金属品である。銀の可能性もあるが針は残存していない。記章であろうか。63も金属製品で、断面H形の構造をなし、二枚の板状部を棒状部が接合する。板状部表面には漆が塗られる。

d. 遺物による遺構の年代

SD3から最もまとまって出土しつつ最も新しい37の年代観（V期）から、SD3の覆土は15世紀前半以降に形成されたものであろう。和鏡を始め、38、42、44など、この年代よりも古い遺物がSD3の②層から伴っているが、これらに関しては伝世品と解釈するしかない。また、接合資料からSD5、SK1、P22がSD3と同時期と推測される。他には、54を出土したP26が、SD3よりも古い遺構の存在を示すものとして注目される。

第2表 遺構観察表

A地区	遺構名	確認面	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	長軸方位	時代	他遺構との関係	備考
区段7	SD 1	V型	直線形	楕形	1.80	0.70	0.23	N=10°-E	中世		
区段8	SD 2	Ⅶ型	直線形	楕形	<0.90>	0.76	0.29	N=15°-E	15世紀		
区段8	SD 3	V型	直線形	楕形	<2.40>	0.93	0.16	N=15°-E	中世		
区段9	SD 5	V型	直線形	楕形	<11.40>	0.96	0.17	N=14°-E			
区段10	SD 6	V型	直線形	—	<26.04>	0.73	0.22	N=82°-W	14~15世紀		
区段9	SD 7	V型	直線形	方彌	<15.98>	0.50	0.23	N=54°-W	近代?		
区段9	SD 8	V型	直線形	楕形	<0.98>	1.04	0.23	N=8°-W			
区段9	SD 9	V型	直線形	楕形	<11.60>	0.33	0.17	N=84°-W	近代?		
区段11	S B 1	V型	直線形	—	6.12	3.78	—	N=10°-E	14~15世紀		
区段11	P 1	V型	橢円形	適合形	0.46	0.38	0.46				
区段11	P 2	V型	橢円形	適合形	0.46	0.36	0.74				
区段11	P 3	V型	橢円形	適合形	0.36	0.30	0.70				
区段11	P 4	V型	橢円形	適合形	0.28	0.28	0.50				
区段11	P 5	V型	橢円形	適合形	0.32	0.28	0.20				
区段11	P 6	V型	橢円形	適合形	0.40	0.32	0.46				
区段11	P 7	V型	橢円形	適合形	0.38	0.32	0.28				
区段11	P 8	V型	橢円形	適合形	0.36	0.32	0.24				
区段12	S B 2	V型	—	—	5.70	—	—	N=85°-E	14~15世紀		
区段12	P 1	V型	喇叭形	楕形	0.46	0.38	0.33				
区段12	P 2	V型	喇叭形	適合形	0.42	0.40	0.26				
区段12	P 3	V型	喇叭形	適合形	0.42	0.40	0.27				
区段12	P 4	V型	喇叭形	U字形	(0.46)	0.44	0.27				
区段12	S B 3	V型	1間×2間	—	4.08	2.94	—	N=7°-E	14~15世紀		
区段12	P 1	V型	橢円形	適合形	0.38	0.36	0.44				
区段12	P 2	V型	橢円形	適合形	0.48	0.36	0.65				
区段12	P 3	V型	橢円形	適合形	0.44	0.40	0.45				
区段12	P 4	V型	橢円形	U字形	0.40	0.32	0.23				
区段12	P 5	V型	橢円形	U字形	0.52	0.40	0.33				
区段12	P 6	V型	喇叭形	適合形	0.40	0.36	0.33				
区段13	S K 2	V型	円形	—	1.98	<1.08>	—				
区段13	S K 6	V型	喇叭形	適合形	1.38	1.26	0.36	N=7°-E	中世		

箇条No	通構名	構造面	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	長軸方位	時代	他遺構との関係	備考
國號13	S.K.7	V型	略正方形	適合形	1.74	1.60	0.32	N=14°E	中世		
國號14	S.K.8	V型	長方形	適合形	2.88	<1.62>		N=14°E	中世		
國號14	S.K.9	V型	長方形	楕円形	1.76	1.04	0.66	N=69°W	中世		
國號14	S.K.10	V型	略正方形	不整形	1.46	1.44	0.33	N=14°E	中世	S.K.16の金印5	
國號14	S.K.11	V型	長方形	不整形	<1.96>	1.12	0.37	N=73°W	中世	S.K.9に切られる	
國號15	S.K.13	V型	斜形	椭円形	(3.80)	(2.52)	0.17	N=54°W			
國號15	S.K.16	V型	長椭円形	椭円形	2.44	1.36	0.20	N=55°W			
國號15	S.K.17	V型	不整形四角形	不整形四角形	1.64	0.92	0.36	N=33°E			
國號16	S.X.1	V型	稍凹形	適合形	2.04	0.76	0.25	N=14°W			
國號16	P.1.1	V型	略凹形	U字形	0.38	0.34	0.36				
國號16	P.1.2	V型	不整形四角形	U字形	0.48	0.40	0.24				
國號16	P.1.4	V型	不整形四角形	U字形	0.28	0.28	0.22				
國號16	P.1.6	V型	不整形四角形	適合形	0.40	0.34	0.20				
國號16	P.1.7	V型	略椭円形	適合形	0.68	0.40	0.32				
國號16	P.1.9	V型	略凹形	U字形	0.48	0.44	0.42				
國號16	P.2.1	V型	略凹形	適合形	(0.32)		0.32				
國號16	P.2.2	V型	略凹形	U字形	0.40	0.40	0.29				
國號16	P.2.4	V型	略凹形	真U字形	0.40	0.36	0.36				
國號16	P.3.3	V型	略凹形	U字形	0.44	0.42	0.46				
國號16	P.3.5	V型	略凹形	適合形	0.44	0.42	0.36				
國號16	P.4.1	V型	略椭円形	U字形	0.42	0.36	0.34				
國號16	P.4.5	V型	略椭円形	U字形	0.32	0.24	0.34				
國號16	P.4.9	V型	不整形四角形	適合形	0.58	0.48	0.39				14世紀
國號16	P.5.9	V型	略凹形	適合形	0.36	0.34	0.26				
國號16	P.6.0	V型	略椭円形	適合形	0.32	0.28	0.24				
B地区											
國號18	S.D.1	V型	稍凹面	平面形	<1.40>	0.60	0.18	N=81°W	9世紀後半?		
國號19	S.D.2.a	V型	直線形	適合形	<3.44>	0.30	0.14	N=56°W	近代?		
國號19	S.D.2.b	V型	直線形	楕円形	<6.48>	0.29	0.09	N=86°W	近代?		
國號20	S.D.3	V型	直線形	不整形	<6.08>	0.60	0.25	N=77°W	S.D.5との切り替り点?		
國號20	S.D.4	V型	S字形	V字形	<13.12>	0.96	0.36	N=90°W	S.D.4との切り替り点?		
國號20	S.D.5	V型	直線形	V字形	<7.60>	0.34	0.14	N=75°W	N=75°W		

箇条号	遺構名	縦断面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	長軸方位	時代	他遺構との関係	備考
国観21	SK 1	V型	長方形	輪形	260	1.08	0.27	N°31°-W	近世?		
国観22	SK 2	V型	長方形	V字形	1.36	1.16	0.46	N°79°-W			
国観23	SK 3	V型	箱形	輪形	350	1.21	0.28	N°87°-W			倒木痕
国観24	E 1-P 4.2	V型	矩方形	適合形	0.76	0.70	0.23		近代		
国観23	E 1-P 4.3	V型	矩方形	適合形	0.76	0.58	0.23		近代		
国観23	E 1-P 4.8	V型	矩方形	適合形	0.86	0.68	0.37		近代		
国観23	E 1-P 7.1	V型	不整輪形	不整輪形	1.16	1.12	0.26		近代		
国観23	E 2-P 1.9	V型	輪切形	圓形	0.66	0.60	0.11		近代		
国観23	E 2-P 5	V型	輪切形	圓形	0.68	0.62	0.16		近代		
国観23	E 3-P 1.2	V型	輪切形	圓形	0.72	0.64	0.22		近代		
国観23	E 3-P 1.3	V型	輪切形	圓形	0.76	0.72	0.10		近代		
国観23	E 4-P 1.1	V型	輪切形	適合形	0.68	0.68	0.28		近代		
国観23	E 4-P 1.9	V型	輪切形	輪形	0.70	0.64	0.22		近代		
C 桁区											
国観20	遺構名	縦断面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	長軸方位	時代	他遺構との関係	備考
国観25	SD 1 a	V型	直線形	適合形	<1268>	0.66	0.18	N°76°-W	不明	P 4 Bと同時	
国観25	SD 1 b	V型	直線形	適合形	<1264>	0.68	0.21	N°76°-W	不明		
国観26	SD 2	V型	直線形	輪形	<240>	0.70	—	N°78°-E	15世紀		
国観27-28	S D 3	V型	直線形	V字形+适合形	<240>	0.76	0.35	N°84°-E	S D 1.2-P 4.6を跨る。SK 1.8-P 4.4, SK 3-P 4.6を跨る。		
国観27-28	S D 4	V型	直線形	圓形	<748>	0.70	0.18	N°9°-W	15世紀	S D 3-P 4.6を跨る。	
国観27-28	S D 5	V型	S字形	V字形	<1576>	1.08	0.30	N°6°-W	S D 4-P 4.6-S K 2.6に跨る。P 2		
国観27-28	S D 6	V型	直線形	圓形	<492>	0.42	0.09	N°89°-E	S D 3-P 4.6を跨る。		
国観27-28	S D 7	V型	弧形	輪形	<432>	0.64	0.15	N°84°-E	数多くビットで埋められた。		
国観27-28	S D 9	V型	直線形	V字形	<144>	0.10	0.12	N°79°-E	S D 3と同時		
国観27-28	S D 1.1	V型	直線形	輪形	<420>	0.42	0.08	N°48°-E			
国観27-28	S D 1.2	V型	弧形	輪形	<444>	0.49	0.16	N°49°-W	S D 3に跨られる。		
国観29	S B 1	V型	1間×3間	—	5.04	3.38	—	N°19°-W	P 1の施設跡やS D 3 E 9 A3、A4、A5		
国観29	P 1	V型	輪切形	適合形	0.32	0.32	—				
国観29	P 2	V型	輪切形	適合形	0.32	0.28	0.42				
国観29	P 3	V型	輪切形	不整U字形	0.44	0.32	0.31				
国観29	P 4	V型	輪切形	U字形	0.36	0.34	0.27				
国観29	P 5	V型	不要輪切形	適合形	(0.28)	0.28	0.10				
国観29	P 6	V型	輪切形	適合形	0.36	0.34	0.29				

箇号No	通構名	確認面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深度 (m)	長軸方位	時代	他遺構との関係	備考
國保29	P 7	V型	鶴印形	適合形	0.46	0.44	—				柱頭 A 9
國保29	P 8	V型	円形	適合形	0.36	0.32	0.35	N<8°-W			
國保29	SK 1	V型	方形	輪形	1.40	1.38	0.35	N<8°-W	中世		
國保29	SK 2	V型	方形	輪形	1.84	1.64	0.52	N<89°-W	中世		
國保29	SK 4	V型	鶴長方形	輪形	1.96	1.20	0.40	N<84°-W	中世		
國保29	SK 5	V型	長方形	輪形?	1.54	1.04	0.19	N<81°-W	中世		
國保25	SK 25	V型	方形	V字形	<0.56>	<0.54>	<0.36>	N<8°-E			
國保25	SK 6 a	V型	鶴印形	輪形?	1.03	0.43	0.16	N<31°-W			
國保25	SK 6 c	V型	鶴印形	圓形	1.38	0.84	0.18	N<75°-W			
國保20	SK 8	V型	不整方形	適合形	2.20	1.04	0.23	N<8°-W	中世		
國保20	SK 9	V型	鶴印形	圓形	0.92	0.76	0.18	—			柱頭 A 9
國保31	SK 1 0	V型	長椭円形	有邊形	1.80	0.52	0.32	N<72°-W			性格不明
國保31	SK 1 1	V型	長椭円形	適合形	1.68	0.60	0.21	N<80°-E			性格不明
國保31	SK 1 8	V型	稜形	不整適合形	2.22	1.92	0.80	—			SD 3 上時間
國保31	SK 1 9	V型	不整円形	輪形	1.24	1.20	0.48	N<3°-E	15世紀		
國保31	SK 2 0	V型	長方形	適合形	1.46	0.96	0.23	N<86°-E	中世		
國保31	SK 2 4	V型	輪形	輪形	2.96	2.30	0.49	N<82°-W	SD 3 上時間?		
國保32	P 1	V型	鶴印形	V字形	1.00	0.84	0.18				
國保32	P 2	V型	鶴印形	V字形	0.92	0.84	0.13				
國保32	P 4 a	V型	柱印形?	圓形?	<0.54>	0.72	0.35	N<56°-W			
國保32	P 4 b	V型	輪形円形	輪形?	1.26	1.06	0.55	N<2°-W			
國保32	P 7	V型	不要筋円形	V字形	0.92	0.32	0.29				
國保32	P 1 4	V型	鶴印形	有邊形	0.64	0.60	0.29				
國保32	P 1 1	V型	鶴印形	U字形	(0.44)	0.40	0.46				
國保32	P 1 2	V型	鶴印形	U字形	0.44	0.40	0.43				
國保32	P 3 5	V型	鶴印形	適合形	0.36	0.32	0.40				
國保32	P 3 7	V型	円形	適合形	0.36	0.32	0.33				
國保32	P 5 1	V型	輪形円形	輪形	0.54	0.46	0.24				
國保32	P 5 2	V型	輪形円形	適合形	0.66	0.36	0.18				
國保32	P 8 2	V型	輪形円形	適合形	0.40	0.32	0.13				
國保32	P 9 0	V型	不整円形	U字形	0.46	(0.34)	0.32				
國保32	S X 1	V型	不整形	有邊形	1.24	0.76	0.32				

第3表 出土土器観察表

(数値)は推計値 <数値>は実在値 但し、厚さと重量はすべて現在値である。

地区	回収 No.	地質	断面	形状	底径 (mm)	高さ (mm)	底面 (mm)	壁厚 (mm)	重さ (kg)	縦:		横:		法 量		法 量		法 量	
										内面	外側	内面	外側	内面	外側	内面	外側	内面	外側
A	33	2	真西焼	盤	-	-	128	2250	83.4	-	-	-	-	75.5/1	c-6.9	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-
A	33	3	真西焼	盤	-	-	-	-	74	107	-	-	75.7/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-	
A	33	4	真西焼	深鉢?	1148部	-	-	-	65	71	-	-	10Y85.3	8.1	-	-	-	-	
A	33	8	真西焼	中盤	1148部-1149部	1227	109	33.5	142	1960.3	2.5	-	-	3Y5.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-
A	33	9	真西焼	盤?	鍋底	-	-	-	80	160	-	-	1 mm直径子少	13.4	-	-	-	-	
A	33	10	真西焼	盤?	鍋底	-	-	121	121	-	-	1 mm直径子少	12.1	75.6/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	
A	33	11	真西焼	盤?	鍋底	-	-	59	137	-	-	1 mm直径子少	10Y85.3	8.1	-	-	-	-	
A	33	12	真西焼	盤?	鍋底	-	-	66	71	-	-	1 mm直径子少	10Y85.2	8.1	-	-	-	-	
A	33	13	真西焼	盤?	鍋底	-	-	73	269	-	-	1 mm直径子多	10Y87.4	8.1	-	-	-	-	
A	33	14	真西焼	盤?	鍋底	-	-	173	185.5	-	-	1 mm直径子少	8.3	5Y5.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	
A	34	16	真西焼	盤?	鍋底	-	-	101	601	-	-	1 mm直径子少	10Y85.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-	
A	34	17	真西焼	盤?	鍋底	-	-	107	31.9	-	-	1 mm直径子少	8.2	75.6/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	
A	34	18	真西焼	盤?	鍋底	-	-	93	238	-	-	1 mm直径子少	5Y5.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-	
A	34	19	真西焼	盤?	鍋底	-	-	93	21.7	-	-	1 mm直径子少	3Y5.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-	
A	34	20	真西焼	盤?	鍋底	-	-	116	37.9	-	-	1 mm直径子少	5Y6.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-	
A	34	21	真西焼	月口盤	1148部	-	-	-	101	601	-	-	1 mm直径子少	8.2	75.6/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-
A	34	22	真西焼	月口盤	1148部	-	-	-	115	551	-	-	1 mm直径子多	8.2	75.6/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-
A	34	23	真西焼	月口盤	1148部	-	-	-	116	1107	-	-	1 mm直径子多	8.2	5Y5.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-
A	34	24	真西焼	月口盤	1148部	-	-	-	119	994	-	-	1 mm直径子多	5Y5.2	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-
B	34	25	真西焼	盤?	鍋底	-	-	100	-	16.2	994	-	-	4 mm秒径子多	25.5/6.1	c-6.9	ロクロナフ	ロクロナフ	V面
B	34	26	真西焼	盤?	鍋底	-	-	120	686	-	-	2 mm直径子多	25.5/6.2	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	内面	外側	
B	34	27	真西焼	盤?	鍋底	-	-	147	98.4	-	-	2 mm直径子少	75.6/7.6	8.1	内心凹凸付	内心凹凸付	-	-	
B	34	28	真西焼	盤?	鍋底	-	-	80	66	-	-	2 mm直径子多	75.6/7.6	8.1	内心凹凸付	内心凹凸付	-	-	
B	35	25	真西焼	盤?	鍋底	-	-	130	44.7	-	-	1 mm直径子多	75.6/1	8.1	内心凹凸付	内心凹凸付	-	-	
B	35	26	真西焼	盤?	鍋底	-	-	80	192	-	-	1 mm直径子少	75.7/7.4	8.1	内心凹凸付	内心凹凸付	-	-	
C	35	27	真西焼	盤?	鍋底	-	-	547.7	120	527.6	1.7	-	-	3 mm直径子少	N5/7	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	V面
C	35	28	真西焼	盤?	鍋底	-	-	582.7	70	261.3	1.4	-	-	2 mm直径子少	N5/	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	V面
C	35	29	真西焼	月口盤	1148部	-	-	11.8	-	15.4	343.0	-	-	1 mm直径子多	2.5/5.6/1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	V面
C	36	42	真西焼	月口盤	1148部	-	-	-	127	331.9	-	-	1 mm直径子少	10Y88.7	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-
C	36	43	真西焼	盤?	鍋底	-	-	-	118	80.5	-	-	1 mm直径子少	75.5/6.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	-	-
C	36	44	真西焼	盤?	鍋底	-	-	102	34.8	-	-	1 mm直径子少	3Y6.1	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	内面	外側	
C	36	45	19.0(1脚)	盤?	脚付	1148部-1149部	-	-	76	14.8	-	-	1 mm直径子少	75.7/7.6	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	内面	外側
C	36	46	19.0(1脚)	盤?	不明	1148部	-	-	80	90	-	-	1 mm直径子少	75.7/7.6	8.1	ロクロナフ	ロクロナフ	内面	外側

地区	国號	地級	縣級	產地	法			色調	外觀	構成	法(内・外)・特徴			参考
					長(m)	幅(m)	厚(m)				内	外	特徴	
C	36	49	江蘇	無所村	113.4	-	-	71	79	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	51	蘇州境	月口村	76.3	-	-	101.1	57.3	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	52	蘇州境	無所村	-	-	-	95.6	76.6	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	53	蘇州文澤	無所村	-	-	-	109.0	26.3	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	54	蘇州境	無所村	114.8	-	-	117.1	115.5	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	55	蘇州境	月口村	76.3	-	-	112.0	47.0	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	56	蘇州境	無所村	-	-	-	145.6	64.5	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	36	57	蘇州境	無所村	114.8	-	-	94.1	11.3	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	37	58	蘇州境	無所村	-	-	-	74.0	116.0	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	37	59	蘇州境	無所村	-	-	-	80.0	169.0	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm
C	37	60	蘇州境	月口村	81.8	-	-	101.4	118.1	-	-	-	-	周H 1 不詳・底面に△ タテ字
C	37	61	蘇州境	月口村	114.8	-	-	101.1	172.1	-	-	-	-	周H 1 単位高さ・幅 2.7cm

第4表 出土石器類別統計表

地区	国號	地級	縣級	器種	量			石	材	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)			
A	33	1	蘇州境	打制斧	6.7	4.7	1.5	20.2	石	周H 1
A	33	5	蘇州	打制斧	9.7	2.2	2.6	56.3	石	周H 1
C	37	65	無所村	石刀	9.7	1.1	1.1	25	石	周H 1
C	36	30	月口村	石刀	-	-	-	-	石	周H 1

第5表 出土金屬製品觀察表

地区	国號	地級	縣級	器種	量			石	材	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)			
A	33	1	蘇州境	<24>	-	-	-	7.5	20.2	周H 1
A	33	5	蘇州	(24)	-	-	-	1.5	1.4	周H 1
A	33	6	蘇州	(24)	-	-	-	1.3	1.0	周H 1
A	33	7	蘇州	(24)	-	-	-	1.0	1.7	周H 1
B	34	29	和田	<23>	1.6*	0.6	0.6	1.7	部材	周H 1
B	34	30	和田	<40>	<39>	0.8	0.22	-	-	周H 1
B	34	31	和田	<28>	<26>	1.4	1.0	部材	周H 1	
B	34	32	和田	<43>	<37>	1.2	1.8	部材	周H 1	
B	35	31	和田	<36>	<13>	1.7	1.4	部材	周H 1	
B	35	34	和田	<22>	<47>	0.6	0.3	部材	周H 1	
C	35	40	和田	<53>	<20>	5.1	1.23	部材	周H 1	
C	35	41	和田	<52>	<28>	9.0	1.50	部材	周H 1	
C	36	45	和田	86	87.1	0.5	4.10	部材	周H 1	
C	36	46	和田	<34>	<13>	9.3	1.17	部材	周H 1	
C	37	62	不明	<67>	<30>	1.5	7.6	部材	周H 1	
C	37	63	記念	<16>	<15>	2.0	1.3	部材	周H 1	

第V章　まとめ

A地区ではL字状に組み合う溝状遺構によって区画された範囲があり、その内側から掘立柱建物跡3棟と土坑群が発見された。掘立柱建物跡の柱穴は南側に、土坑は北側に分布する。溝状遺構の埋没年代はSD2の出土遺物からおよそ15世紀頃と考えられるが、SD2に切られた溝も存在することから、溝には時期幅が想定される。掘立柱建物跡は、その柱穴(SB1P1)やその他のピット(P49)の出土遺物から14世紀代に遡るものがあるが、発見された3棟以外にも建物の存在が予想されることから、やはり時期幅を持つだろう。土坑からの出土遺物はないが、SK6～SK11に関してはやはり中世の土壤墓と理解したい。遺構同士に僅かな切り合いが認められ、多少の時期幅が想定される。

B地区では南側の溝状遺構と土坑が注目される。SD1については出土遺物から古代のものと考えられる。単独で発見されたSK1の覆土からは多量の織と和釘が発見され、石組と木棺を有する土壤墓と推測した。上部マウンドが削平されてしまった状態で発見されたものであろう。これは近世のものと推測している。

C地区北側には遺構・遺物が集中して発見された。この出土土器類は大多数が珠洲焼で占められ、1点のみ瓦質陶器が伴った。日常生活を支えた道具類としては偏っており、そこに和鏡、刀子という特殊なものが伴う。他方で、同時存在した可能性の高いSD3、SD5は不整形ながら一定の空間を囲み「周溝」のようにも見える。以上のように遺物の出土傾向と溝のあり方を考え合わせると、経塚もしくは墓の存在を想定したくなる。実際SK1・2・4・5・19・20は、A地区で発見された土坑と同様土壤墓であろう。このような状況から、C地区北側を、周溝を持つ「墳丘墓」あるいは「方形基壇墓」(畠田1994)と、それを取り囲む土壤墓群、という構成を持つ場として想定することも可能であろう。そして、墳墓群が破壊され周囲にあつた土葬墓の骨蔵器(珠洲焼)や副葬品(和鏡)が「方形基壇墓」の周溝の中に流れ込んだ、という過程を復元したくなる。しかしながら、SD3における遺物の出土状況は、この推測と合致しない側面がある。多量に炭化物を含んだ層は、主に溝の底面直上に敷き詰められるように堆積しており、その層中から出土した遺物や織も溝の断面形状に沿うように出土している。周辺からの流れ込みというよりも、まさに溝のところで燃焼作用が行われ、遺物もそこに遺棄したような状況であった(図版45)。和鏡を廃棄するという行為は考えにくいことから、これはある種の祭祀行為の跡と考えたい。最も新しい出土遺物(図版35-37)から15世紀前半頃の堆積と推測されよう。何らかの事情で経塚、墳墓などが破壊されてしまい、露出した骨蔵器や副葬品を埋納し直した跡と捉えておきたい。

また、C地区北側では、掘立柱建物跡も復元された。これはSD3との切り合いから、それに先行することが判明している。今回1棟のみの復元に留まったが、柱穴と考えられるピットは多数確認されており、他にも掘立柱建物跡があつたことは間違いない。想像の域を出ないが、図版36-54のようなⅡ～Ⅲ期に遡る堀口縁部の出土例から、13世紀代には当地に簡素な掘立柱建物が建てられたのではないかと推測したい。しかしこの掘立柱建物跡については、出土遺物の傾向からやはり日常的な住居跡というよりも、葬送や祭祀にかかる簡素な施設と捉えたい。そう考えると、接合例から溝(SD2・SD3)、柱穴(P22)、土壤墓(SK1)が15世紀に同時に併存していたと推測されることとも矛盾しなくなる。遺跡の主体となる時期(14世紀から15世紀前半)においては、一貫してこのエリアは葬送の場であったと解釈したい。

これはA地区でも同じことが言える。出土遺物の時期幅と偏り、そして遺構の構成要素(溝・掘立柱建物跡・土坑)が併存する状況において一致する。A地区とC地区北側との間には大きな未調査エリアが広がるが、この間にも同じような状況が連続している可能性は低くない。となると、当地には相当の広さの墓域が広がっていたことになる。これが確かなら当地は南北朝期から室町時代にかけての在地勢力の葬送の場であったと考えられるであろう。

註

- 註1 粘性、縮まりの強弱の表現については“非常に弱い”を<1>とし、“非常に強い”を<5>とし、5段階評価で表現することにした。また、覆土中の混入物の多寡についても同様に、“微量”を<1>とし、多量を<5>と表現した。これは現場段階から、本書本文中、観察表、図版などで共通している。
- 註2 珠洲焼の編年・年代については〔吉岡1994〕を参考にした。本書における期別（Ⅰ期、Ⅱ期など）表現は、本文、観察表とも全て、同書の年代觀に準ずるものである。
- 註3 パステル形石製品の用語については、〔倉石2005〕を参考にした。

参考文献

- 青木 豊 1992 「和鏡の文化史」 刀水書房
- 青木 豊 2005 「平安の鏡と土器類」『季刊考古学』第93号 雄山閣 55-59頁
- 石井 進編 1993 「帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 中世社会と墳墓」 名著出版
- 伊藤啓雄 1999 「第1項 経塚と塚 第5節 中世の信仰と墓制 第5章 中世・近世」新潟県考古学会編『新潟県の考古学』 408-413頁
- 小千谷市 1969 「小千谷市史」本編 上巻
- 金子拓男 1975 「経塚と墳墓」『新潟県史』通史編1 原始 681-686頁
- 倉石広太 2005 「中越地域採集のパステル形石製品」『越佐補遺些』第10号 越佐補遺些の会 38-43頁
- 児玉幸多編 1992 「日本交通史」 吉川弘文館
- 小出義治 1978 「小栗山古墳院裏山経塚群」 見附市教育委員会
- 越路町 1998 「越路町史」資料編1 原始・古代・中世
- 越路町 2003 「越路町史」通史編 上巻・下巻
- 駒形敏朗 1982 「越路町文化財調査報告第8輯 成台遺跡調査報告書」 越路町教育委員会
- 品田高志 1994 「越後における中世の墳墓と墓地—墳墓と墓地の類型と消長を中心にして—」『柏崎市立博物館館報 No. 9』 柏崎博物館 37-56頁
- 上越市 2002 「上越市史」資料編3 古代・中世
- 高橋保雄ほか 1995 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第69集 北陸北線関係発掘調査報告書 宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡」 新潟県教育委員会
- 長岡市 1992 「長岡市史」資料編1 考古
- 長岡市 1996 「長岡市史」通史編上巻 自然・原始・古代・中世・近世
- 長岡市史編集委員会中世部会 1990 「長岡市史双書No.10 村は北谷にあった 一長岡市村町の中世を歩くー」 長岡市
- 中村孝三郎ほか 1970 「越路原総合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡」 越路町教育委員会
- 新田康則 2004 「越路町文化財報告書第25集 成台遺跡第二次発掘調査報告書」越路町教育委員会
- 新田康則 2007 「来迎寺涌畑地区」「平成18年度長岡市内遺跡第二次発掘調査報告書」長岡市教育委員会 20-21頁
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 渡辺秀男 2007 「新潟県越後平野南西部の河成段丘の編年と構造」『地球科学』61-2 地学団体研究会 129-142頁

第VI章 附編

1. 浦畠遺跡出土の和鏡について

國學院大學 青木 豊

本鏡は、鏡面径8.60cm、背面径8.71cm、縁高0.56cm、縁幅0.35cmをそれぞれ計測する。鏡胎は総体的に薄く、0.12～0.2mmを計る。

遺存状態は、検出時より界囲の内外区に亘る全面積の約4分の1程度の欠失を現状とし、縁の一部にブロンズ病が発生していたものの、残存部全域は良好である。この点は当該鏡の金質が白銅であることに原因するものと理解される。また、同時に錫の比率の高い白銅鏡であるがゆえに、青銅鏡とは異なり破鏡となったことが窺える。

鏡背意匠の全体構成は鉢を挟み左右に双鳥を、天地に松葉を回旋的、即ち点対象に鋳出する。この意味で本鏡の鏡背意匠は古式の平安鏡の意匠の構成要素を持つことを第一の特質とする。また、鏡背意匠構成から本鏡を「松萩双鳥鏡」とする。

萩ではなく藤の可能性も否定できないが、両者いずれの場合でも類例を見ない意匠である。

鉢は、花蕊座下隆鉢を置く。蕊部の鎧押しは入念になされているが、座円は崩れ不製円形を呈している。

鏡背意匠構成は、前述の通り回旋式を採用する。意匠は、松葉を低い横広がりの二等辯三角形状に一塊とし、下辯の両先端部と上辯部の三ヶ所に萩花を描く。鎧使いは至って精緻で鉄上がりも良好である。鉢を挟み点対象に双鳥を位置する。雀ではなく、まだ鳥である。

界囲は中線単線を採用する。外区は松枝で埋め尽くされる。縁は高縁中厚縁を呈し、僅かに外傾する。

本鏡の鏡式により製作年代を考えると、鎌倉時代初期（13世紀初頭）の所産とみて大過なかろう。たしかに、回旋式による鏡背意匠構成及び、松・萩・双鳥は平安鏡の様式を有する。しかし、縁及び界囲の肥厚、鉢座の不整、更には外区の松の充填度合は、平安時代（藤原鏡）を既に逸脱したものと看取せざるを得ないものがある。

本鏡の性格を考えた場合、検出遺構等々からは示唆する情報はない。新潟県下に於ける遺跡出土中世和鏡は遺漏も十分予想しているが次表のとおりであり、経塚出土和鏡が大半を占め、僅かに阿賀野市葺報寺（日洗沢）出土和鏡二面が墓への副葬品であるのみである。また、溝に伴う出土例として群馬県安中市上ノ久保遺跡出土の松鶴鏡一面があげられるが、当該鏡の使用に関しては雑駁に所謂祭祀行為と把えられているだけで、祭祀の具体的な目的・内容は不明である。したがって、当該鏡も祭祀行為の片鱗を彷彿させるが、それは鏡ゆえの思考であることも事実であると言わねばならない。



第17図 出土和鏡実測図 (S=4:5)

第6表 新潟県和銅出土地一覧

遺跡名	所在地	時代	和銅出土数 (共伴を含む)	遺物・遺構の概要	記載文献
曾下耕稼 加野人穴真光寺下 廻野井曳場内	上越市大字真光寺下 廻野井曳場内	平安末期～ 鎌倉初期	3 刀劍、 刀子	刀劍等社境内に所生のもの。遺物的性質で、 特に、免見された、或のより出土したとい われている。	上越市立綜合博物館1989「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」[上越市立総合博物館「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」「上越市総合博物館夏の特別展開催】
法定寺耕稼 上越市大字法定寺尾花 橋	上越市大字法定寺尾花 橋	室町時代	1	刀劍類絞檢・ 刀劍類	上越市立綜合博物館1989「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」「上越市総合博物館夏の特別展開催】
中正善寺耕稼 上越市中正善寺堂の 橋	上越市中正善寺堂の 橋	平安時代	4	五枚刀の寺域に立地する特徴がある。5枚刀 類が出土して、前面に刀柄にかけ、直腹 においており、詳細は明らかでない。	上越市史研究会2003「越後守安治88【考古・中正善寺】」
圓鏡耕稼 北原 上越市菅原中学校裏側 端	上越市菅原中学校裏側 端	平安時代	2	皿・鏡片 古鏡・鏡背・ 鏡・刀・真 鏡	上越市立綜合博物館1988「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」「上越市立総合博物館夏の特別展開催「古代人の生活と信仰」 2006「中正善寺の歴史と文化」[上越市立総合博物館「中正善寺の歴史と文化」]
林之寺遺跡 上越市寺町2	上越市寺町2	鎌倉時代	1	-	[高田山文化財調査報告書] 第5集
福川萬造社 通浜	上越市西長野木一番別 通浜	南北朝期	18	古鏡・鏡背・ 鏡・刀・真 鏡	上越市立綜合博物館1988「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」「上越市立総合博物館夏の特別展開催「古代人の生活と信仰」 2003「萬造社」[上越市立総合博物館「萬造社」]
菅原山源詮神 社通路	上越市源詮院真 社通路	平安時代	1	墨盒	上越市立綜合博物館1989「上越市立総合博物館夏の特別展開催「上越の歴史 と経済・農業出土品展—平安・鎌倉・室町—」[上越市立総合博物館「平安・鎌倉・室町」]
上越市黒田	上越市大字黒田	室町時代	1	-	上越市立総合博物館1988「考古・中・近世資料」 2003「上越市立総合博物館「考古・中・近世資料」」
楳峯耕稼 阿賀野市安田町大字寺 社子落葉	阿賀野市安田町大字寺 社子落葉	平安末期	4	刀劍類絞檢・ 首面金合子・ 白金頭・繩 木頭・刀刃・ 扇形刀刃 等	上越市立総合博物館1989「上越の歴史と経済・農業出土品展—平安・ 鎌倉・室町—」「上越市立総合博物館夏の特別展開催「占領の 輪島経済」[上越市立総合博物館「輪島経済」]
華報寺(日光) 荒沢	阿賀野市荒神村大字寺 澤子寺山	鎌倉後期	2	鋼製剪刀器・ 銅製口像	上越市立総合博物館1994「中世華報寺と出土物」「第7回北陸 秋季企画「中華人の生活と信仰」[輪島の神と仏]」
住吉遺跡 中島村住吉	阿賀野市中島村大字 住吉	鎌倉時代	1	梅根・青磁・ 白磁	川上真雄・鶴野伸世跡会1994「御物院 中世土器研究会」[中世の生活と信仰]
円鏡寺耕稼 長岡市村松町	長岡市村松町	鎌倉時代	1	銅鏡・銅鏡台・ 刀劍類	中世墓資料収集研究会2004「中世墓資料収集—北陸編—」 松谷太郎1958「越後の研究」「輪島の研究」13、開秀丸著1988「経済・開 拓その周辺」

遺跡名	所在地	時代	和出土数 (共件を含む)	遺跡・遺構の概要	記載文献	
村松耕家 長岡市村松町	平安時代	2	小丘上に立地する跡地である。 出土遺物・ 臼鉢・ 臼鉢子・ 刀身・ 刀身刃身	松江太郎1958「最後の経営」[越佐研究] 13、関秀夫編1988「耕家 - 関東とその周辺」		
十室寺白山神 社社屋	長岡市萬字宮ノ下 寺守	鎌倉時代	1	貴族墓地東 側附近・ 施設・ 墓地・ 墓地	関秀夫編1988「耕家 - 関東とその周辺」、新潟県立歴史博物館「2006年度秋企画「中世人の生活と信仰 越後住民の暮らしと伝統」	
轟尾	長岡市釜井町	鎌倉時代～ 室町時代	3	瓦礫・珠・ 削物・ 合子・ 刀子	長岡市1992「長岡市史 資料編1 考古」	
加茂市海神社 社屋	加茂市大字加茂字宮山	平安末期	1	銅製鏡・ 虫糞耳環	北陸中世土器研究会1994「第7回中世土器研究会中世北陸の寺院と墓地」	
要吉山城	加茂市字宮山	1	-	「面鏡と瓦器資料館」、資料の「手引」2	[つま] 9	
船坂通路	十日町市乙字坂ノ下	2	-	佐渡川右岸の河岸段丘上に立地する。周囲には 瓦器が存在し、百家の跡は残されていて、周 囲に石を配し、その上に築は置かれていた。	新潟県教育委員会1974「唐城文化財急調査報告書第2号」「北越北陸地理文化財 発掘調査報告書」、十日町市史編纂委員会1996「十日町市史」、資料編2 考 古	
川治百家0号	十日町市大字新田字 森上	鎌倉時代	1	-	佐渡川右岸の河岸段丘上に立地する。周囲には 瓦器が存在し、百家の跡は残されていて、周 囲に石を配し、その上に築は置かれていた。	新潟県教育委員会1974「唐城文化財急調査報告書第2号」「北越北陸地理文化財 発掘調査報告書」、十日町市史編纂委員会1996「十日町市史」、資料編2 考 古
鳥澤古墳群 新潟市舟野町	平安末期～ 鎌倉時代	5	銅製鏡・ 童子・白磁小 壺	高橋義彦1950「鳥越古墳及經済」「新潟県史籍名勝大典」、会津県会議 会議録1950「鳥越古墳及經済」「新潟県史籍名勝大典」、会津県会議 会議録1955「特別保護」「古墳・史跡全般を心に 久保義雄1960「経済の品目とその展開」、新潟県立歴史博物館2006「中 世人の生活と信仰 極後・近世の神と仏」		
興葉古墓 南島	新潟市毛長野毛尾字代 室町時代	1	履・靴貨	経済に富んだ北國の豪族以上に所在する跡地で ある。土気は外の土間に露出されていない。詳 細は不明である。	「新潟県通路地図」	
三日月城 大朝堂跡	新潟市坂口字東助 南魚沼市官ノ下	鎌倉時代	1	-	「新潟県通路地図」	
西山の塚 長表通路	新潟市大月子西山 南魚沼市小堀山	鎌倉時代	1	陶器・珠・ 削物・ 合子	松江太郎1958「最後の経営」[越佐研究] 13、関秀夫編1988「耕家 - 関 東とその周辺」	
					新潟県教育委員会1986「新潟県史叢文館」、財團法人新潟県歴史研究者会「関越自動車 道歴史文化財発掘調査報告書」長表通路	

遺跡名	所在地	時代	和銅出土数	出土遺物 (其作を含む)	道跡・遺跡の概要
天神山断崖縫 隙	糸魚川市舟守海岸石垣	平安末期	3	天神山山頂に面した砂防である。大正8年(1919)気仙沼の木本利根元が「風化・崩落等による開拓見付」された。昭和2年(1927)に最高。	間参天端1988「[新潟・福井・岡山]上越山立断崖合せ物館」開業とその沿革、大正8年(1919)気仙沼の木本利根元が「風化・崩落等による開拓見付」された。昭和2年(1927)年に最高。
白山神社境内	糸魚川市	律令時代	1	-	白山神社の境内背後の山から出土したといわれる。詳細は明らかでない。
三浦瀬石經塚	糸魚川市新道	律令時代	3	珠・圓・奇・絆・絆・絆	三浦の奥山に位置した。明治三十一年(1898)年高崎義美(1930「[新潟・福井・岡山]上越山立断崖合せ物館」開業とその沿革、大正8年(1919)気仙沼の木本利根元が「風化・崩落等による開拓見付」された。昭和2年(1927)年に最高。
小原山不動院	見附市小原町林野	平安末期	1	馬具類如革 像・首輪 毛色頭巾 毛白頭巾 頭巾布等	馬具川の右岸、西に面開平野を望む丘陵地。左端に位置する不動院の裏には築かれた跡家であり、馬が埋設されている。馬を出す馬具等の道跡は、現時中不時発見されたものであつた。
糸魚川市	村上市天保町	律令時代	1	-	上越山立断崖合せ物館1989「[新潟・福井・岡山]上越山立断崖合せ物館 夏の特別展覧会」
鶴南神社境内	高田市三郷 路	-	-	-	鶴南神社境内
坪ノ内前路	新井市木暮木立の奥 三河日置	律令時代	1	-	中条空庵さん委員会1983「[中条空庵]」
目坂通路	佐渡市宮ノ前神社 三森市吉坂御田	律令時代	1	-	津浦前空庵1984「[津浦前空庵上巻]」
織切通路	新内市北庄字河竹島	律令時代	2	-	志久見石切の開闢の東方山腹最前小台地に立地する。昭和8年(1933)年、村井祐三氏が野菜栽培のために菜園(ひのき)を手植(てう)けた。付近には津浦の石碑がある。発見した。
七ヶノ宮遺跡	舟魚沼郡野沢町上野宮 野原字七ヶノ宮	律令時代	2	-	上野原丘の山頂部(1933)年に豊島水道施設工事に際して、小牧山丸山を伐採する際に、その本の空室のなかで見はれていた。
押小牧社遺跡	舟魚沼郡舟橋町大字外 丸了	律令時代	1	-	津浦前空庵1984「[津浦前空庵上巻]」
村山空室	舟魚沼郡舟橋町	律令時代	1	-	「野」
セガ等2号窯	岩船郡村木七瀬	律令時代	1	万子・須恵 器片	津浦前空庵1984「[津浦前空庵上巻]」
うき山空室	岩船郡村木七瀬	律令時代	1	本陶片	新潟県教育文化行政課編「新潟県遺跡年鑑」

2. 長岡市浦畠遺跡における火山灰分析

新潟大学災害復興科学センター ト部厚志

(1) はじめに

本報告は、新潟県長岡市（旧越路町）において発掘調査された浦畠遺跡の基本土層について火山灰分析を行い、火山灰層序を明らかにすることを目的とする。

(2) 火山灰分析

黒土層やローム層中に含まれる火山灰は、鉱物組成、重鉱物組成、構成鉱物の屈折率などにより個々の火山灰を同定・対比を行うことができる。新潟県の中越地域のローム層では、これまでに新潟火山灰グループ [1981, 1995]、早津・新井 [1981] の検討により、約55,000年前の大山倉吉テフラ (DKP) [町田・新井, 2002]、姶良Tn火山灰 (AT火山灰) [町田・新井, 1976] や約13,000年前の浅間草津火山灰 (As-K火山灰) [町田・新井, 1992]などの広域火山灰を含めた基本的な火山灰層序が明らかにされている。また、黒土層の火山灰層については、ト部ほか [2000]、信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ [2002, 2003] で複数の火山灰を認定している。

試料分析の方法は、標準的な手順で行った。まず試料を、60、120、250メッシュの篩を用いて水洗した。水洗した試料はそれぞれの粒度ごとに乾燥させた。構成粒度による構成鉱物の差異を考慮するため、120メッシュおよび250メッシュの篩分試料を实体顕微鏡および必要に応じて偏光顕微鏡により観察した。各試料の重鉱物組成と火山ガラスの形態は、それぞれの相対的量比を第1表に示した。なお、火山ガラスの形態は吉川 [1976] による区分を用いた。

(3) 越路地区的段丘区分と火山灰層序

越後平野南西部の段丘面区分と対比はこれまで多くの研究がなされてきた〔新潟平野団体研究グループ, 1967; Ota, 1969; 新潟平野団体研究グループ, 1972; 太田・鈴木, 1979; 小林ほか, 1991; 堤ほか2001など〕。しかし、これらの研究での段丘面の区分と対比は必ずしも一致しておらず、この要因として段丘面を単に比高のみで比較し、詳細な火山灰層序によって段丘面の形成年代の特定と対比が行われてこなかったことが大きな課題となっている。

そこで渡辺・ト部 [2003] や渡辺 [2007] は、新潟平野団体研究グループ [1967, 1972] や新潟火山灰グループ [1981, 1995] の火山灰層序を踏襲しながら、新たに火山灰層序を整理・構築して、これに基づいた段丘面の編年を行っている。これらによると、例えば、従来、比高によって区分されてきた高位段丘と中位段丘が同じ段丘面であり、両者の比高の差異は大きな構造運動による差異であることなどが明らかにされたり、中位段丘でも比高の差から別の段丘に区分されていたものが同じものであることが明らかにされ、従来の段丘面区分と編年が大きく刷新された地域もある。

越路地域の段丘面区分については、新潟平野団体研究グループ [1972] により高位の面から、越路原Ⅰ面、越路原Ⅱ面、越路原Ⅲ面、越路原Ⅳ面、小栗田原面、船岡山面、潮音時面、小千谷面、米迎寺面に区分した。これについて渡辺 [2007] は、従来の新潟平野団体研究グループ [1972] による越路原Ⅱ面、越路原Ⅳ面、小栗田原面、船岡山面の一部が同じ段丘面であることを示し、層序が混乱するためこれらを新たに“片貝面”と命名した。

よって、小千谷・越路地域の更新世の段丘は、高位より越路原Ⅰ面、片貝面（新称）、越路原Ⅲ面、潮音寺面、高梨面（新称）に区分された〔渡辺、2007〕。この新たな段丘面区分によると、本報告の対象である浦畠遺跡は、越路原Ⅲ面に位置する。

また、渡辺〔2007〕は、これらの段丘のローム層の指標火山灰として、下位よりM2火山灰（飯綱上樽火山灰）、MC-G1（MCガラス）、Aso-4火山灰、M7火山灰（御岳奈川火山灰）、KA-G1（KAガラス；渡辺・ト部〔2003〕）、大山倉吉テフラ（DKP）、AT火山灰、As-K火山灰を認定している。これらの指標火山灰と段丘面区分との関係は、M2火山灰（飯綱上樽a火山灰）を基底あるいは離水期に含む段丘を“越路原Ⅰ面”、MC-G1（MCガラス）を基底あるいは離水期に含む段丘を“片貝面”、大山倉吉テフラ（DKP）を基底あるいは離水期に含む段丘を“越路原Ⅲ面”、AT火山灰を基底あるいは離水期に含む段丘を“潮音寺面”、As-K火山灰を基底あるいは離水期に含む段丘を“高梨面”として整理している。本報告での指標火山灰や段丘面区分は、渡辺〔2007〕の成果を用いることとする。

（4）各試料の分析結果および考察

試料は、浦畠遺跡の基本層序③セクションから5cm間隔で連続的あるいは部分的に採取されているもの用いた（第11図）。層位区分は、遺跡発掘調査時のものである。以下に各層位の分析結果を述べる。

層位区分：VI（試料番号1～2）

重鉱物組成

重鉱物組成は、角閃石と斜方輝石をわずかに含む（第7表）。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、扁平型（Hb）、中間型（Cb）の火山ガラスをわずかに含む（第7表）。

層位区分：VII（試料番号3～8）

重鉱物組成

重鉱物組成は、全体として角閃石と斜方輝石をわずかに含む（第7表）。試料番号6では自形の角閃石をやや多く含み、扁平な形態の斜方輝石を含む特徴がある。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、全体として扁平型（Hb）、中間型（Cb）の火山ガラスをわずかに含む（第7表）。

層位区分：VIII（試料番号9～15）

重鉱物組成

重鉱物組成は、全体として黒雲母をわずかに含み、角閃石や斜方輝石がごくわずかに含まれる（第7表）。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、全体として扁平型（Ha, Hb）、中間型（Cb）をわずかに含む（第7表）、試料番号13では上下の層準と比較して火山ガラスを多く含み、褐色ガラスも含む特徴がある。

層位区分：IX（試料番号16）

重鉱物組成

重鉱物組成は、黒雲母や角閃石をわずかに含む（第7表）。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、扁平型 (Hb)、中間型 (Cb) をわずかに含む (第7表)。

層位区分：XII (試料番号17～22)

白色の軽石 (岩片状) をわずかに含み、岩片の含有率も多くなる。試料番号19以深は砂質な層相を示している。

重鉱物組成

重鉱物組成は、全体として黒雲母や角閃石をわずかに含む (第7表)。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、全体として扁平型 (Hb)、中間型 (Cb) をわずかに含む (第7表)。

層位区分：XIII (試料番号23)

斜長石を多く含み、岩片の含有率も多くなる。砂質な層相を示している。

重鉱物組成

重鉱物組成は、角閃石をわずかに含む (第7表)。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、扁平型 (Hb) をわずかに含む (第7表)。

層位区分：XIV (試料番号24～26)

斜長石や岩片を多く含み、砂質な層相を示している。

重鉱物組成

重鉱物組成は、全体として黒雲母や角閃石をわずかに含む (第7表)。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、扁平型 (Hb) をわずかに含む (第7表)。

層位区分：XV (試料番号27～31)

斜長石、重鉱物や岩片を多く含み、砂質な層相を示している。

重鉱物組成

重鉱物組成は、全体として角閃石、斜方輝石、単斜輝石などを含む (第7表)。

火山ガラスの形態

火山ガラスは、ほとんど含まれない (第7表)。

(5) 浦細遺跡の火山灰層序

各試料に含まれる重鉱物や火山ガラスの特徴から、本地域での標準的な指標火山灰との対比を検討した。まず試料番号6の重鉱物に含まれる自形の角閃石とやや扁平な斜方輝石は、大山倉吉テフラ (DKP) に含まれる重鉱物の特徴と一致する。このセクションでは、全体としてやや重鉱物の含有する量比が少ないが、上下の層準との相対的な比較から、本試料の層準を大山倉吉テフラ (DKP) の降灰層準とする。ついで、試料番号13では上下の層準と比較して火山ガラスを多く含み、褐色ガラスも含む特徴がある。火山ガラス

の形態や特に褐色ガラスを含むことは、KA-gI (KAガラス) の記載的特徴と一致することから、本試料の層準がKA-gI (KAガラス) に相当するものと考えられる。

全体の層相から見ると層位区分Ⅳは砂混じりのシルトであることから、KA-gI (KAガラス) の層準は離水時期に相当し、離水層準の10cm程度上位に大山倉吉テフラ (DKP) が含まれることとなる。このような火山灰層をもつ段丘は、渡辺 [2007] の越路原Ⅲ面に対比できる。なお、層位区分Ⅵでは、AT火山灰の特徴である扁平型の火山ガラスがわずかしか含まれないことから、AT火山灰層準はより上位で、本セクションでは削平されてしまった層位にあったものと考えられる。

参考文献

- 早津賢治・新井房夫, 1981. 信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代。地質学雑誌, 87, 791-805。
- 小林巖雄・立石雅昭・吉岡敏和・鳥津光夫, 1991. 長岡地域の地質。5万分の1地質図幅「長岡」。地質調査所。
- 町田 洋・新井房夫, 1976. 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, 339-347。
- 町田 洋・新井房夫, 1992. 火山灰アトラス。276p. 東大出版。
- 新潟平野団体研究グループ, 1967. 新潟県小千谷市周辺および長岡市西方の第四系—新潟県の第四系そのVIII—。新潟大学教育学部高田分校紀要, 12, 139-160。
- 新潟平野団体研究グループ, 1972. 十日町盆地の河岸段丘。地質学論集, 7, 267-283。
- 新潟火山灰グループ, 1981. 新潟県下のローム層について そのⅠ—信濃川ローム層について—。地球科学, 35, 294-311。
- 新潟火山灰グループ, 1995. 新潟県下のローム層について そのⅡ—信濃川ローム層の層序—。地球科学, 49, 188-202。
- Ota, Y. 1969. Crustal movements in the Late Quaternary considerd from the deformed terrace plains in northeastern Japan. Jour Geol Geogr, 43, 41-61.
- 太田陽子・鈴木郁夫, 1979. 信濃川下流域における活褶曲の資料。地理学評論, 52, 529-601。
- 信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ, 2002. 信濃川津南地域における第四紀末期の段丘形成と構造運動。第四紀研究, 41, 199-212。
- 信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ, 2003. 信濃川中流域における第四紀末期の河成段丘面編年。地球科学, 57, 95-110。
- 堤 浩之・東郷正美・渡辺満久・金 幸隆・佐藤尚登, 2001. 1/25000都市圏活断層図「長岡」。国土地理院技術資料D 1-388。
- ト部厚志・高浜信行・塙野明美・渡辺秀男・東野外忠志・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ, 2000. 新潟地域における完新世の火山灰層と対比。日本第四紀学会講演要旨集, 96-97。
- 渡辺秀男・ト部厚志, 2003. 十日町盆地北西部の河成段丘の編年と降起運動。地球科学, 53, 420-433。
- 渡辺秀男, 2007. 新潟県越後平野南西部の河成段丘の編年と構造運動。地球科学, 61, 129-142。
- 吉川周作, 1976. 大阪層群の火山灰層について。地質学雑誌, 82, 497-515。

第7表 基本土層③ TP2北壁断面

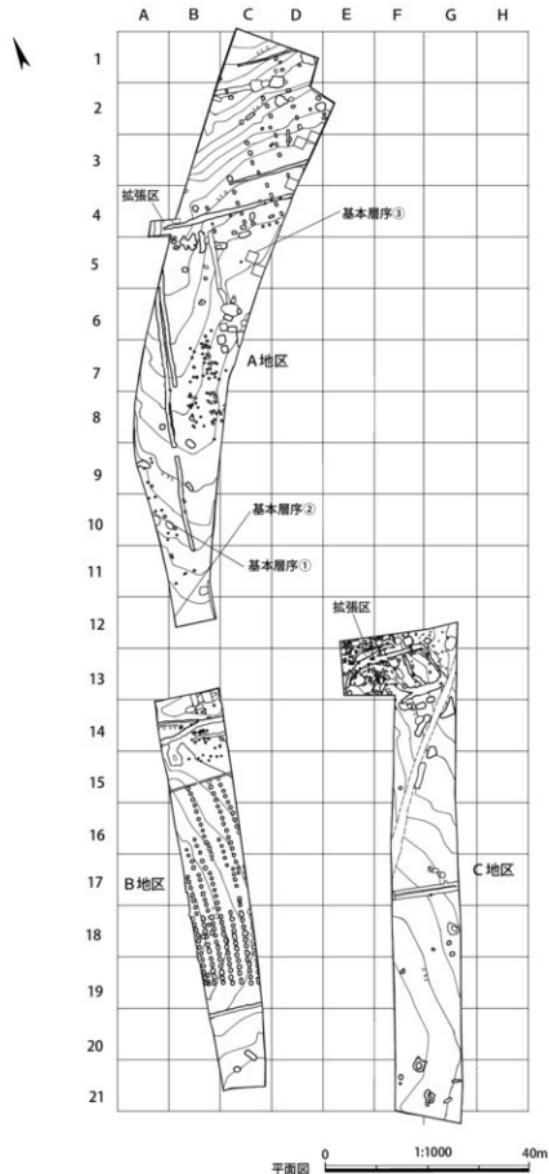
サン アル 番号	層相	礫物組成				火山ガラス				重晶石組成				参考
		火山ガラス 斜長 石英	斜長 石英	軽石	重晶石	火山 ガラス 中間 (Ca)	火山 ガラス 中間 (Ca)	多孔質 ガラス (Ti)	多孔質 ガラス (Ti)	地熱ガラス (Ti)	地熱ガラス (Ti)	重晶石	重晶石 斜方輝石 ジル コン	
1	M J-1	△△○	△△○	○	△	△△	△△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
2	J-1-J ₁	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
3	J-1	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
4	J-1-J ₁	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
5	M	△○	△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
6	J-1	△○	△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
7	J-1	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	DKP
8	J-1	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
9	J-1	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
10	J-1	△○	△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
11	J-1	△△○	△△○	○	△	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
12	W 砂泥じり シルト	△△○△△○	△△○△△○	○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	
13	W	△○	△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○
14	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	KA-GI
15	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
16	W 砂泥じり シルト	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
17	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
18	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
19	W 砂泥じり シルト	△△○△△○	△△○△△○	○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	△△○△△○	
20	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
21	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
22	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
23	W 砂泥じり シルト	△△○○	△△○○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
24	W	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
25	W 粗粒砂	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
26	W	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
27	W	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
28	W	△△○	△△○	○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
29	W 礫層	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
30	W	△△○	△△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	
31	W	△○	△○	○	△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	△△○	

○: 多い、○: 普通、△: 少ない、△△: 特に少く、△△△: 極わずか。

図 版

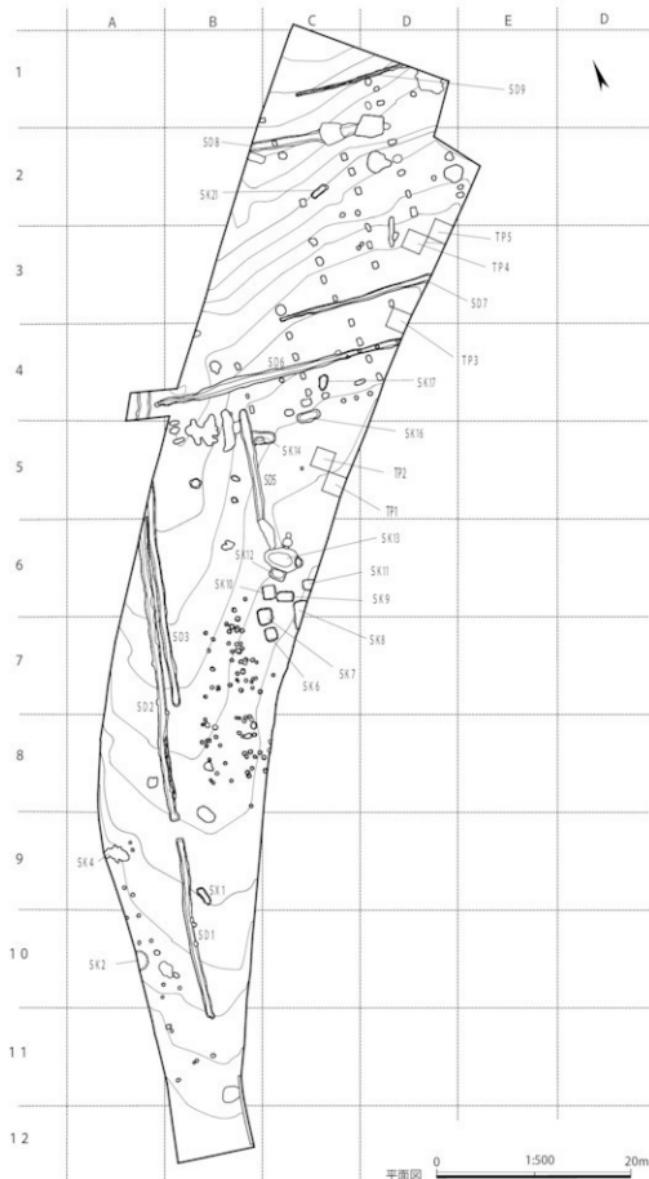
図版 1

造構全体図



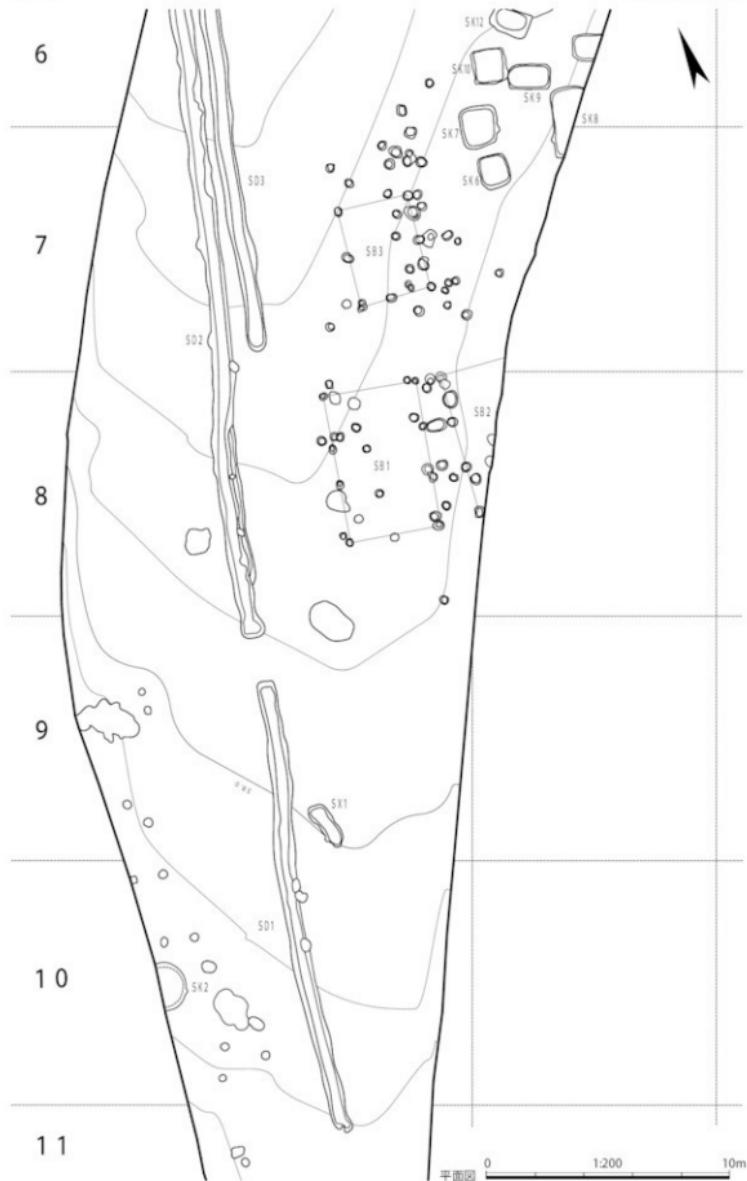
A地区造構全体図

図版2



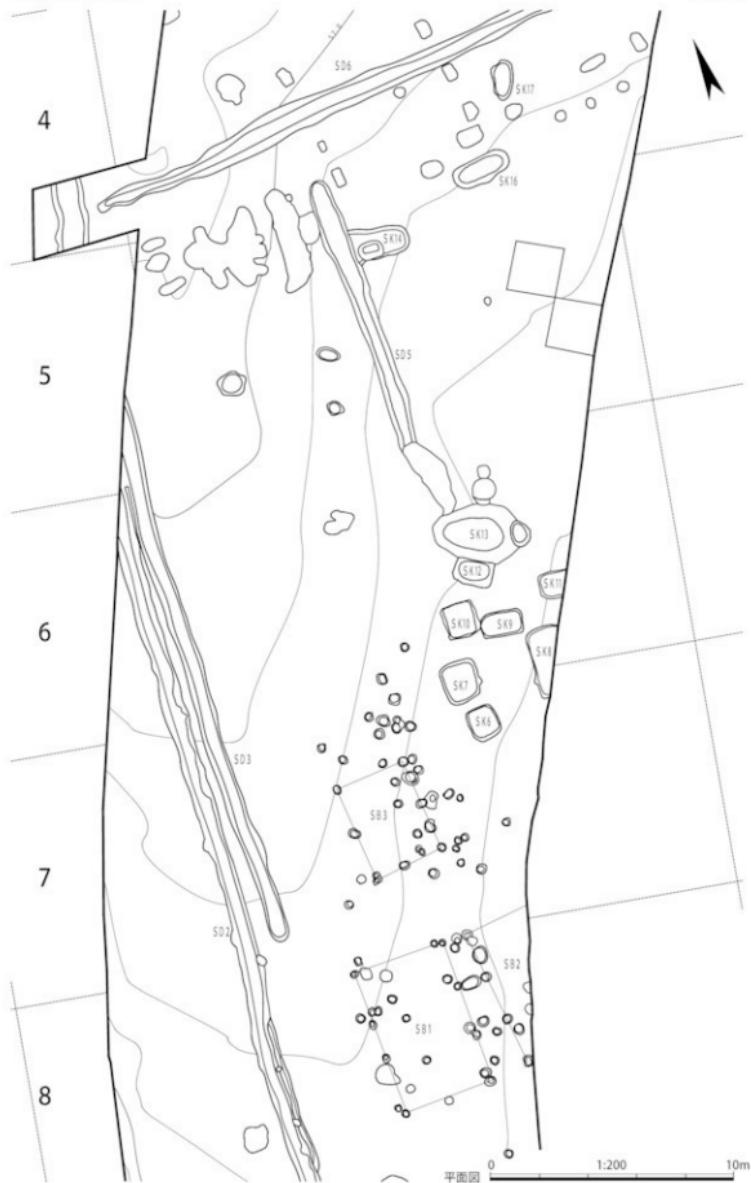
図版 3

A 地区造構平面図 ①



A地区造構平面図 ②

図版 4



図版 5

A 地区遺構平面図



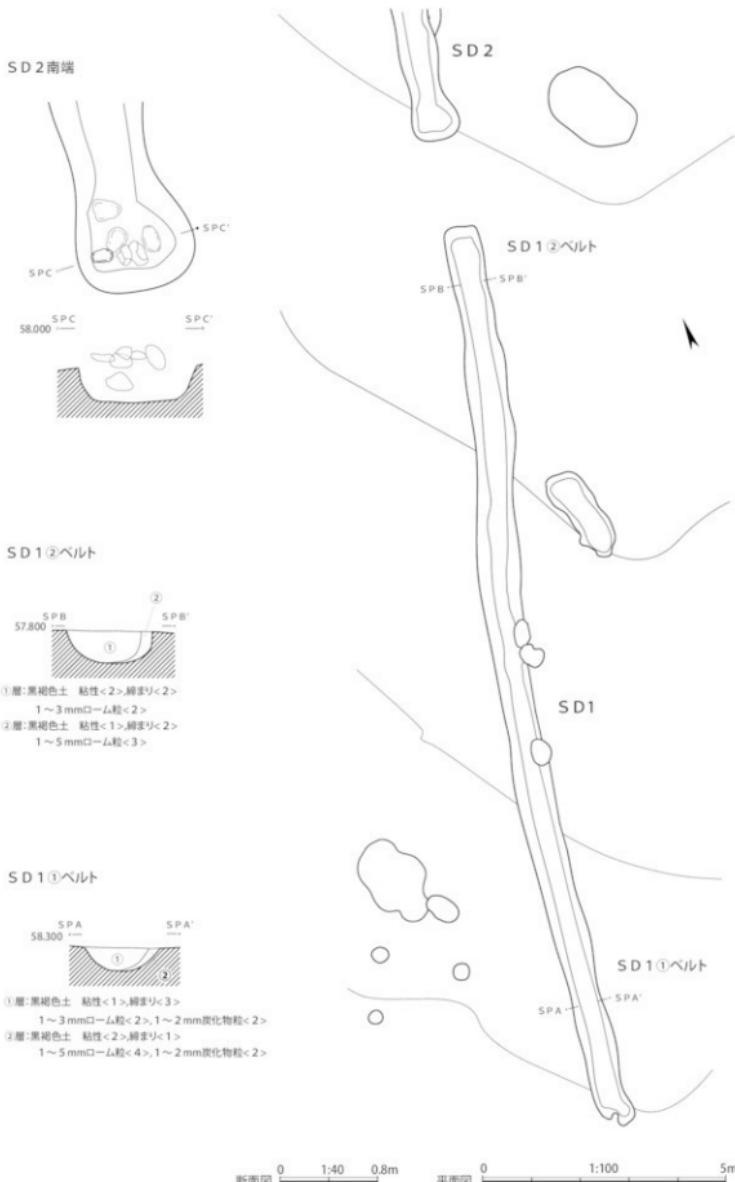
A地区遺構平面図④

図版 6



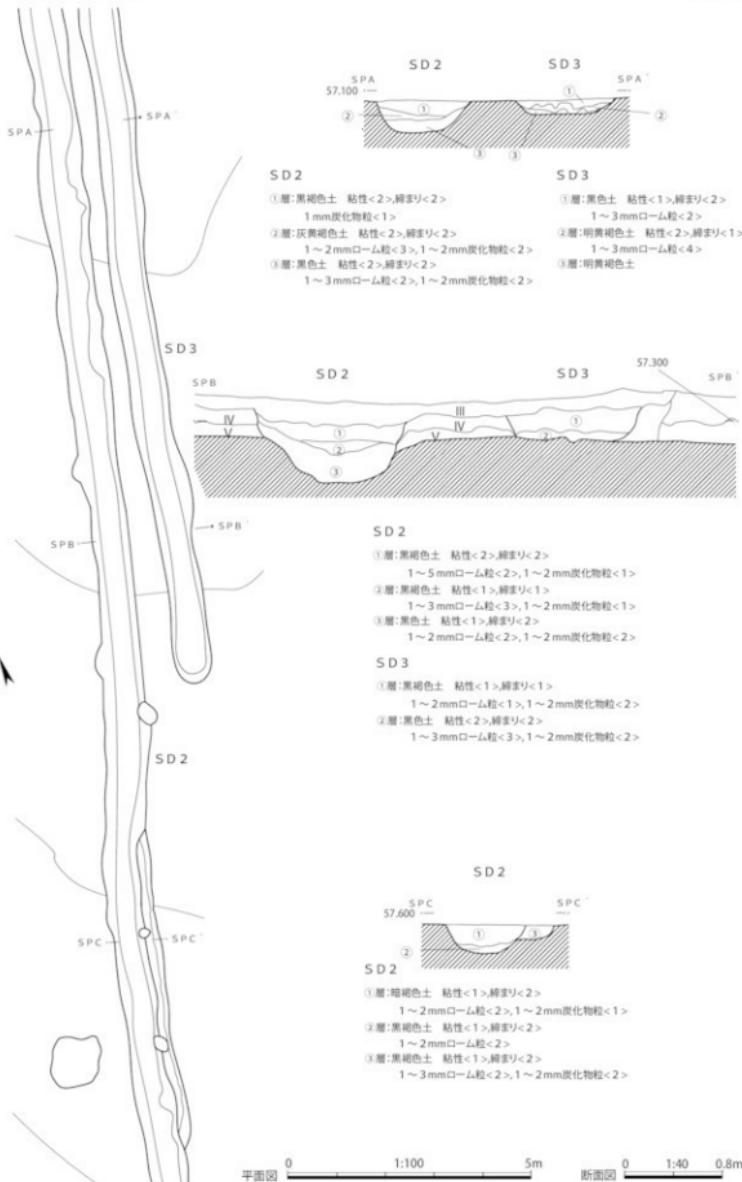
図版7

A地区個別透構図①



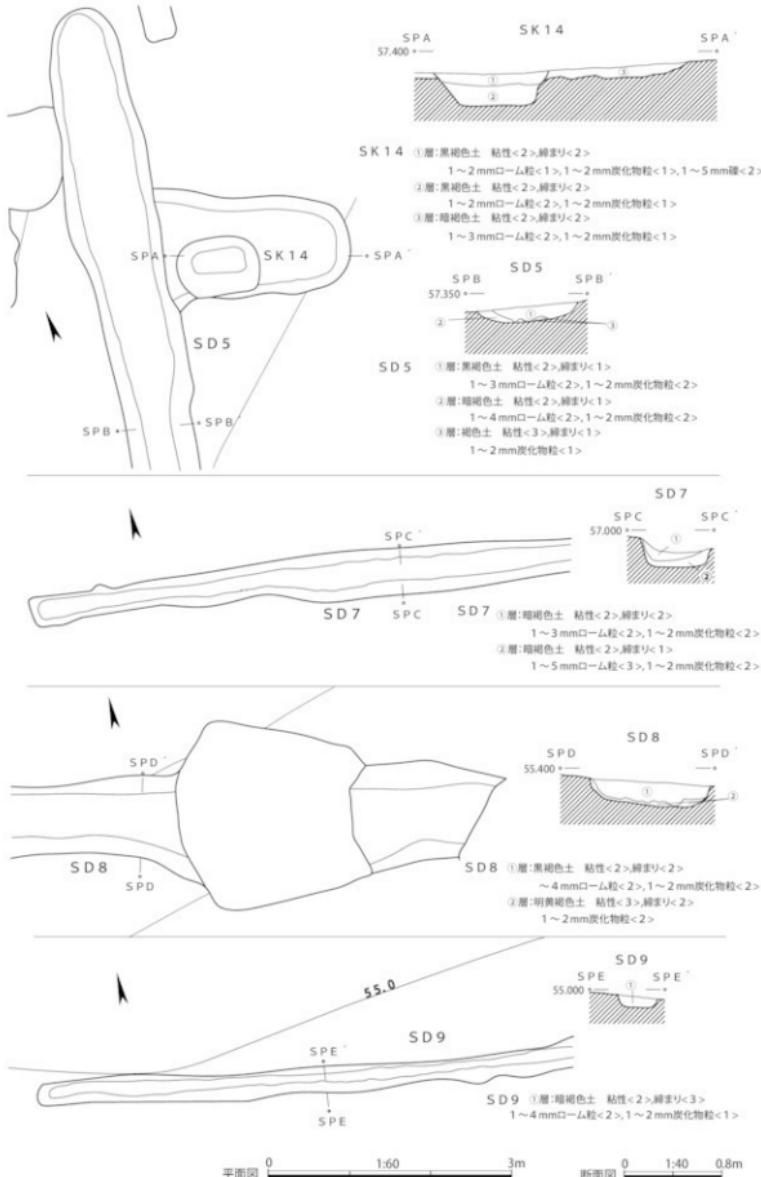
A地区個別構造図②

圖版 8



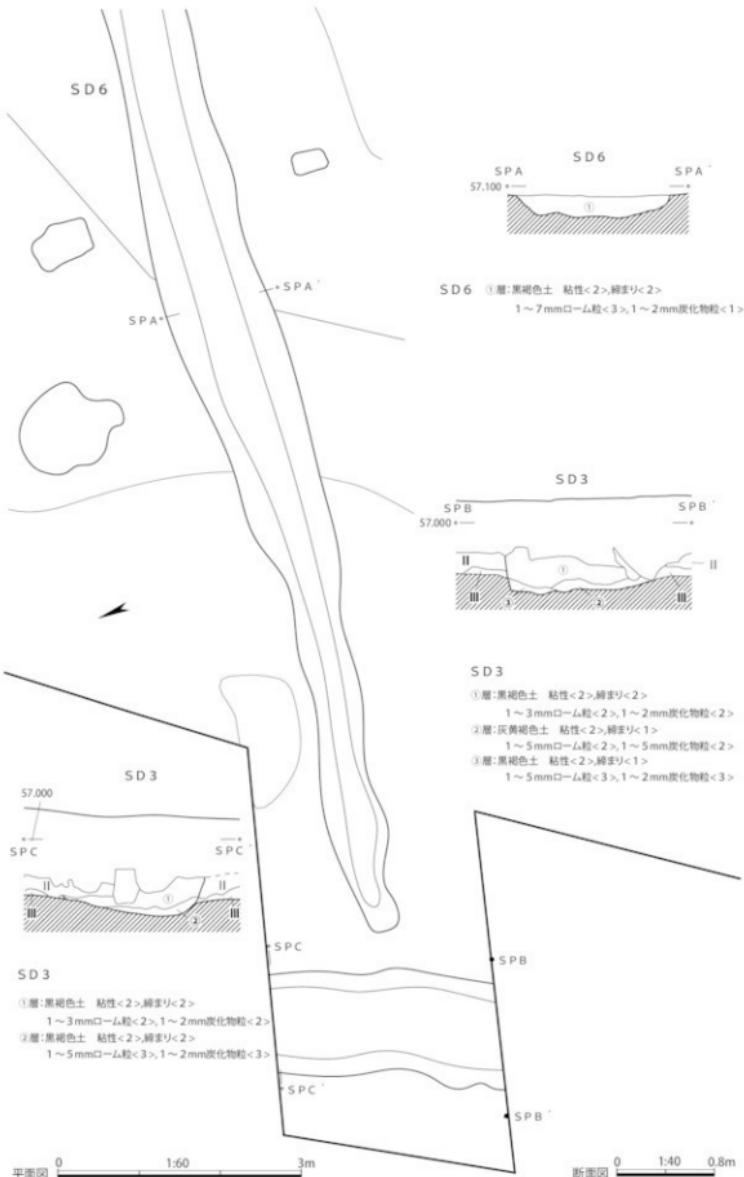
図版9

A地区個別透構図



A地区個別地盤構造図④

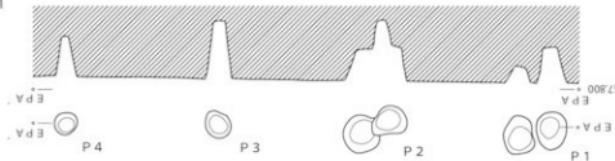
図版10



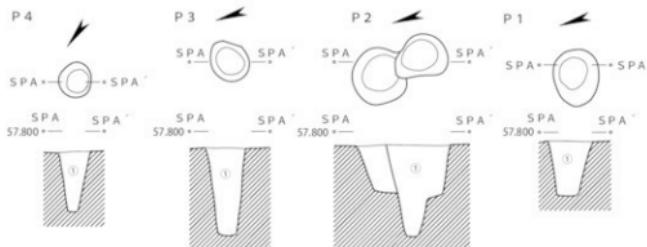
図版11

A地区個別透構図5

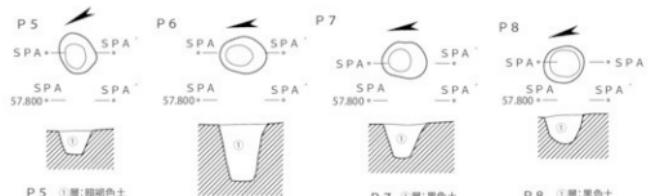
SB 1



平面図・エレベーション図 0 1:60 3m



P 4 ①層:暗褐色土 P 3 ①層:黒色土 P 2 ①層:黃色土 P 1 ①層:黒色土



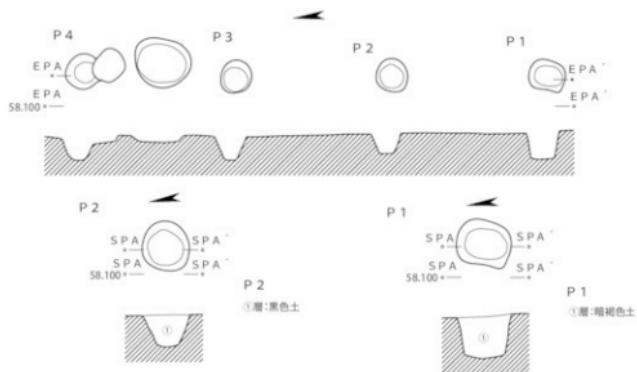
P 5 ①層:暗褐色土 P 6 ①層:黒色土 P 7 ①層:黒色土 P 8 ①層:黒色土

平面図・断面図 0 1:40 0.8m

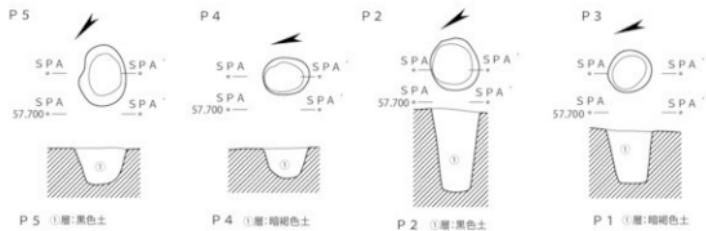
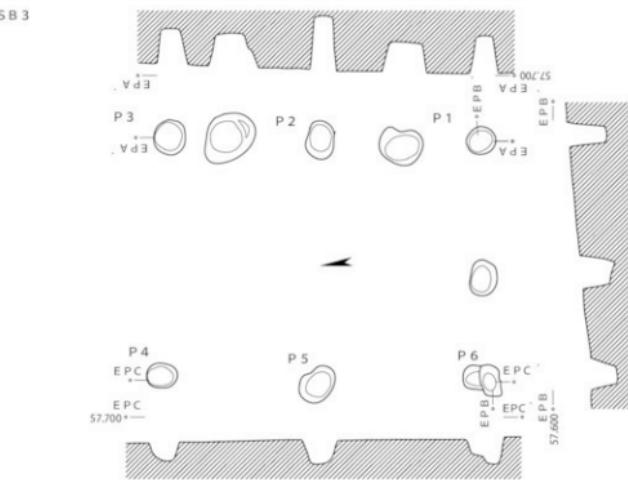
A地区個別道構図⑤

図版12

SB 2



SB 3



平面図・エレベーション図

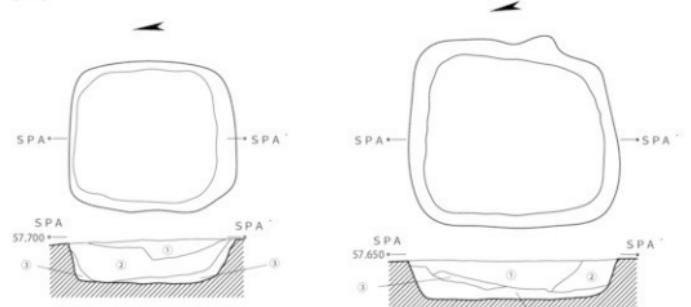
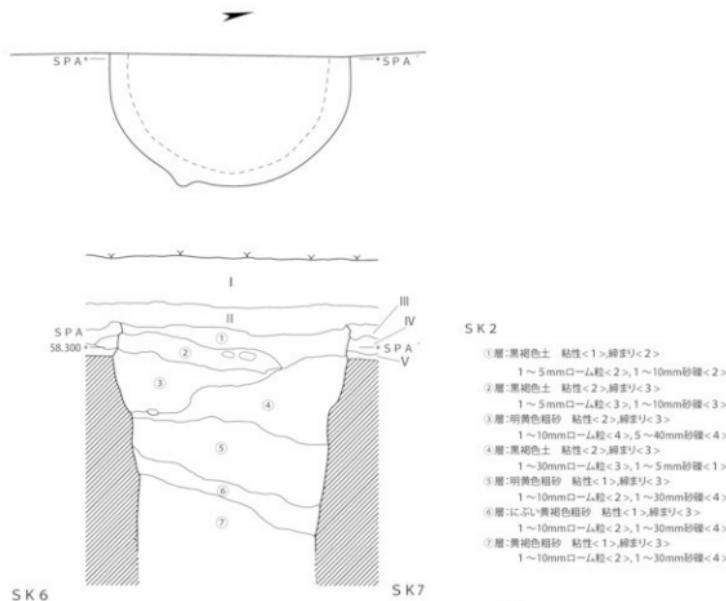
0 160 3m

0 1:40 0.8m

圖版13

A 地区個別構造図 7

SK 2



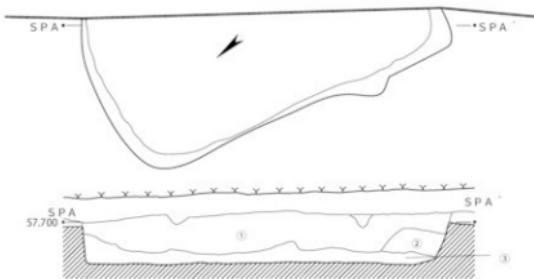
S K 6 ①層:明黄褐色土 粘性<2,締まり<2>
 　　1~8mmローム粒<4>,1~3mm炭化物粒<1>
 ②層:同じ明黄褐色土 粘性<2,締まり<2>
 　　1~10mmローム粒<4>,1~2mm炭化物粒<2>
 ③層:黄褐色土 粘性<2>,締まり<2>
 　　1~10mmローム粒<4>,1~3mm炭化物粒<2>

S K 7 ①層:灰黃褐色土 粘性<2>,締まり<2>
 1~10mm口- \square m粒<3>, 1~3 mm礫化物粒<3>
 ②層:褐色土 粘性<2>,締まり<2>
 1~5 mm口- \square m粒<3>, 1~3 mm礫化物粒<3>
 ③層:黒褐色土 粘性<2>,締まり<3>
 1~3 mm口- \square m粒<2>, 1~2 mm礫化物粒<2>
 ④層:褐色土 粘性<2>,締まり<2>
 1~10mm口- \square m粒<3>, 1~3 mm礫化物粒<2>

A地区個別道構図⑧

図版14

SK 8



SK 8

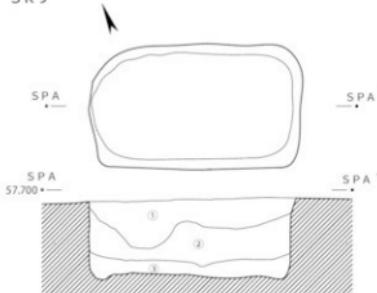
①層:褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

1~10mmローム粒<3>, 1~2mm炭化物粒<1>

②層:にぶい黄褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

1~3mmローム粒<2>, 1~2mm炭化物粒<1>

SK 9



SK 9

①層:褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

1~10mmローム粒<3>, 1~2mm炭化物粒<1>

②層:にぶい黄褐色土 粘性<3>,綿まり<2>

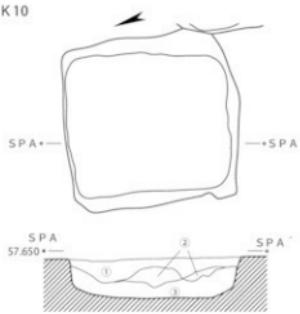
1~5mmローム粒<3>, 1~2mm炭化物粒<1>

③層:褐色土 粘性<3>,綿まり<2>

1~5mmローム粒<2>, 1~2mm炭化物粒<1>

1~20mm礫<2>, 1~5mmドローム粒<4>

SK 10



SK 10

①層:にぶい黄褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

1~10mmローム粒<2>, 1~5mm炭化物粒<3>

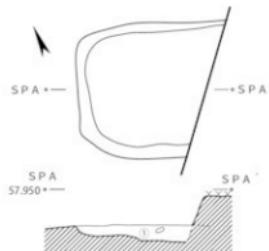
②層:にぶい黄褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

1~10mmローム粒<2>, 1~2mm炭化物粒<1>

③層:暗褐色土 粘性<3>,綿まり<2>

1~10mmローム粒<3>, 1~5mm炭化物粒<3>

SK 11



SK 11 ①層:にぶい黄褐色土 粘性<2>,綿まり<2>

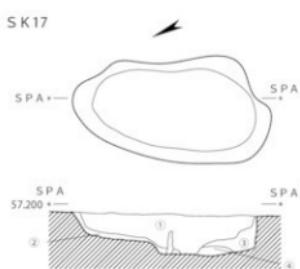
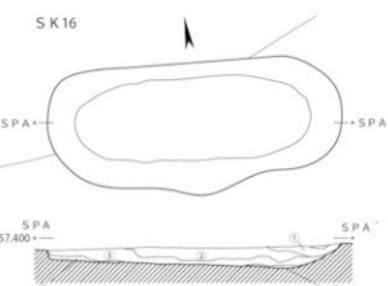
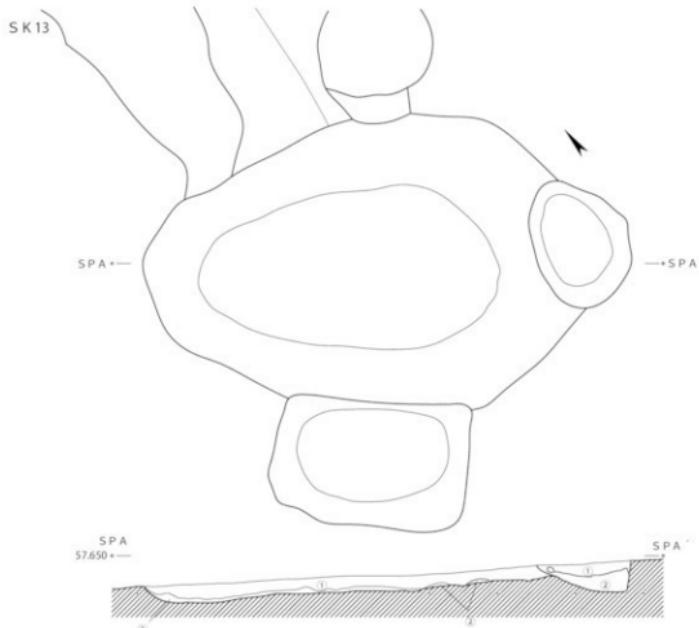
5: 1~5mmローム粒<3>.

H: 1~10mmローム粒<3>, 1~2mm炭化物粒<2>

平面図・断面図 0 1:40 0.8m

図版15

A地区個別透構図 9

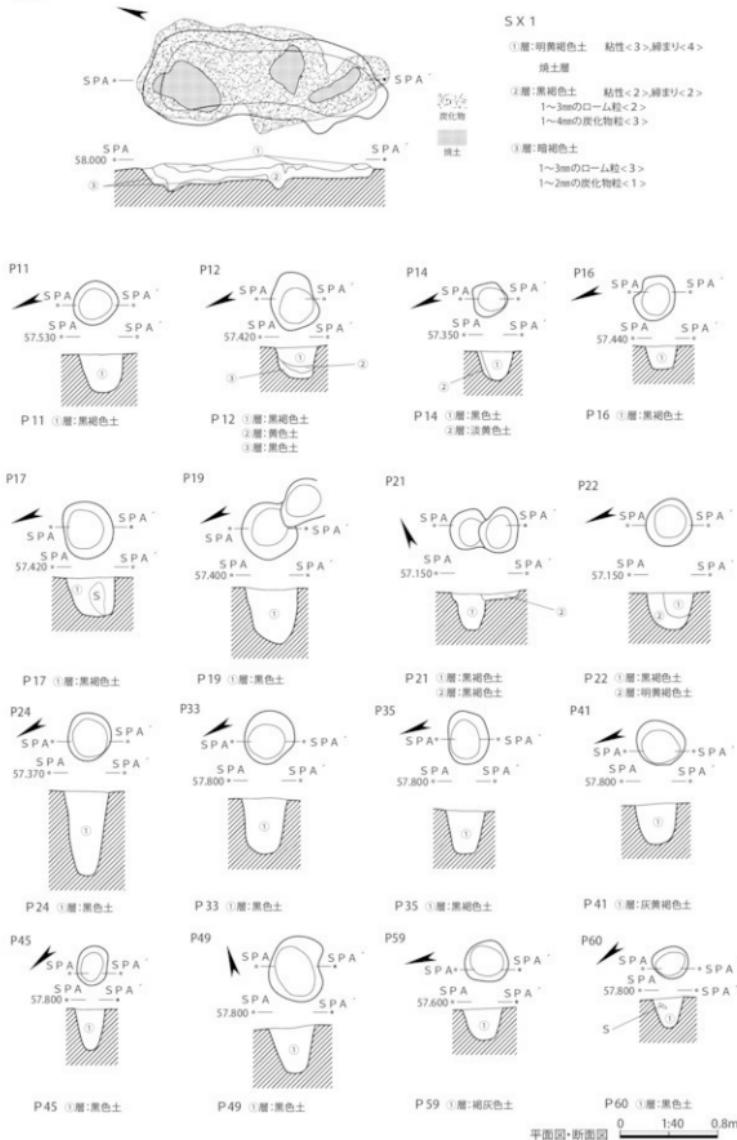


平面図・断面図 0 1:40 0.8m

A地区個別構造図 10

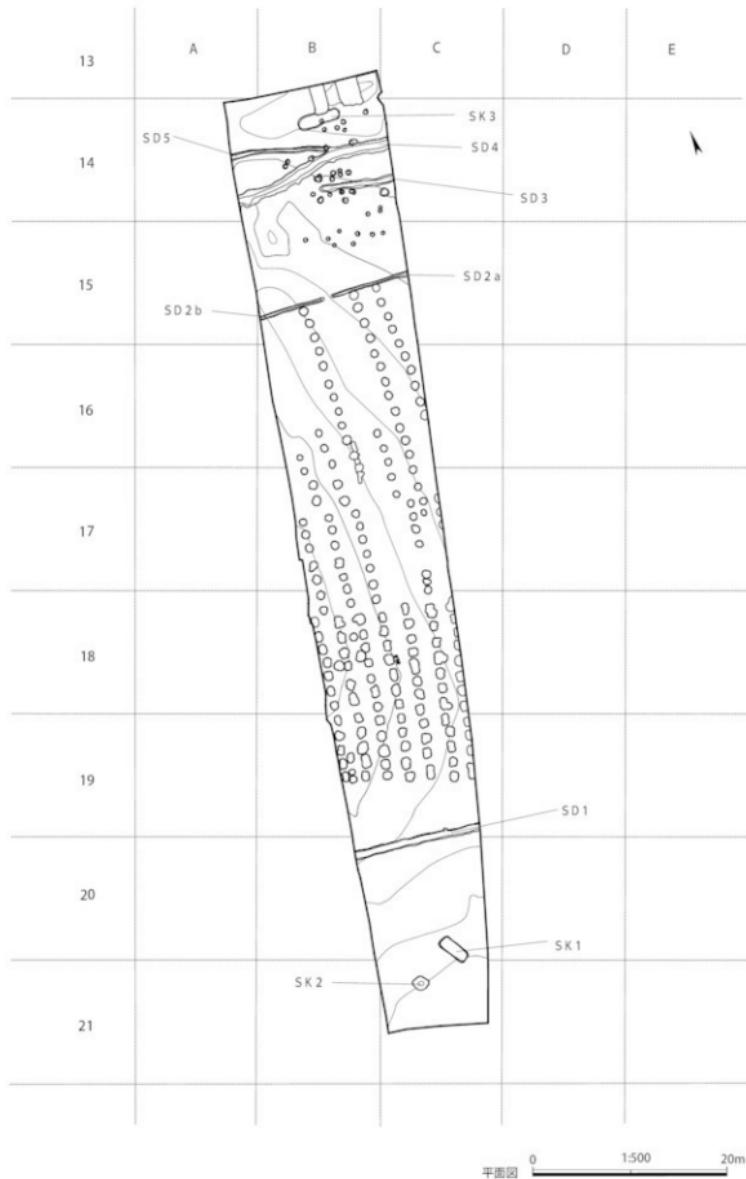
図版16

5 x 1



図版17

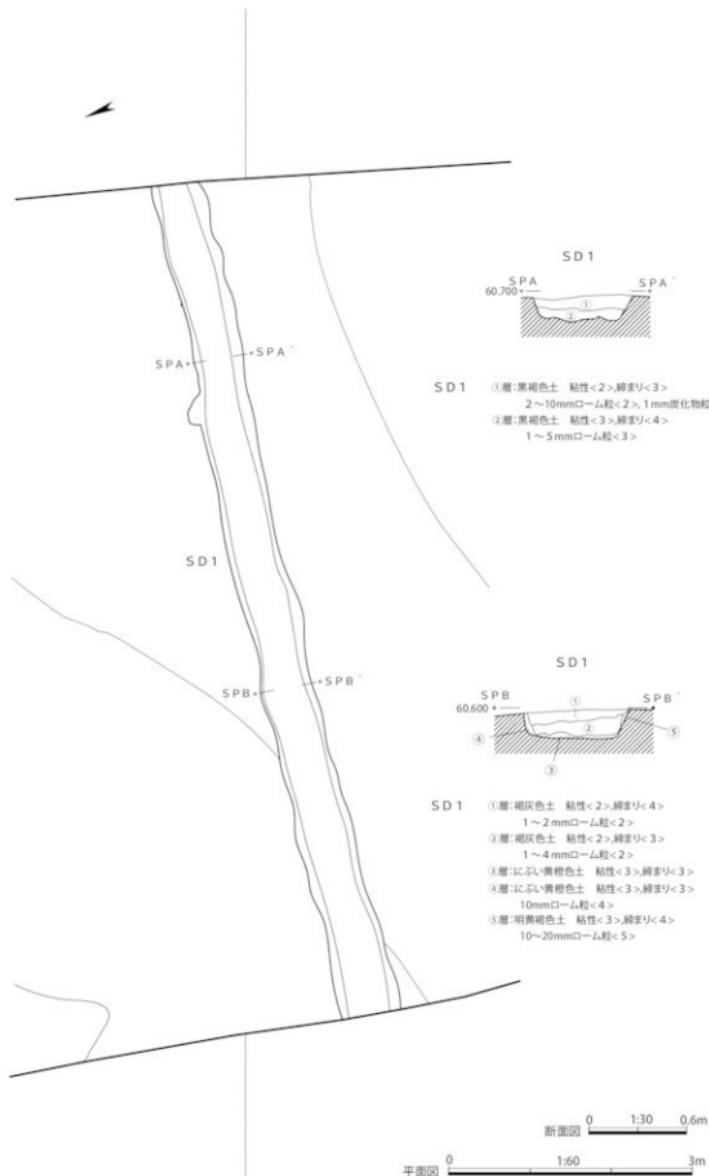
B地区地質全体図



平面図 0 1.500 20m

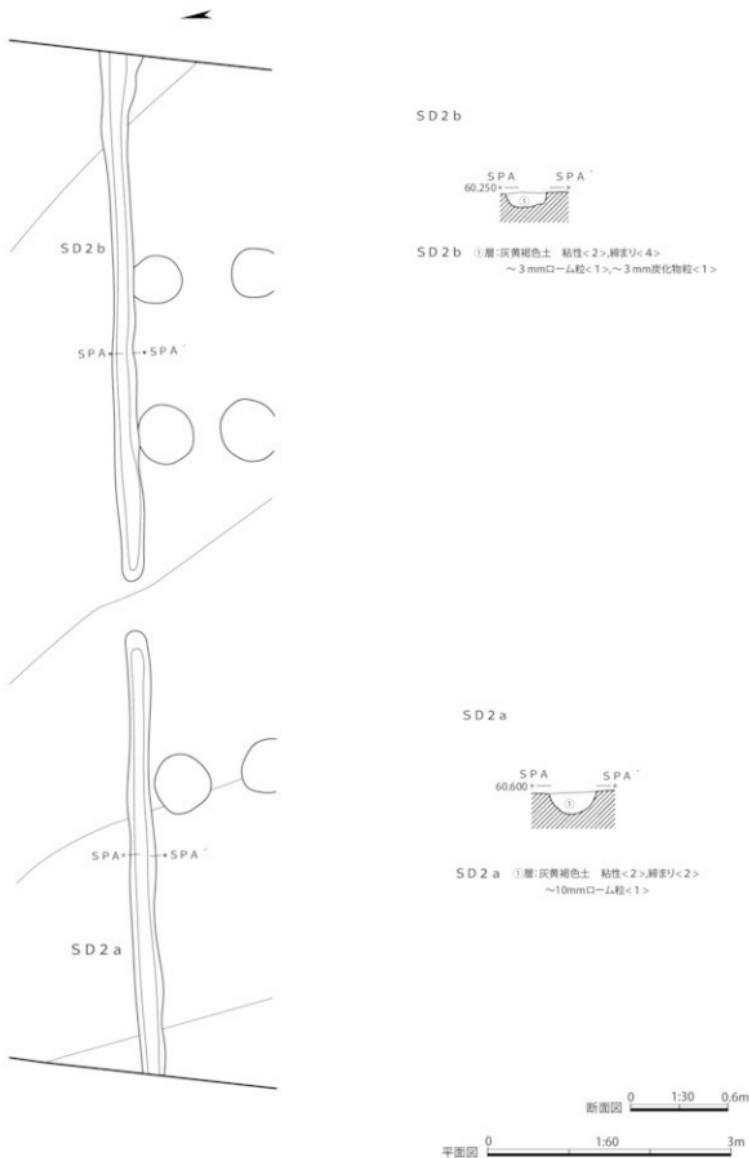
B地区個別道構図①

図版18



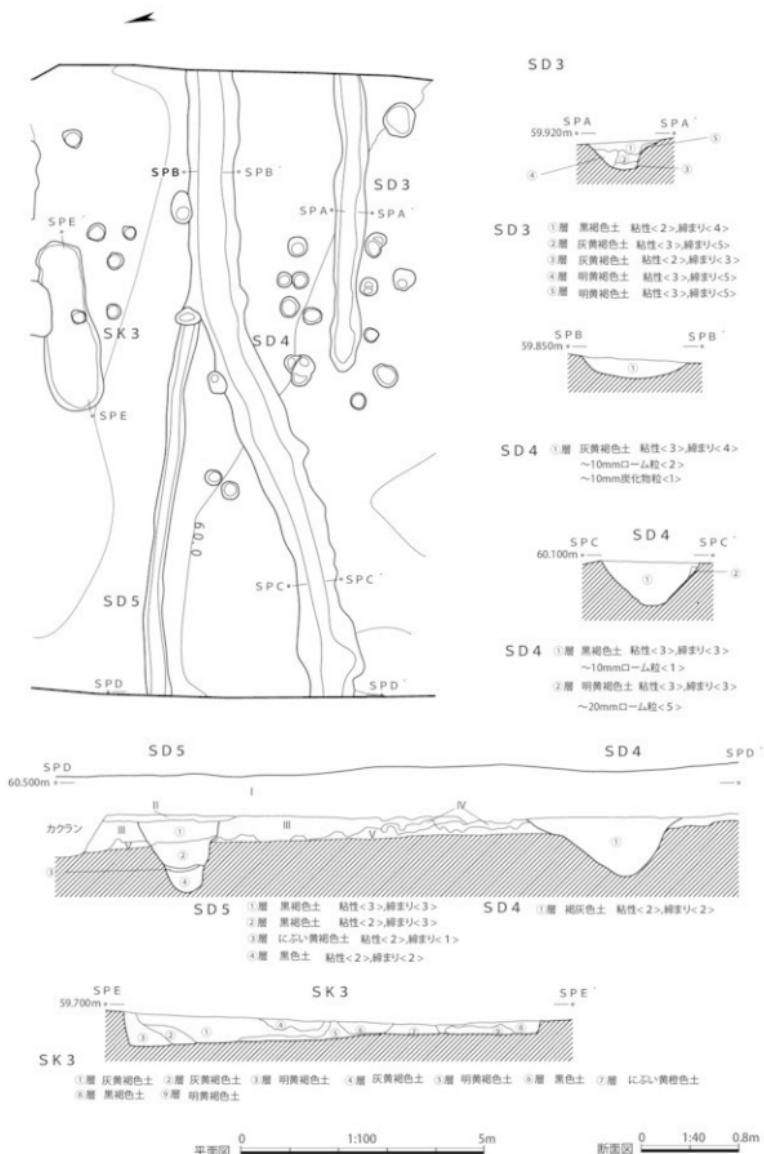
図版19

B地区個別透構図②



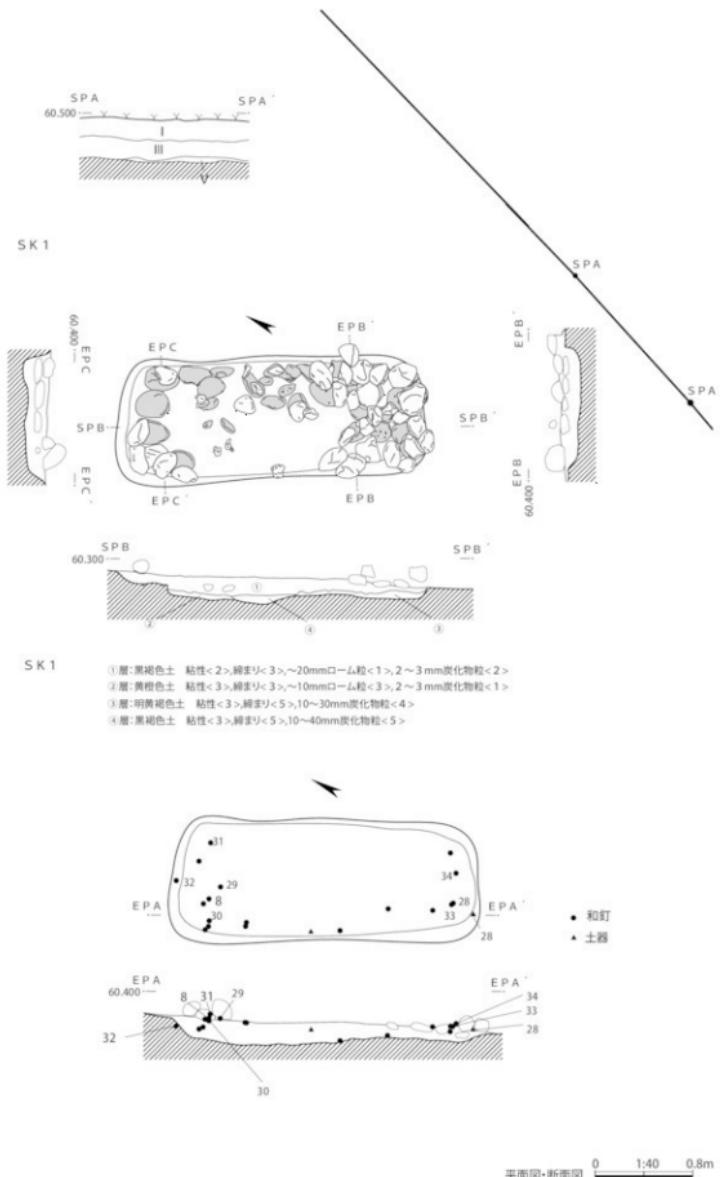
B地区個別地質構造図

図版20



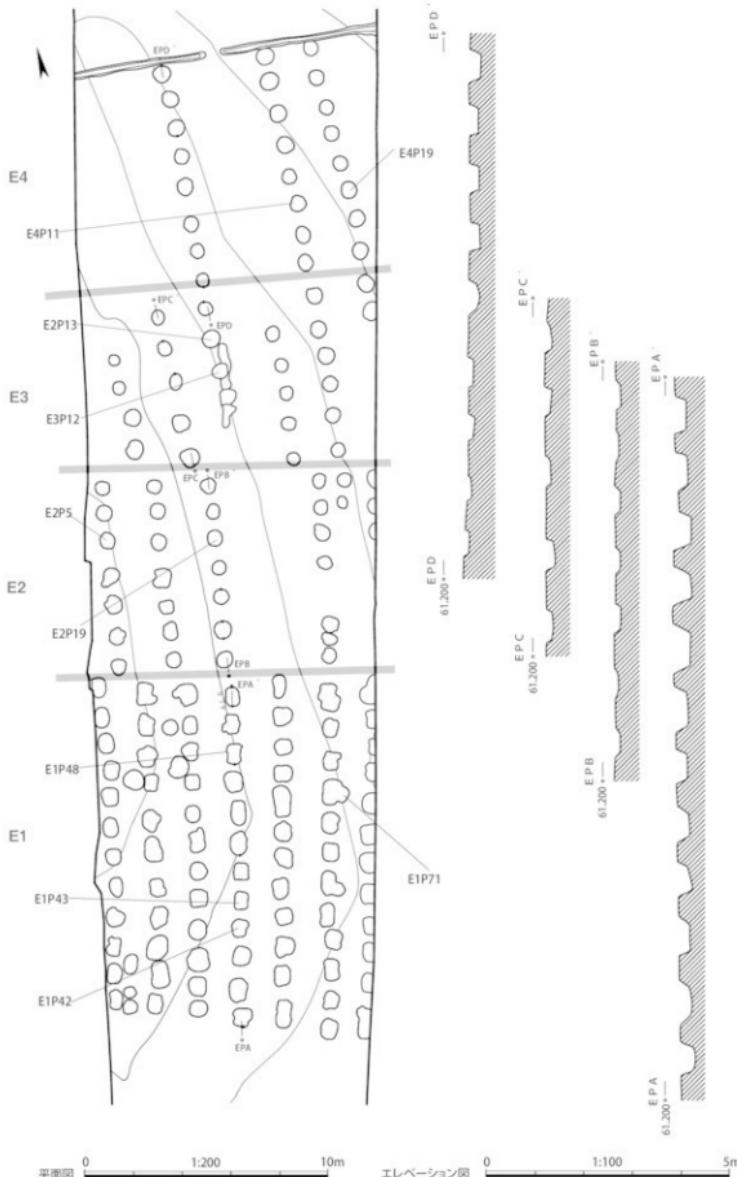
図版21

B 地区個別構造図④



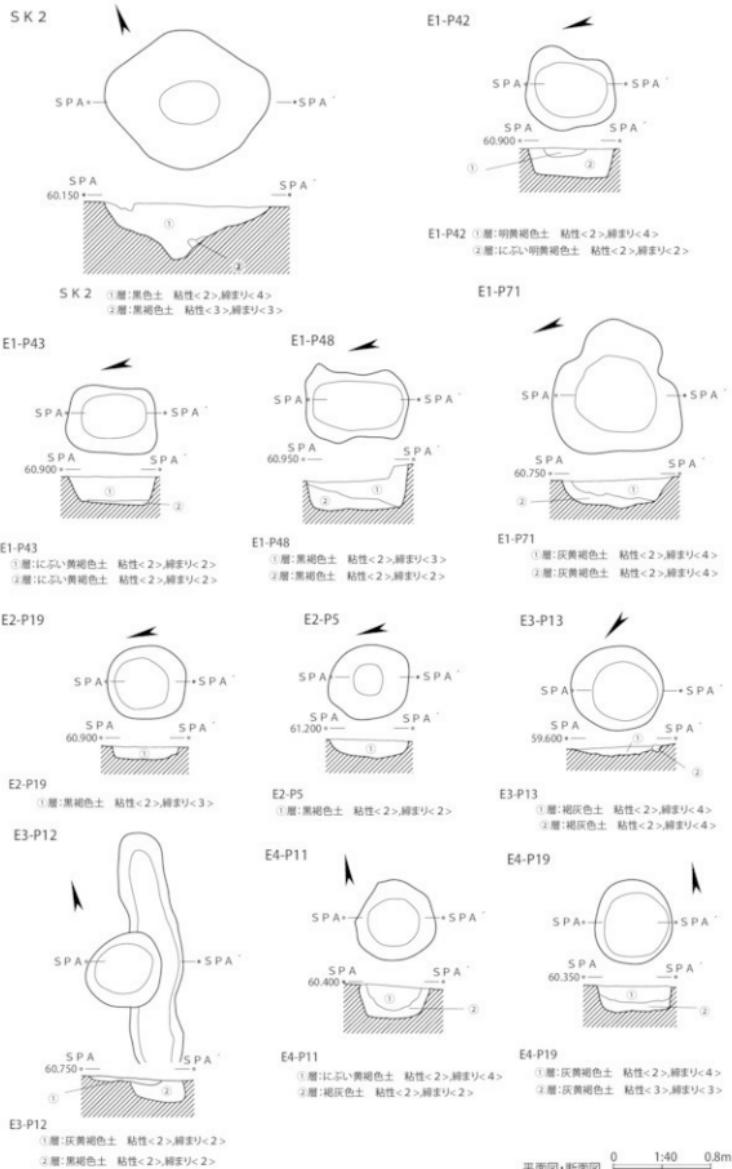
B地区植栽配置図

図版22



図版23

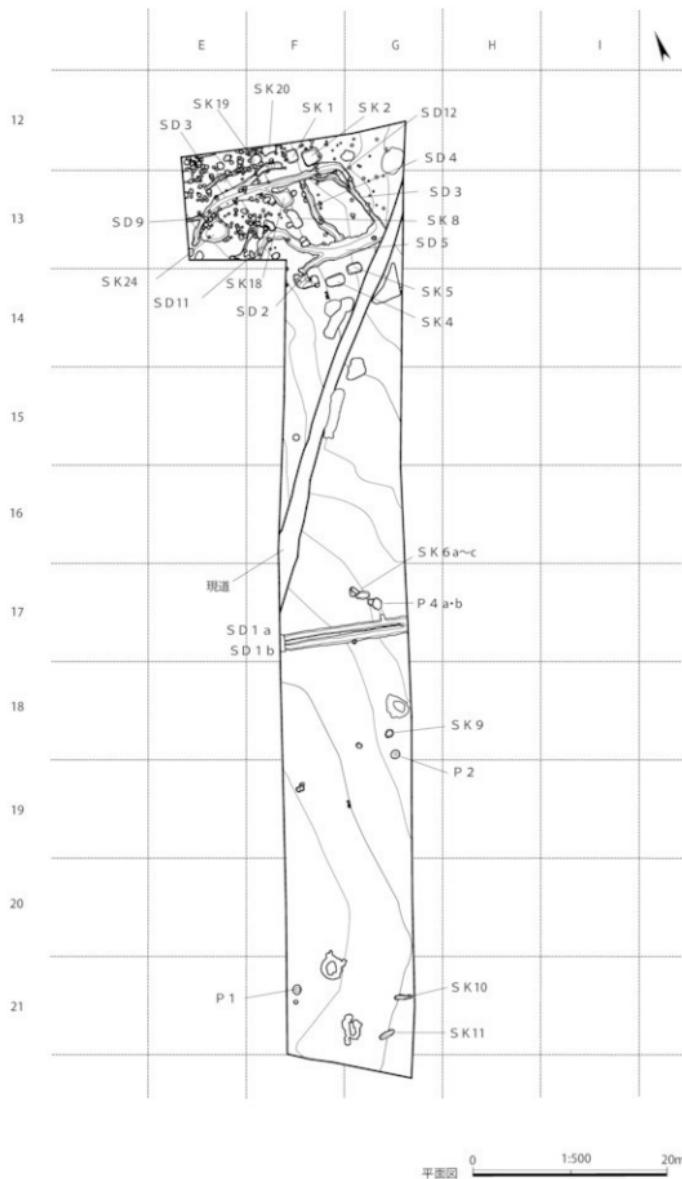
B地区個別透構図

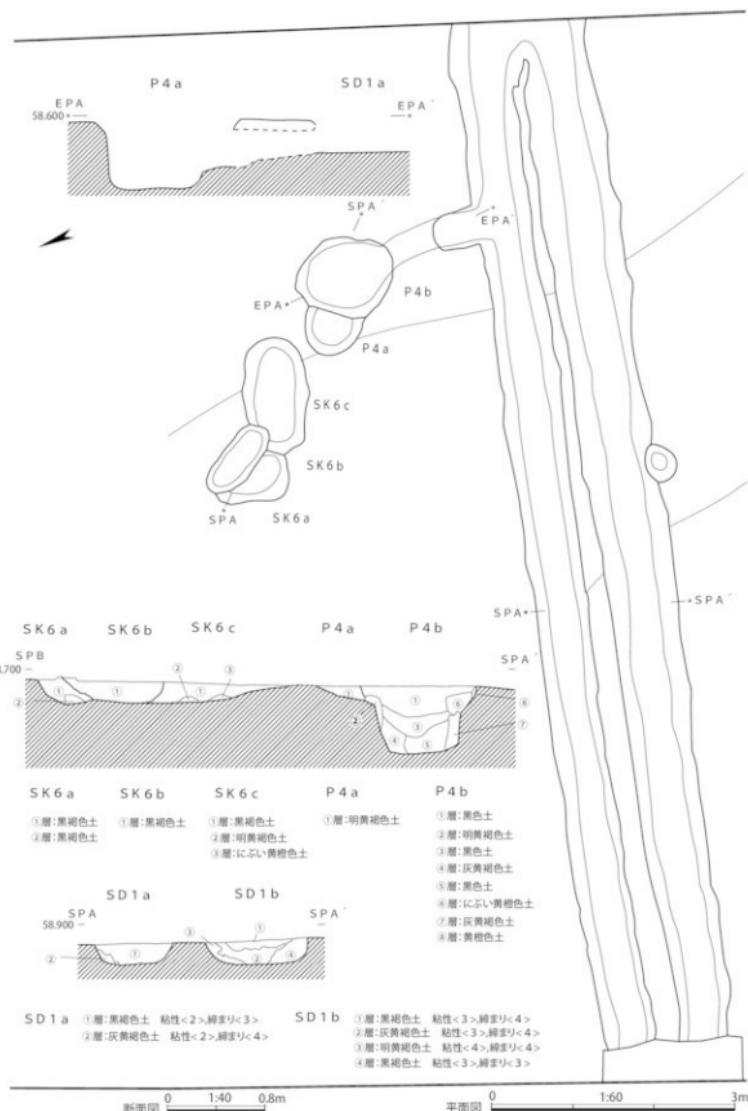


平面図・断面図 0 1:40 0.8m

C地区造構全体図

図版24

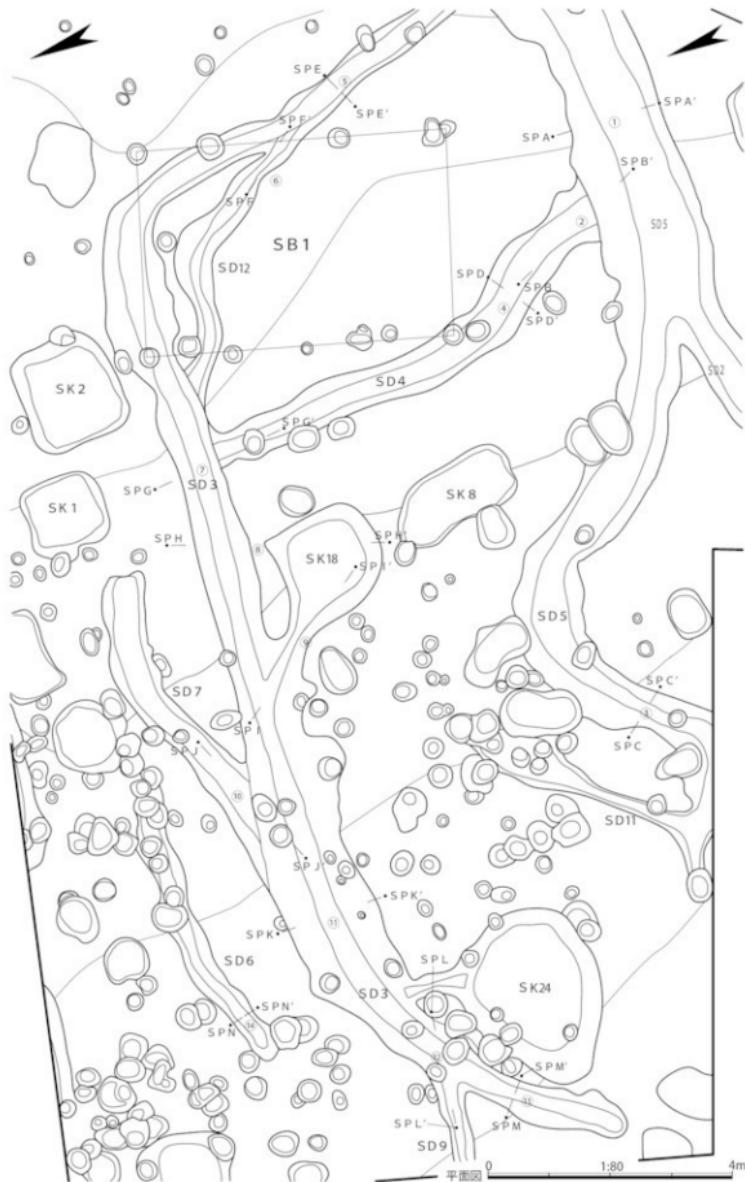






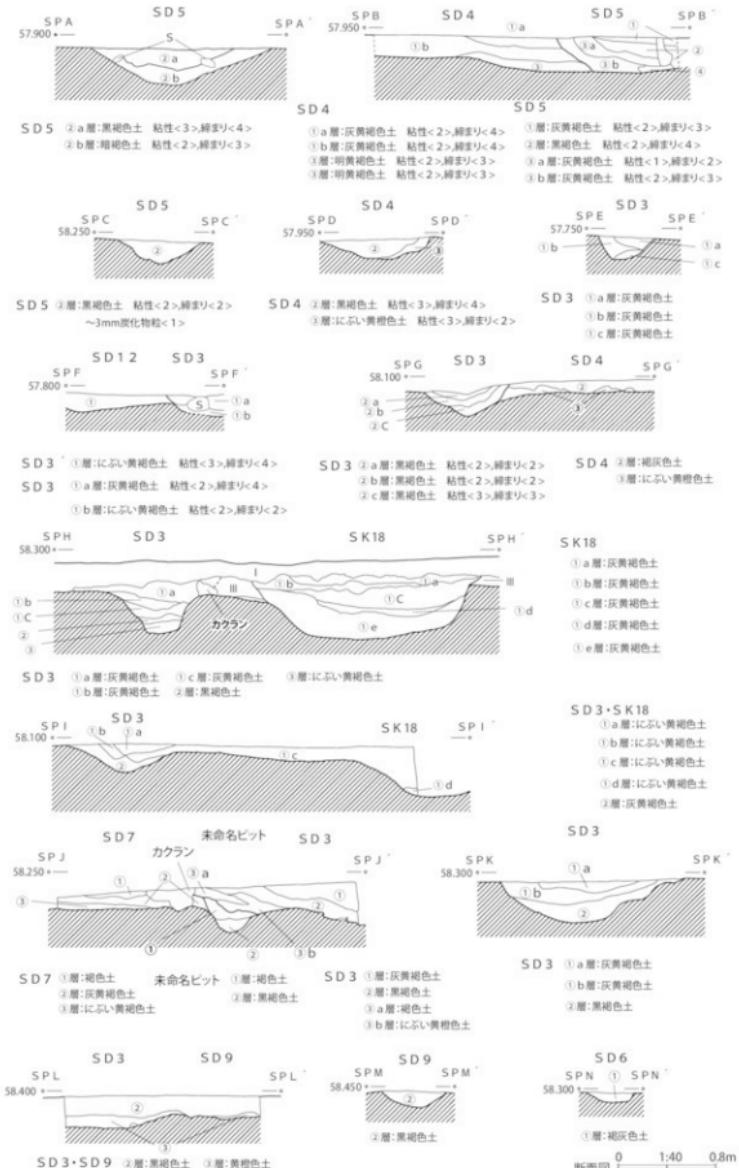
図版27

C地区地盤平面図②

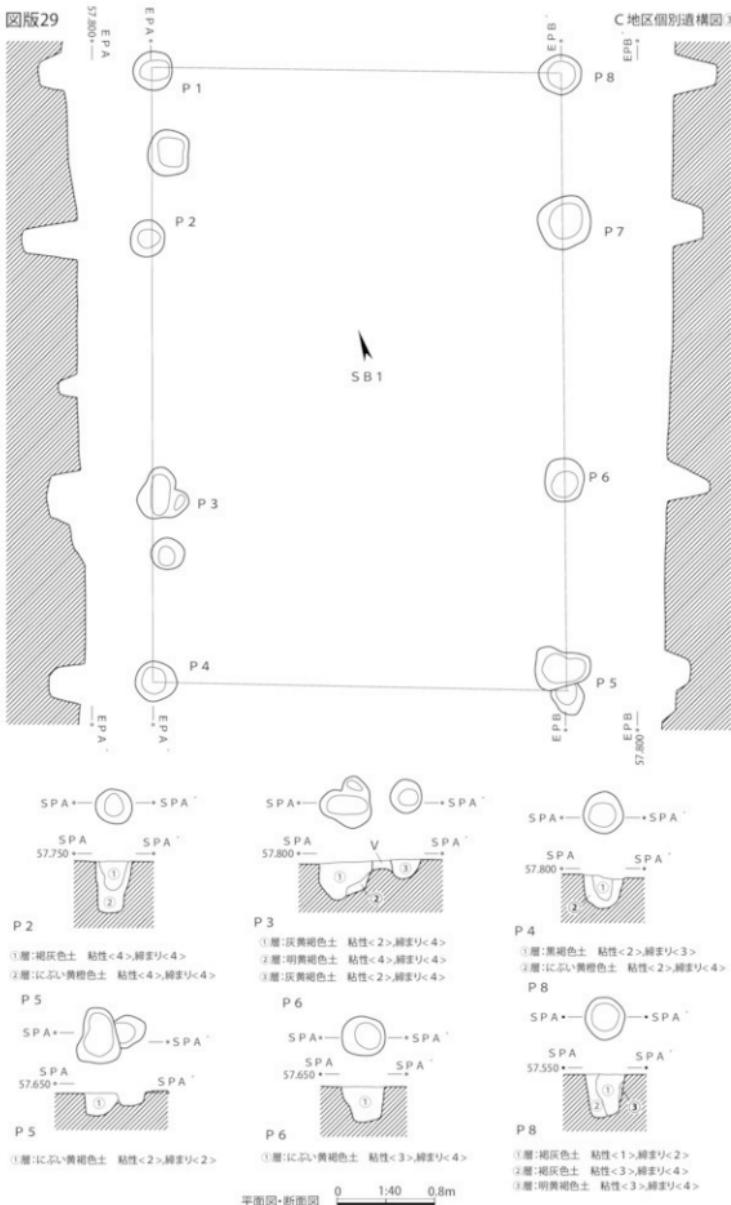


C地区個別地質構造図

図版28

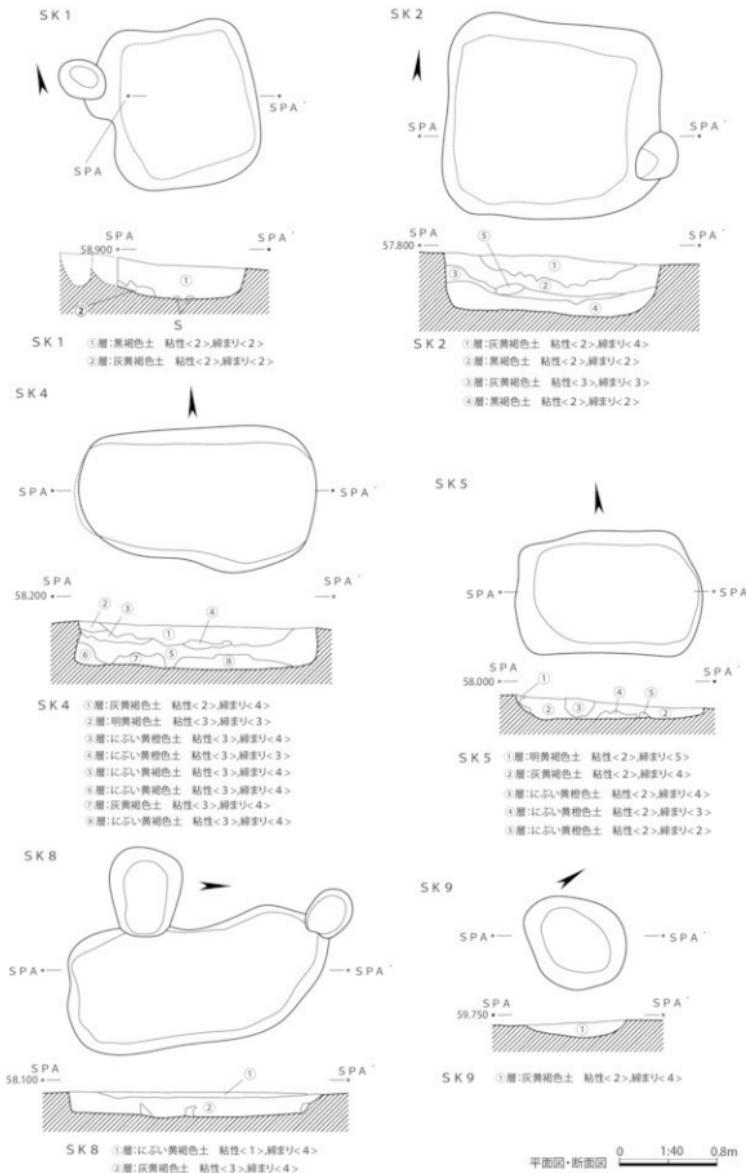


図版29



C地区個別構造図④

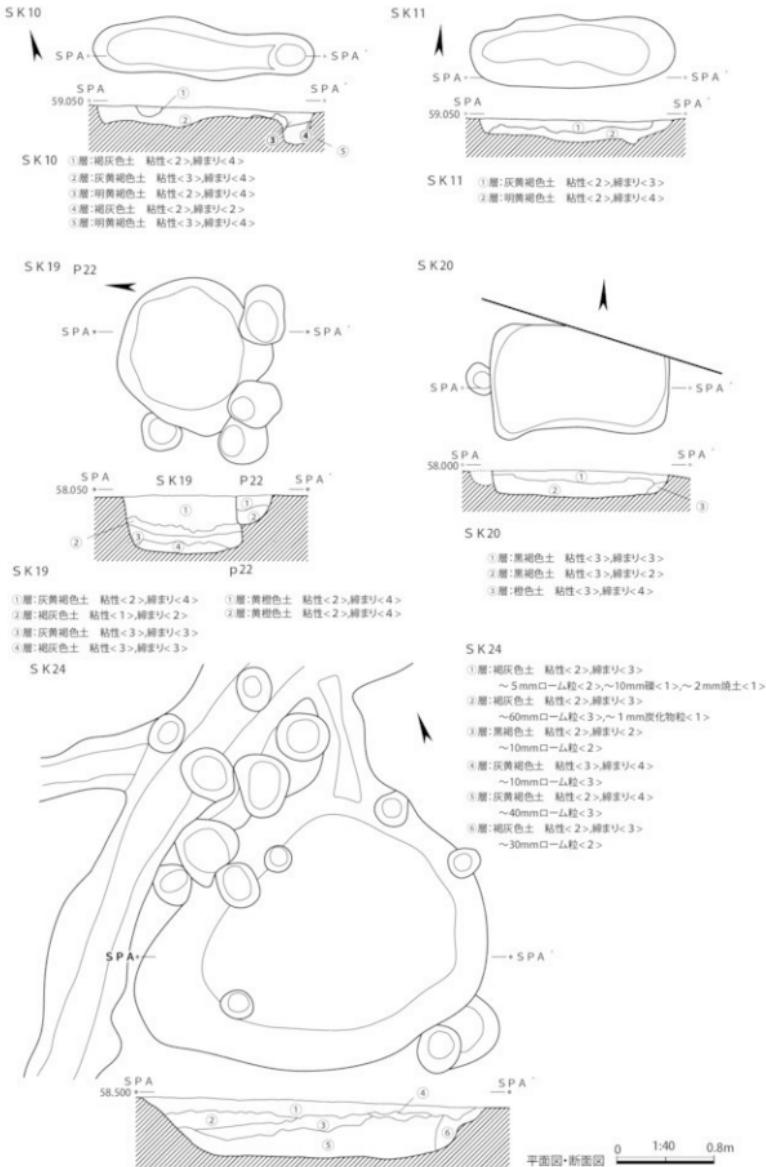
図版30



平面図・断面図 0 1:40 0.8m

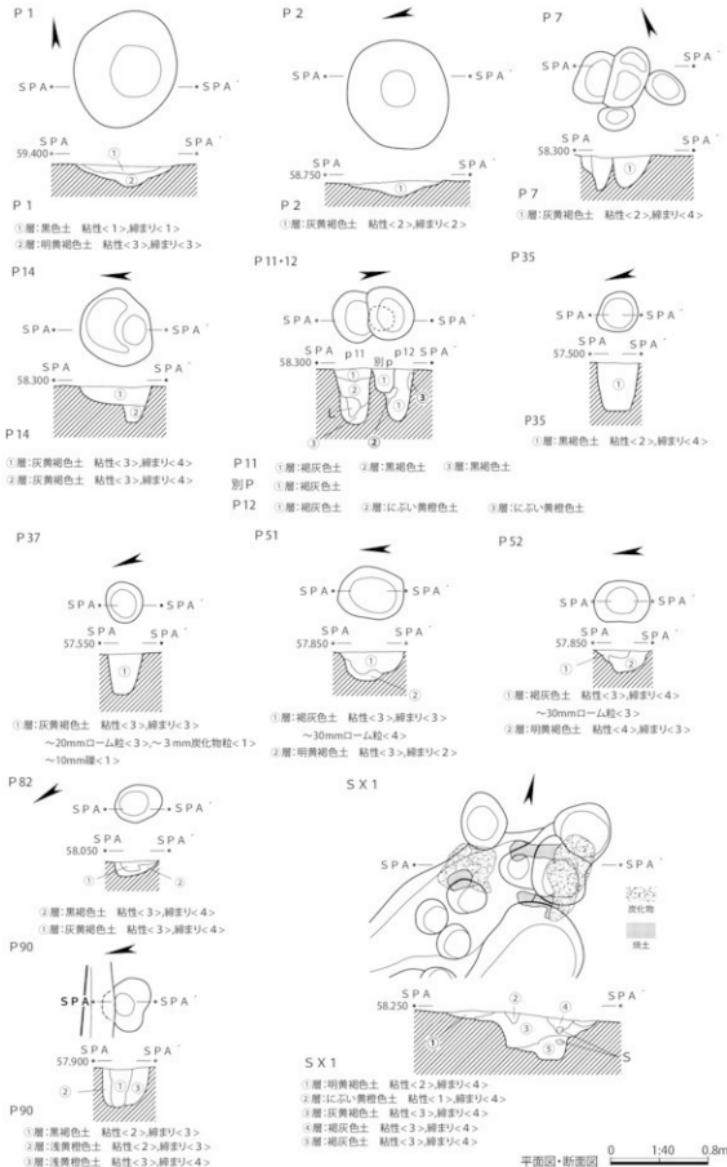
図版31

C地区個別透構図5



C地区個別構造図⑥

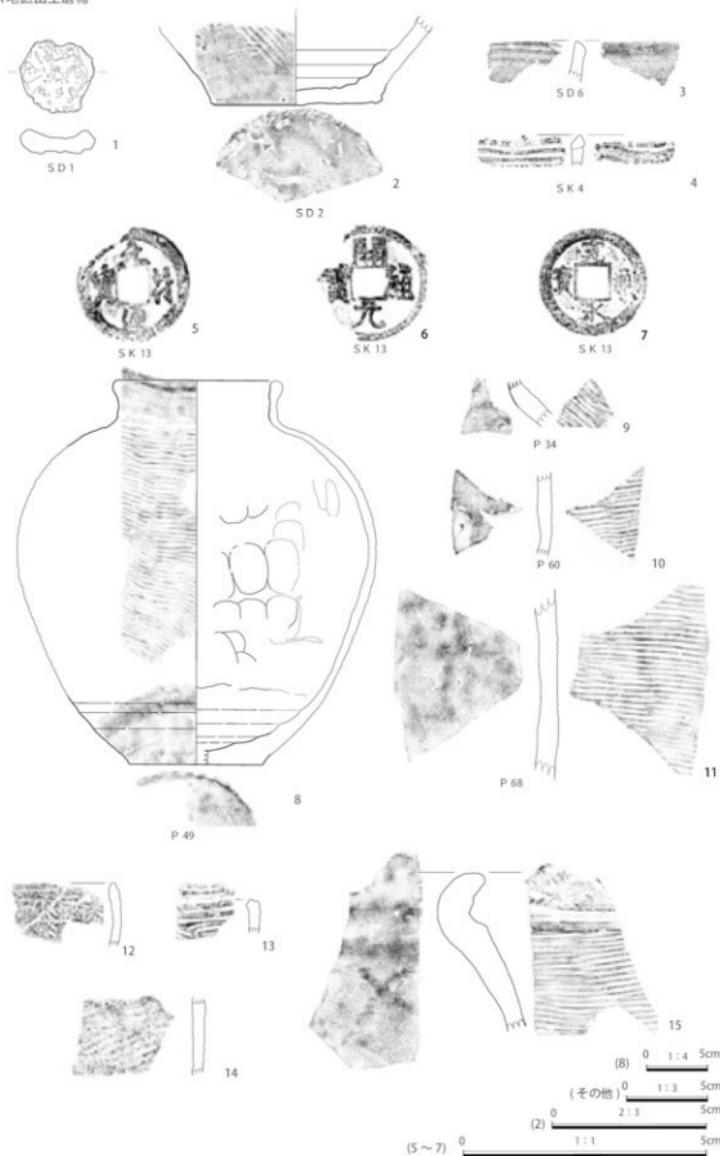
圖版32

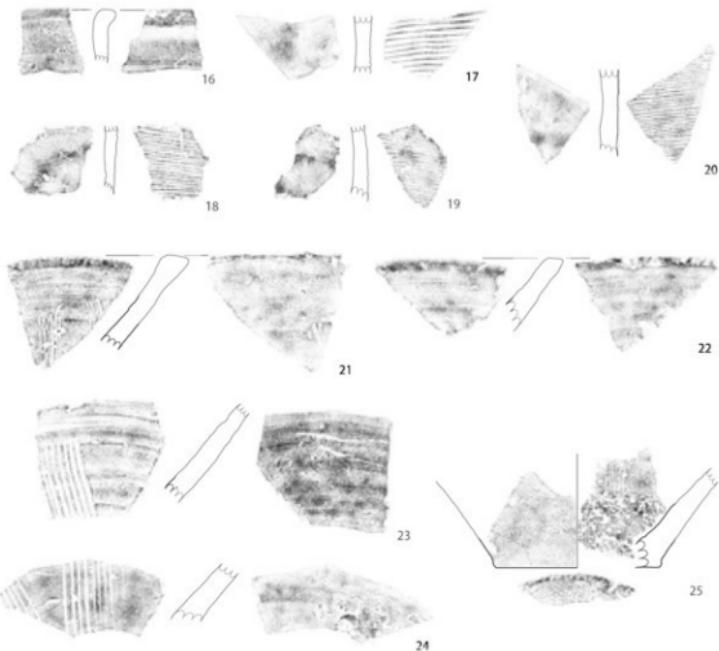


図版33

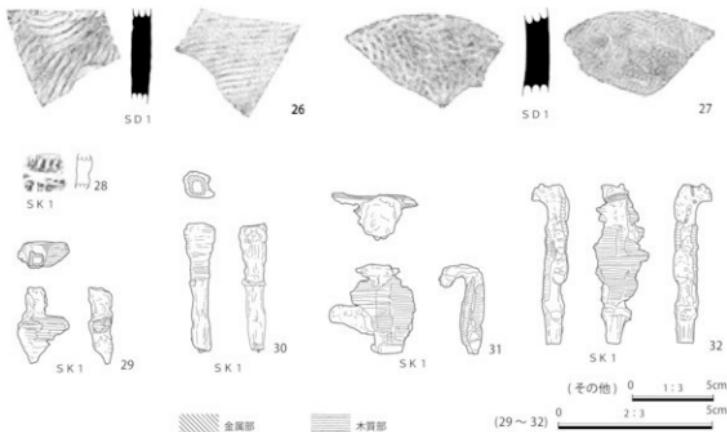
A地区出土遺物①

A地区出土遗物



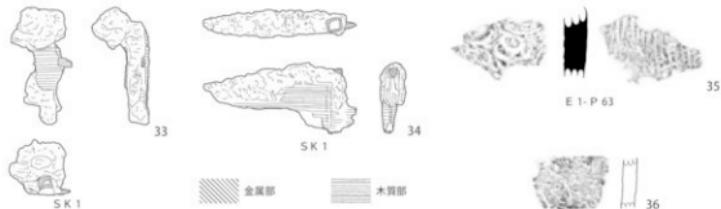


B地区出土遺物

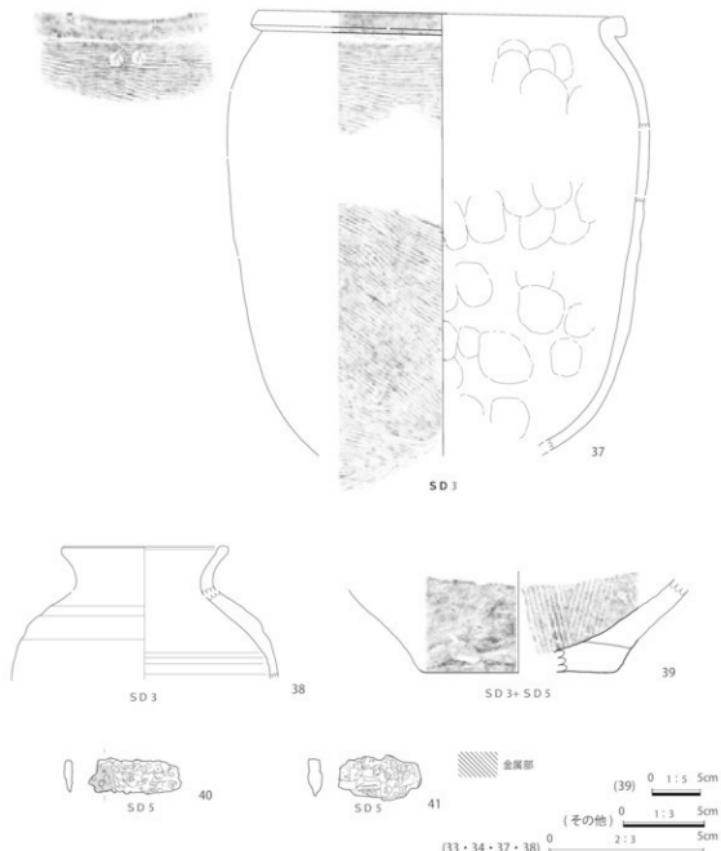


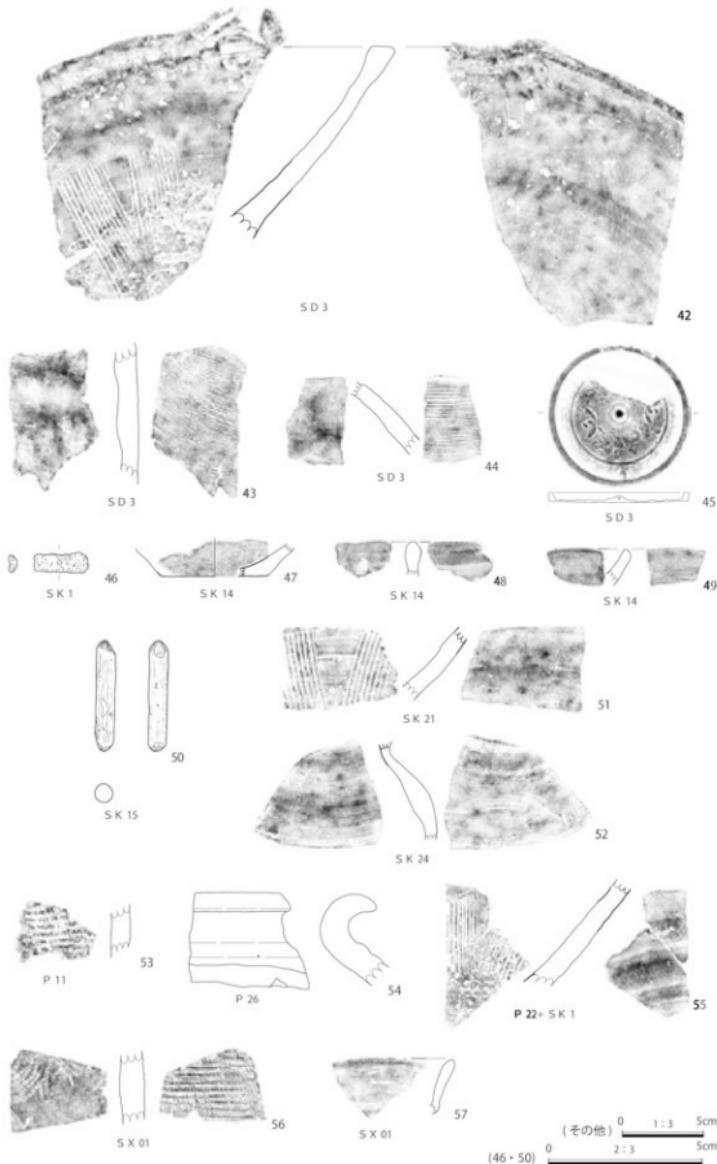
図版35

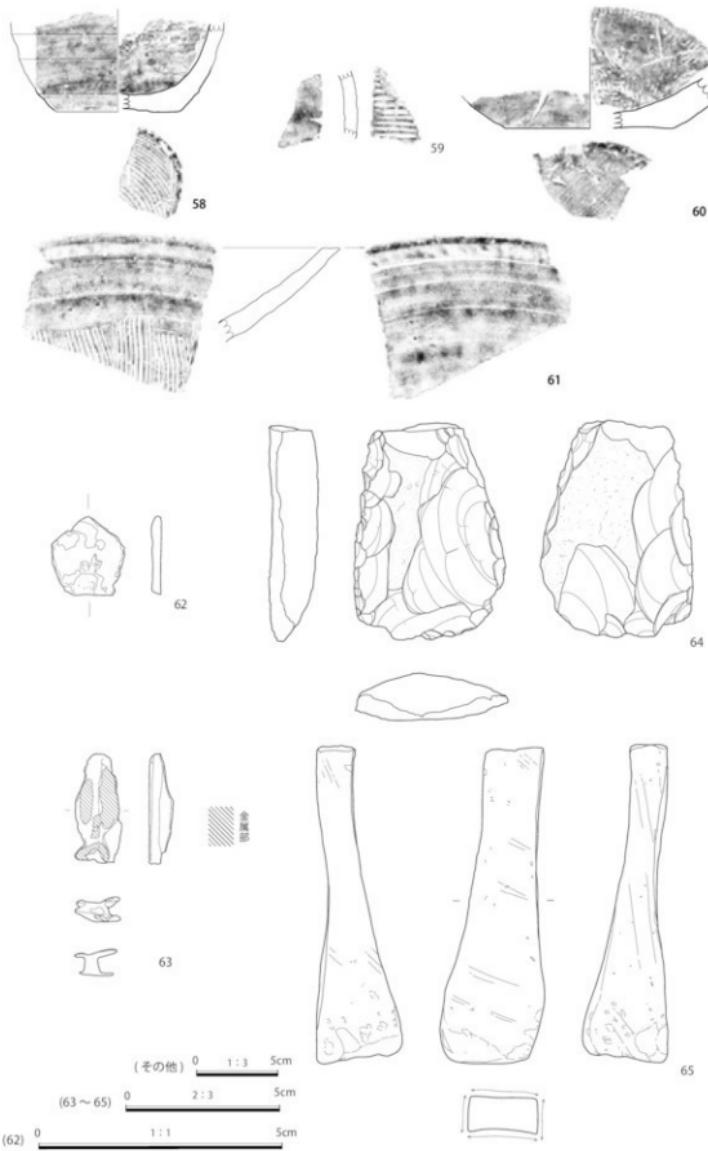
B地区出土遺物②・C地区出土遺物①



C地区出土遺物









遺跡全景 西から



遺跡全景 北東から



A地区完掘状況 空中写真



B地区完掘状況 空中写真



C地区完掘状況 空中写真



A地区北半側 空中写真 南より



B地区 空中写真 北より



B地区 空中写真 南より



C地区 北端 空中写真

図版41



表土剥ぎ 南西から



A地区調査写真①
包含層の掘削開始 南から



包含層の掘削 西から



遺構検出作業 南から



S D 1 完掘状況 南より



S D 2・3 ベルト土層断面 南から



S D 2 珠洲焼底部出土状況 西から



S D 6 完掘状況 東から



SB 1・2 完掘状況 西から



SB 3 完掘状況 西から



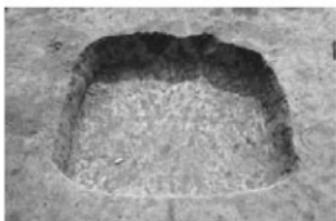
SK 2 (井戸状遺構) 半截状況 東から



SX 1 半截状況 南西から



SK 6 半截状況 西から



SK 7 完掘状況 西から



SK 9 完掘状況 南から



SK 10 半截状況 西から

図版43

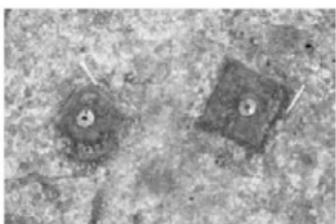
A地区調査写真③



S K11半截状況 南から



土坑群完掘状況 東から



S K13銭貨出土状況 南西から



S K13完掘状況 南から



S K16半截状況 南から



S K17半截状況 東から



P 49遺物出土状況 西から



P 60遺物出土状況 南から



遺構検出作業 北西から



B地区北端作業風景 北から



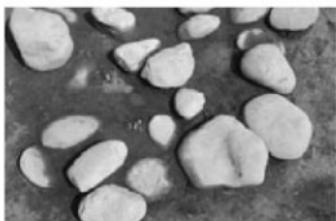
SD 1遺物出土状況 東から



SD 4・5完掘状況 東から



SK 1確認状況 北東から



SK 1 硫・和釘出土状況 東から



SK 1半截状況 北東から



植栽痕列と鉢状溝検出状況 東から



造構棲出作業 西から



拡張区造構掘削作業 南から



SD 1 完掘状況 東から



SD 3 片口鉢出土状況



SD 3 和鏡出土状況 西から



SD 3 和鏡出土状況 西から



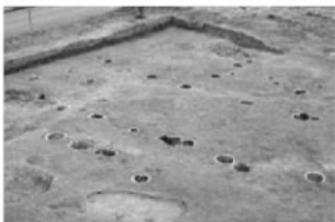
SD 3 珠洲焼出土状況 西から



SD 3 完掘状況 西から



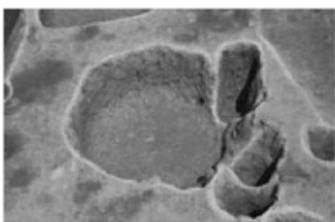
SB 1 完掘状況 東から



SB 1 完掘状況 南西から



SK 1・2 完掘状況 西から



SK 19・P 22 完掘状況 西から



SK 18 完掘状況 西から



SX 1 確認状況 西から

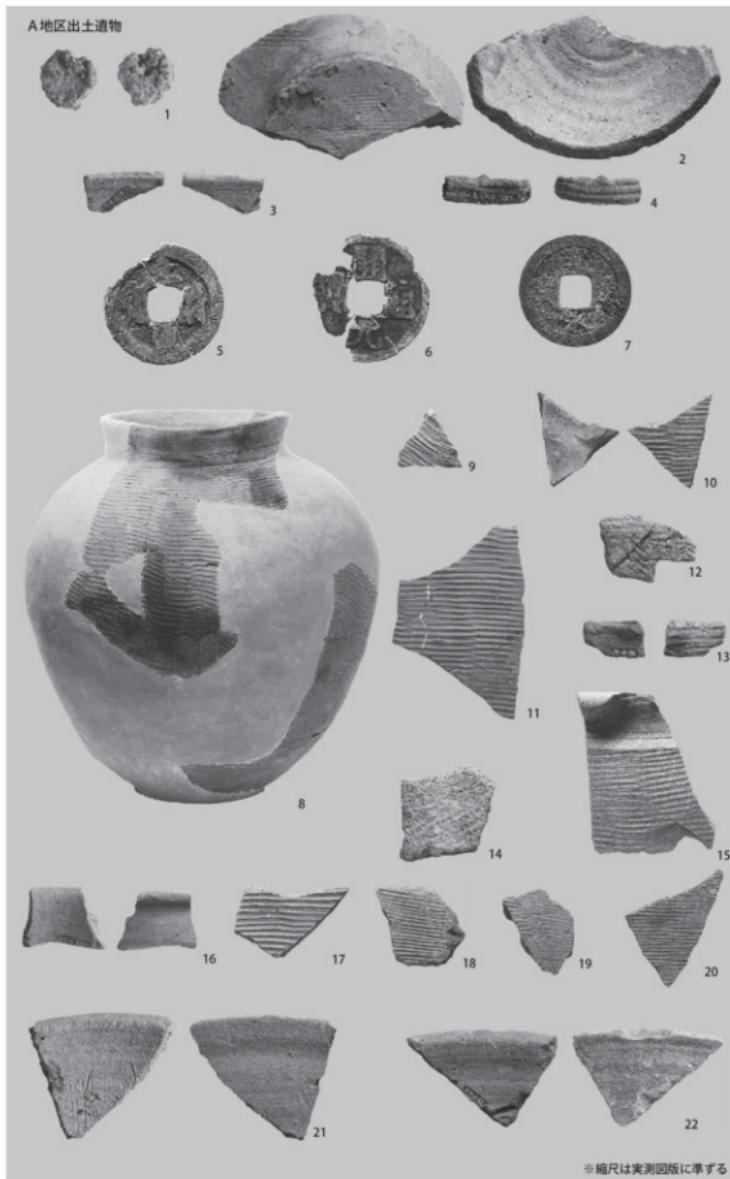


現地説明会

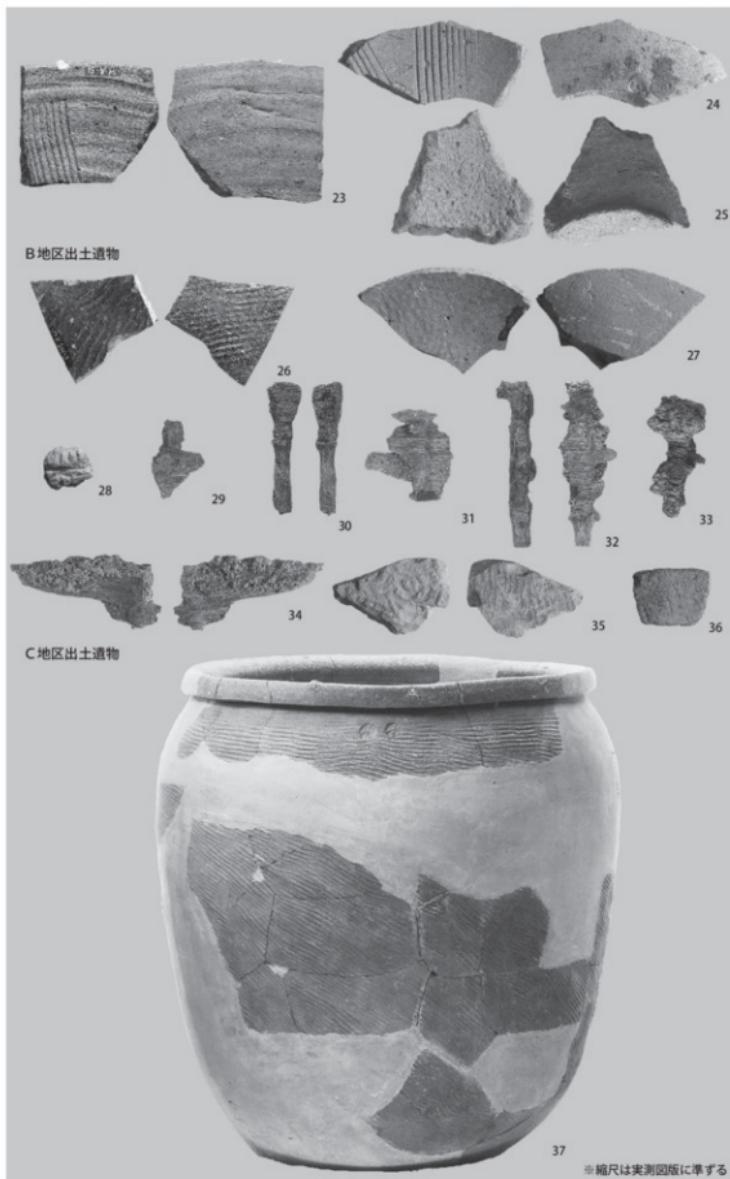


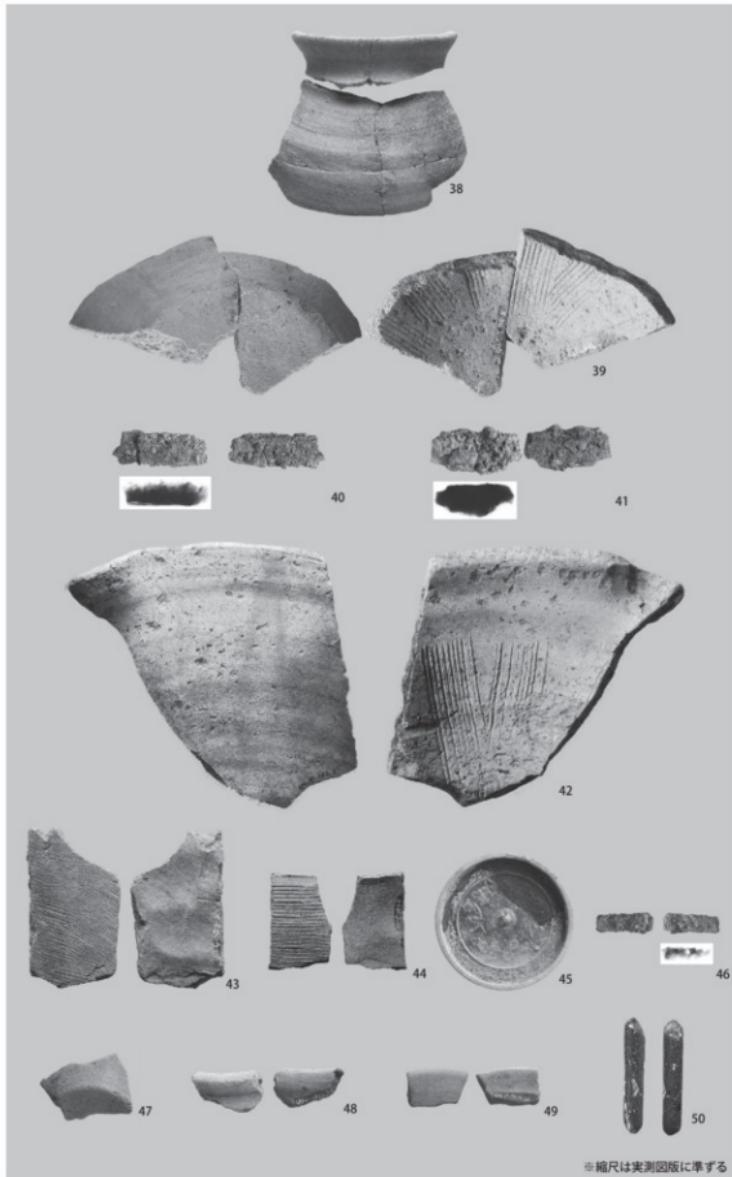
航空写真測量

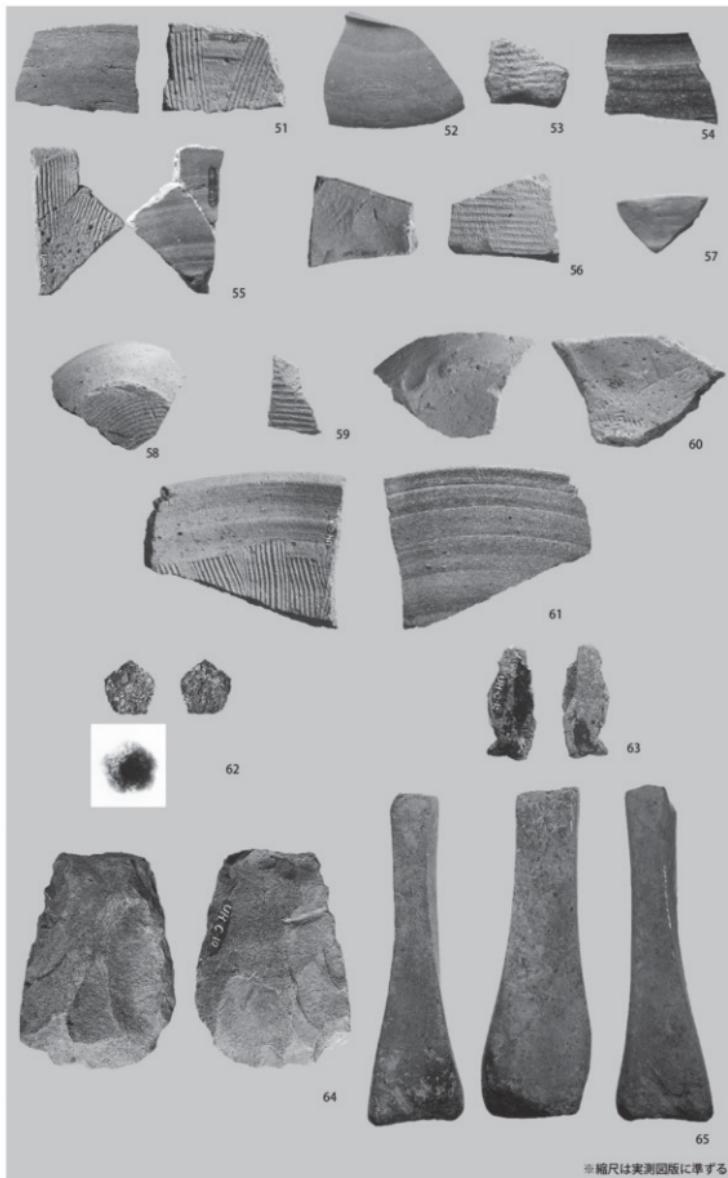
A地区出土遺物



※縮尺は実測図版に準ずる







※縮尺は実測図版に準ずる

図版51

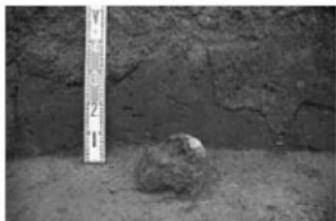
試掘調査写真①



1 T 完掘 西から



2 T 完掘 東から



9 T 繩文土器出土状況①



9 T 繩文土器出土状況②



11 T 2 完掘 東から



16 T 完掘 西から



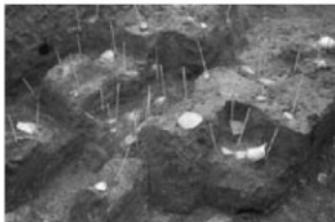
18 T 完掘 西から



24 T 1 完掘 西から



23 T 3 溝完成掘 西から



23 T 4 遺物出土状況 東から



23 T 4 遺物出土状況② 東から



23 T 4 焼土及び遺物分布 北から



23 T 4 焼土分布 北から



23 T 4 調査風景



32 T 遺物出土状況 東から



33 T 完成掘 東から



報告書抄録

ふりがな	うらはたいせき							
書名	浦烟遺跡							
副書名	市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則・石坂圭介・建部真也・青木豊・卜部厚志							
編集機関	長岡市教育委員会・有限会社ベンタラボ							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2008年1月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
浦烟遺跡	新潟県 長岡市 来迎寺889番地 1ほか	15021	448	37° 23° 37°	138° 46° 36°	20070326 ～ 20070620	4,100m ²	市道改良工事
所取遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
浦烟遺跡	集落跡	縄文時代晚期	なし	繩文土器・打製石斧・ バステル形石製品			鎌倉時代前期の和鏡が 出土した。	
		奈良～平安時代 (7世紀末～8世紀 前半、9世紀後半 以降)	土坑	土師器・須恵器・刀子				
		中世 (13世紀～15世紀 前半)	掘立柱・建物 跡・溝状遺構・ 井戸状土坑・ 土壙・ビット・ 焼土遺構	珠洲焼・和鏡・刀子				

浦畠遺跡

一市道改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一

平成20年1月20日 印刷

平成20年1月25日 発行

発 行 長岡市教育委員会
印刷・製本 株式会社第一印刷所
